527
6
527-16
1200501495051

28 9 9

岡本綺堂著

綺堂戯曲集

第十二卷

東京 春陽堂版

527-16

第十二卷 目次

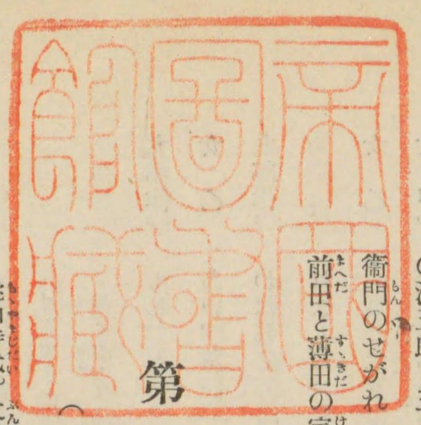
五右衞門の釜……一
正雪の二代目……六五
牡丹燈記……一五六
三河萬歲……二〇三
水野十郎左衞門……二九九
時雨ふる夜……三六一
新宿夜話……三八九

五右衛門の釜

昭和二年八月作。

昭和二年十月。帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割——若松左近（市川左團次）左近の妻おむら（尾上梅幸）弟子源七（守田勘彌）茂平（澤村田之助）千次（坂東しうか）河内の源五郎（尾上松助）前田玄以法印（尾上幸藏）薄田隼人正（澤村宗十郎）三上の勘六（助高屋高助）里の娘おいよ（澤村訥升）石川五右衞門（松本幸四郎）など。



登場人物——若松左近。左近の妻おむら。左近の弟子源七。おなじく茂平。千次。河内の源五郎。三上の勘六。里の娘おいよ。前田玄以法印。薄田隼人正。石川五右衞門。五右衞門のせがれ一郎。百姓九郎作。大佛餅の女。餅を買ふ女、子供。捕手。往來の男、女。前田と薄田の家來。獄卒。仕置の見物人など。

第一幕

（一）

桃山時代。文祿末年の冬。

京都、大佛堂のほとり。大佛餅の店さき。瓦ぶきの軒の上には『大佛御餅所』と記せる破風作りの額看板をあげ、軒には、『洛東名物大佛餅』と染めたる暖簾をかけてあり、店の上のかたには商賣物

五右衞門の釜

の餅をならべ、中央は土間にて、奥へ出入りの暖簾口あり。下のかたは粗き格子に簾をかけ、その
なかは仕事場と知るべし。店の前には長床几一脚を置いてあり。
（店の女甲は店のなかで餅をつゝんでゐる。女乙は店さきに立つてゐる。男の兒を連れたる女ひと
りは床几に腰をかけて待つてゐる。旅すがたの九郎作は笠を持ちて立つてゐる。仕事場にては餅を
搗く音きこゆ。）

九郎作。　もし、もし、これが京の名物大佛餅でございますか。
女　乙。　あい、あい。左様でございます。どうぞお土産にお求めなされませ。
九郎作。　わたしは河内の在の者でござるが、京へ上つたら大佛餅をみやげに買つて來てくれと頼ま
れました。もし、これだけ賣つて下さりますまいか。（小錢を出す。）
女　乙。　ありがたうございます。では、ちよつとお待ち下さりませ。（錢をうけ取つて店へあがる。）
女　甲。　（餅の包みを持ちて表へ出る。）どうもお待たせ申しました。
女。　いつも御繁昌で結構でございますな。
女　甲。　それでも此頃はお寒くなりまして、大佛様の御參詣もめつきり減りましたので、いつも程
ではございません。
女。　ほんに今日もどうやら時雨れかゝつて來ました。さあ、降らないうちに行きませう。
女　甲。　毎度ありがたうございます。
男の兒。　餅を一つお呉れよ。
女。　はて、行儀のわるい。家へ戻つてから喫べるのぢやと云ふに……。
（女は男の兒を連れて下のかたへ去る。このあひだに乙も餅を包みて出づ。）
九郎作。　はい、はい。（包みを受取る。）それからまことに御無心でございますが、白湯でも水でも一
杯振舞うては下さらぬか。朝から京めぐりをしたので、喉が渇いてなりませぬ。
女　乙。　はい、はい。（暖簾口より奥に入る。）
女　甲。　まあこゝへお掛けなされませ。
九郎作。　それではお邪魔をさせて貰ひます。（床几にかける。）唯今大佛さまを拜んで來ましたが、實
に廣大なものでございますな。
女　甲。　奈良の大佛様はどのやうに大きいか、まだ拜んだこともございませぬが、こゝの大佛さま
も立派なものぢやと、どなたも驚いておいでなされます。
九郎作。　まつたくわたしも驚きました。あのやうな立派なものを建立なされると云ふのも、やつぱ

り太閤様の御威勢でござりますな。

女　甲。そのお蔭でわたくし共の店までも、大佛餅といへば近國まで評判の高いものになりました。

女　乙。（茶碗に湯を汲んで出づ。）隨分沸いて居りますから、氣をおつけなされませ。

九郎作。これは有難うござる。成程これは熱さうだ。（茶碗をうけ取りて下に置く。）

女　甲。お湯をお飲みなさるなら、お餅も一つ召上つたら如何でござります。

九郎作。いや、いや、これは大事のみやげ物でござる。めつたに食ひ減らしてはなりませぬ。

（女ふたりは笑つてゐる。九郎作は湯を吹きながら飲んでゐる。）

女　甲。（空をみる。）ほんに又時雨れかゝつて來た。

女　乙。けふは取分けて寒いやうぢや。

九郎作。北山時雨とかいふことを聞きましたが、その時雨の降る今頃が一番寒いのでござらうな。

女　甲。どうも底冷えがしてなりませぬ。

（下のかたより若松左近の弟子源七、廿二三歳、出で來りて店さきを行き過ぎる。）

九郎作。（たち上る。）もし、もし、そこへ行くのは源七どんではないかな。

源　七。（立ちどまる。）わたしを呼んだのは……。

九郎作。（進みよる。）これ、これ。おれを見忘れたか。

源　七。おゝ。九郎作どんか。しばらく逢はぬので、つい見損じました。（なつかしさうに。）いつも達者で結構でござるな。

九郎作。おまへも達者で、まあ目出たい、めでたい。

（ふたりは床几に腰をかける。）

源　七。して、京へは何しに上られた。

九郎作。娘が京へ奉公に出ることになつたので、それを送りながら一緒に上つて來たが、お目見得も先づ無事に濟んだので、ついでに二三日のあひだ名所見物をして、あしたは村へ歸る積りだ。なにしろ好いところでお前に逢つたな。おやぢどんは此頃どうしてゐる。

（源七はだまつてゐる。）

九郎作。もう七八年も逢はないうちに、親父どんは死んだか。

源　七。なか〳〵死ぬどころか、相變らず元氣で暮してゐるやうでござりますが、もう一年ほども わたしの方へは姿をみせませぬ。

九郎作。では、おやぢどんと一緒にゐるのではないのか。

源　七。　御存じの通り、おやぢは酒を飲む、博奕をうつ、喧嘩をする、さん〳〵の不始末で、生まれ故郷にも居たゝまれず、わたしと一緒に夜逃げ同様に村を立退いて、一先づ京へ上つて來ましたが、まだ本當に身持が直らないらしいので、わたしも蔭ながら案じてゐます。（眉をひそめる。）まだ本當に身持が直らないか。それは困つたものだな。さうして、おまへは今どこにゐるのだ。

九郎作。　わたしは若松左近といふ釜師の内弟子に住み込みました。

源　七。　釜師といふのは、釜をこしらへる職人だな。

九郎作。　重に罐子を作るのでございます。

源　七。　罐子とはなんだな。

九郎作。　お茶の湯の釜でございます。

源　七。　むゝ、さうか、さうか。此頃はお茶の湯が大層流行るといふから、その釜を作る職人は定めて忙がしからう。おまへも好いところへ住み込んで仕合せといふものだ。そこで、おやぢどんの居所はわからないのか。

九郎作。　此頃はどこにゐるか判りませぬ。丁度去年の今頃でございました。日の暮れがたに三條を通りますと、長い橋のまん中で親父にばつたり出逢ひましたので、喜んで聲をかけますと、おやぢは碌々に返事もせず、ふところから一枚の小判を出してくれまして、達者でゐろと云つたばかりで、どこへか消えるやうに立去つてしまひました。

源　七。　小判を一枚……。そんな大金をくれるやうでは、親父どんもよつぽど、、、が好いとみえる。大かた博奕にでも勝つたのだらうな。

九郎作。　そんなことかも知れませぬ。

源　七。　それぎりお前のところへ影も形もみせないのか。

九郎作。　（うつむいて。）はい。

源　七。　それでもたまに逢へばすぐに金をくれる……。そこがやつぱり親子の人情だな。なんと云つても取る年だから、親父どんもそのうちにはだん〳〵おとなしくなるだらう。まあ、そんなことは餘り苦勞しないで、自分の仕事に苦勞するがよからう。おまへが立派な腕前になつて、太閤樣のお茶道具でも作るやうになれば、それこそ天下一の職人だ。わたしも蔭ながら出世を祈つてゐますぞ。

九郎作。　ありがたうございます。實は今日、親方は伏見のお城へ召されました。

源　七。　五右衛門の釜

九郎作。　伏見のお城へ……。太閤様の御所へ召されたのか。では、定めて何かの御用であらうな。

源　七。　大かたさうであらうかと、樂みにしてゐますが……。

九郎作。　おまへの親方といふのは餘ほどの名人か。

源　七。　（誇るが如く。）當時みやこに隱れもない葦屋釜の名人で、太閤様からも一度御用を仰せ付かつたことがあり、そのほかの大名衆のお屋敷へもたび〳〵お出入りをしてゐますよ。

九郎作。　むゝ。河内の國の百姓のせがれが、さういふ名人のお弟子になつたといふは、いよ〳〵おまへの仕合せだ。くどいやうだが、精を出しなさいよ。

源　七。　はい、はい。

（この時、向うより三上の勘六は石川五右衞門のせがれ一郎を連れて走り出づ。一郎は八九歳の少年にて、旅姿をしてゐる。）

勘　六。　もうすぐに追手が來る。早く來なさい。

（勘六はあとを見返りながら、一郎を引摺るやうにして急ぎ來る。一郎はつまづく。）

一　郎。　（せいて。）どうも困つたな。それ、もうすぐに追手が來る。

勘　六。　（勘六は一郎を脊負ひて逃げようとする時、後より捕手四人が追ひ來るに、源七と九郎作はおどろいて床几を起つ。店の女ふたりは奥の暖簾口へ逃げ込む。勘六は防げども力及ばず、一郎の捕はるゝを見捨てゝ上のかたへ逃げ去るを、捕手二人は追つてゆく。殘る捕手二人は一郎に繩をかける。）

捕　手。　さあ、立て、立て。

（捕手は一郎を引立てゝ、元來し方へ立去る。源七と九郎作は顏をみあはせる。）

九郎作。　これは一體どうしたのだ。

源　七。　なにかのお捕物らしい。

九郎作。　あんな小さい子供がお召捕になるほどの惡いことをする筈もあるまい。大かた親か兄弟のまきぞへだらう。惡い身寄りを持つたものは……。（源七の顏をみて、氣の毒さうに云ひ紛らせる。）いや、眼の前であんなことを見せられて、おれも何だか怖くなつて來た。これからすぐに宿へ戻つて、あしたは早々に出立しませう。

源　七。　では、もうお別れでござりますか。

九郎作。　まあ、からだを大事にしなさるがいゝぞ。

源　七。　おまへも達者でお暮しなされませ。（店をみて。）おゝ、だれもゐないな。

九郎作。　五右衞門の釜

源　七。　今のさわぎで奥へ逃げ込んだとみえます。

（九郎作は下のかたへ立去る。源七はそのあとを見送る。時雨の音。）

源　七。　おゝ、いよ〳〵時雨れて来たか。

（源七は足早に上のかたへ立去る。奥より女ふたりは怖々出で来りてあたりを見まはし、床几などを片寄せる。時雨の音。上下より往来の男女五六人が雨にぬれながら摺れちがひて走りゆく。）

（二）

伏見街道、葦屋釜を作る職人若松左近の家。藁ぶき家根、竹縁。正面には奥へ出入りの暖簾口。壁の際には茶の湯の釜が二つ三つ置いてあり。よきところに爐を切つてあり。庭には枯れ残りたる紅葉の立木、寒菊、枯芒などあり。上のかたに井戸あり。下のかたには丸太を立てたる門口、低き垣を結つてあり。表は立木を隔てゝ、冬ざれたる田畑が遠くみゆ。

（左近の妻おむら、廿六七歳、爐のまへに坐りて湯を沸してゐる。弟子の千次は井戸の水を汲んでゐる。時の鐘きこゆ。）

千　次。　おゝ、鐘が鳴る。もう申の刻か。冬の日はみじかいな。

おむら。　（みかへる。）ほんに冬の日は短い。（起つて縁に出る。）旦那どのは遅いことぢや。（千次に。）源七もまだ戻らぬかえ。

千　次。　源七は京の釜座まで行きました。

おむら。　それはわたしも知つてゐるが、いつもよりは戻りが遅いではないか。

千　次。　さつきの時雨で、どこにか雨やどりをしてゐるのかも知れませぬ。

おむら。　大かたそんな事であらう。毎年のことながら、今は時雨の多い時節ぢや。（空をみる。）それでも好い塩梅に雲が切れて、薄日のひかりが洩れて来た。この間に早く戻つて来ればよいが……。又ふり出して来ぬうちに、おまへも早く水を汲んでしまや。

千　次。　あい、あい。

（おむらは爐の前に戻る。千次は水を汲み終りて、庭傳ひに奥へゆく。下のかたより里の娘おいよ、十七八歳、門口に来りてそつと内を覗く。薄く時雨の音〳〵）

おむら。　又ふり出したか。晴れるかと思へばすぐに降る。（云ひながら表を見る。）そこにゐるのは……。おいよさんではないか。

おいよ。　（よんどころなく。）あい。

五右衛門の釜

おむら。降つて來たのに、なぜ表に立つてゐるのぢや。早く內へ這入つたがよいではないか。

おいよ。あい。（まだもじ〳〵してゐる。）

（上のかたの奥より千次出づ。）

千次。おゝ、おいよさんか。（手を掉る。）源七は留守だ、留守だ。

おいよ。どこへ行きました。

千次。京の釜座まで行つたのだが、大かた戻りには柳の馬場へでも廻つて、美しいおやまの顔でも見てゐるのであらう。

おいよ。え。

おむら。はて、埒もない。冗談にもそんな悪いことは云はぬものぢや。あの源七に限つて、柳の馬場の、おやまのと、そんなことのあらう筈も無し、又そんなことの出來る身分でもない。（おいよに。）なにしろそんなところで濡れてゐてはならぬ。兎もかくもこつちへ這入つたがよい。

千次。さあ、お許しが出たのだ。遠慮なしに通つた、通つた。（木戸をあける。）

おいよ。（きまり惡さうに內に入る。）毎度お邪魔にまゐります。（緣に腰をかける。）

おむら。（笑ひながら。）源七ももう來年は年季の明ける身の上で、その曉にはおまへのお婿になることは、親達もかねて承知の仲ぢや。若い同士の浮氣や色戀とは譯もちがへば、誰に遠慮をすることもない。千次も詰まらぬことを云つて、からかつてはなりませぬぞ。

千次。でも、あんまり遠慮が無さ過ぎるので、三度に一度はからかつて見たくもなるのだ。（おいよに。）おれも愼むが、おまへも些と愼まつしやいよ。源七とあんまり仲が好過ぎるぞ。

おむら。まだそんなことを云つてゐるのか。わたしの云ふことを肯かぬと、旦那どのに屹と叱らせるから、さう思つてゐや。

千次。女同士とは云ひながら、おかみさんは兎角おいよさんの贔屓ばかりするな。

おむら。なんの、わたしに限ることか。どんな宣が見ても、お前のやうな憎らしい惡戲者よりも、おとなしいおいよさんの方が可愛からうではないか。

千次。やれ、やれ、これは御挨拶だ。

おいよ。（いよ〳〵きまり惡さうに。）別に用があつて來たのでは無し、源七さんが留守ならば、もうお暇をいたしませう。（起ちかゝる。）

千次。源七が留守ならすぐに歸るか。いや、現金だな。まだ少し降つてゐるやうだ。おれが傘を

さして途中まで送つて遣らうか。

おいよ。いえ、いえ、雨はもう止みました。おかみさん、御めんなさい。

（おいよは早々に下のかたへ立去る。千次は笑ひながら見送る。）

おむら。誰しも若いうちが花ぢや。（ひとり言のやうに。）わたしも一度はあんな時があつた。

千次。（聞き咎めるやうに。）では、おまへと親方にも、昔はそんなことがあつたのかえ。

おむら。（笑ふ。）ありさうには思はれぬかえ。

千次。仕事にかゝると、いつでもむづかしい顔ばかりしてゐる親方にも、全くそんなことがあつたのかな。（首をかしげる。）

おむら。あつたればこそ斯うして夫婦になつてゐるのではないか。その時のことを話して聞かさうか。

千次。さあ、聞きたいやうな、聞きたくないやうな。なんと返事をしたものかな。

おむら。聞きたくなくば話さぬまでぢや。身におぼえのない者には、話して聞かせてもわかるまい。

（おむらは矢はり笑つてゐる。時雨の音。）

おむら。お前にからかつてゐるうちに、雨が又強くなつて来た。

千次。まつたく此頃の天氣には困つたものだ。

おむら。旦那どのも源七も何をしてゐるか。

（時雨の音。向うより若松左近、三十二三歳。その弟子茂平と共に伏見の城より退りし體にて、雨を厭ひながら急ぎ出づ。）

千次。おゝ、親方が戻られた。

（千次は出迎へる。おむらも起つて縁に出る。）

おむら。あひにくの天氣でござりましたな。

左近。このごろの習と覺悟して出たが、途中で幾度も降られたので、いや、濡れた、濡れた。

おむら。ほんに隨分ぬれました。奥へ行つて早く着かへたが好うござんす。茂平も濡れたまゝでゐると風をひく。おまへも早く着かへたがよい。

（おむらは左近を伴ひて奥の暖簾口に入る。）

千次。して、けふの御召しはなんであつたな。

茂平。（縁に腰をかける。）おれはお供をして行つたばかりで、勿論くはしいことは知らぬが、どうも首尾が好くなかつたやうだぞ。

千次。首尾がよくなかつた……。（考へる。）いづれ何かの御用であらうが。

茂平。御用は御用だが、それを親方が斷つたらしいのだ。

千次。御用を斷つた……。（又かんがへる。）なぜであらうな。

茂平。おれにも判らぬ。

千次。途中でなんにも聞かなんだか。

茂平。親方はたゞ默つてゐた。

千次。不思議だな。

茂平。不思議だよ。

千次。（不安らしく。）お上の御用を斷つて、お咎めはないだらうか。

茂平。無いとは云へない。なにをいふにも相手は太閤様だからな。（たち上る。）寒い、寒い。早く着物を着かへて來よう。

（茂平は上のかたへ行きかゝるを、千次は又ひきとめる。）

千次。まあ、待つてくれ。そのお咎めを受けるときには、親方ひとりで濟むだらうか。濟んでも濟まないでも仕方がない。親方の災難は弟子の災難と覺悟してゐればいゝのだ。

（いよ〳〵不安らしく。）お前はもう覺悟してゐるのか。ひどく思ひ切りがいゝな。

茂平。今さら逃げ出すわけにも行くまいではないか。

千次。そんなことを云つて、お前はおれを嚇すのではないかな。

茂平。なんで嚇すものか。覺悟しろ、覺悟しろ。

（云ひすてゝ茂平は上のかたの奥へ去る。）

千次。おい、おい。おまへの云ふことが何うも呑み込めないぞ。もう一度よく話してくれ。

（千次も茂平のあとを追つてゆく。雨やむ。奥より左近は着物をきかへて、おむらと共に出づ。）

左近。湯を一杯くれ。

おむら。あい、あい。（茶碗に湯をついで出す。）

左近。むゝ、寒かつた。（湯を飲む。）けふは隨分寒うござんしたな。

おむら。早速ながら今日のお召しは何事でございました。

左近。（しづかに。）先づ何事だと思ふ。

おむら。お茶の湯のお道具のお誂へでございませう。

左近。おれもさう思つてゐた。葦屋釜を作る若松左近に、ほかの御用のある筈がない。そこで、

おむら。けふ登城してみると、いや思ひのほかの御用で、おれも實におどろいた。

左近。思ひのほかの御用とは、どんなことでございます。

おむら。おれに釜を作れとあるのだ。

左近。釜を作るのはお前の職、それが何で思ひの外で……。

おむら。一と口に釜と云つても、お茶の湯の風呂にかける釜を作るのがおれの職だ。今までに飯を焚く釜さへも作つたことはない。まして人を煮る釜などを……。

左近。人を煮る釜を……。

おむら。それだからおれも驚いた。今まで些とも知らなんだが、なんでも十日ほども前の夜に、ひとりの曲者が太閤様の御寢所へ忍び込んだのを、そのときお夜詰めに居あはせた仙石權兵衛、薄田隼人正の二人が、首尾よく搦め取つたと云ふことだ。さりとは大膽至極の奴、一通りのお仕置では相濟まぬとあつて、三條の河原で釜煎りの刑に行はれる。その大釜を作れといふ御指圖だ。

左近。怖ろしいことでございますな。

おむら。まつたく怖ろしいことだ。勿論、それは今に始まつたことではない。重い仕置には磔、鋸びき、牛裂き、釜煎りなど色々あるさうだが、磔は格別、釜煎りの仕置などといふことは、どこの國でも近年めつたに行はれた噂を聞かない。それを都のまん中の三條河原で……。いや、どう考へても怖ろしい。大きい釜に熱油を沸らせて、そのなかへ生きた人間を投げ込むのだ。

左近。聞いてもぞつとするやうな。して、その投げ込まれる人は何者でございます。

おむら。いづれは知れることであるが、唯今の所ではその者の名を明かすことは出來ぬといふのだ。いや、それが何者であらうとも、たとひどのやうな大罪人であらうとも、人間を煮る釜などが作られるものか。おれは斷つた、すぐに斷つた。（やゝ興奮して。）若松左近は葦屋釜を作る職人でござります、お茶の湯の釜を作れとあらば何時でも御用をうけたまはりますが、生きた人間を煮殺す釜などは眞平御めん下さりませと、役人衆の前できつぱりと斷つて來た。

左近。御もつともでござります。（云ひかけて考へる。）それでお役人衆が承知なされましたか。

おむら。おれの斷り樣があまり激しかつたので、役人衆はしばらく默つておれの顏を睨んでゐたが、いづれ重ねて沙汰をいたすから、けふは此儘に下れと申渡された。

おむら。　さうでございましたか。

（おむらは溜息をついて考へてゐる。庭の上のかたより茂平は着物をきかへて出づ。）

茂平。　親方。細川様からお誂への釜はどうなされます。

左近。　おゝ、さうだ。この間からたび〳〵の御催促、もう二三日で仕上がるところだ。源七はどうした。

茂平。　釜座まで行つてまだ戻らぬさうでございます。

左近。　もう暮れるのに何をしてゐるのか。では、お前が仕事場へゆけ。

茂平。　あい、あい。

（左近は起つて奥に入る。茂平も上のかたへ引返してゆく。おむらはあとに残りて、ぢつと思案してゐる。向うより源七は足早に出づ。）

源七。　どうも遅くなりました。

（おむらは黙つて考へつゞけてゐる。）

源七。　途中で國の者に逢ひましたので、なにかの話が長くなつて、つい遅くなりました。もし、おかみさん……おかみさん。

おむら。　（みかへる。）おゝ、源七か。（起つて縁さきに出る。）これ、大變なことが出來たぞや。

源七。　何事でございます。

（おむらは源七の耳にさゝやけば、源七も顔の色を變へておどろく。）

源七。　それはなるほど大變でございます。おそらく無事には濟みますまい。

おむら。　飛ぶ鳥を落すはおろか、照る日をも曇らせる太閤様の御威勢。その御指圖に背いては、旦那殿の身の上はなんとならう。

源七。　きびしいお咎めは知れてゐます。現に先頃も柳の馬場のなんとやら云ふ遊女が歌舞妓踊をお斷り申したとかいふので、すぐに磔にかけられたとの事でございます。

おむら。　それ、その通りぢや。一旦は無事に戻されても、やがてはお召捕りに相成つて大かた死罪か磔か。（源七の手をつかむ。）これ、なんとかして旦那殿の命を助ける工夫はあるまいか。

源七。　いよ〳〵お咎めを受けるとなつたら、親方ばかりでは濟みますまい。おかみさんも弟子共も……。（辭をふるはせる。）きつと巻き添へを受けるでございませう。

おむら。　それだから猶のこと、旦那どのを始めとして、お前達やわたしまでが無事に濟むやうな思案はあるまいか。

五右衛門の釜

源　七。それもこれも御用をうけたまはりさへすれば濟むことでござりませうが、どうも親方の氣性では……。（考へる。）

おむら。たとひわたし達が意見するにしても、今が今では旦那どのも所詮肯くまい、先づそれまでの一寸逃れに……。

源　七。（あわてゝ。）よい智慧が泛びましたか。

おむら。その智慧をおまへに借りたいといふのぢやもの。

源　七、氣の小さいわたし等は途方に暮れてゐるばかりで、智慧も思案も泛みませぬ。お前はふだんから悧口な人、かういふ時によい智慧を絞り出してくださりませ。

おむら。わたしとても女のこと。この急場に乘つかゝつて、なんでよい智慧が出るものか。あゝ、どうしたらよからうやら……。（俄に思ひ付く。）これ、源七。

源　七、（再び源七の耳にさゝやけば、源七はうなづく。）

おむら。では、これからすぐに伏見のお城へ……。

源　七。これ。（あたりを見まはす。）幸ひに日も暮れかゝつた。ゆふ闇にまぎれて些とも早く……。お前、案内してくれるであらうな。

源　七。あい、あい。すぐにお供をします。（空をみて。）まあ、鳥渡お待ちなされませ。

おむら。（源七はそゝくさして、庭づたひに上のかたの奥に忍び入る。）それでもよいことを思ひついた。あしたになつたら取返しが付かぬ。

千　次。（おむらは身づくろひする。奥の暖簾口より千次は燭臺をとぼして出づ。）おかみさん、夕飯の支度はどうします。

おむら。もう暗くなりました。飯はもう焚いてある。旦那どのには乾魚をあぶつて上げたがよい。わたしには構はずに、おまへ達は先へ喫べてしまや。

千　次。（不思議さうに。）お前はこれから何處へか行くのかえ。

おむら。旦那どのにも茂平にもなんにも云つてはなりませぬぞ。さあ、早く奥へ行きや。

千　次。あい、あい。

（千次は呑み込めぬやうな顏をして奥に入る。上のかたより源七は二人分の簑笠をかゝへて出づ。）

源　七。今夜はまだ降るかも知れませぬ。雨具の用意をしてまゐりませう。

おむら。歸るまでには又一と時雨あらうも知れまい。いつそわたしは着て行きませう。

（源七はおむらに簑をきせて、自分は簑をかゝへる。）

おむら。うかゝしてゐて、旦那どのや茂平に見付けられてはならぬ。さあ、早く……。

源七。さあ、お出でなされませ。

（ふたりは笠を持ちて門口を出ようとする時、下のかたよりおいよ再び出づ。おむらは笠にて顔をかくす。）

おいよ。源七さん、今戻つたのかえ。

源七。（どぎまぎして。）むゝ。今戻つたが、又出るのだ。

おいよ。どこへ行くのでござんすえ。

源七。え、何。つい其處だ、そこだ。

（おむらと源七は足早に向うへ立去る。おいよは不審さうに見送る。奥より千次出で、あたりを見まはす。）

千次。あゝ、もう何處へか行つてしまつた。

（奥より左近出づ。）

左近。おむらが何處へか出て行つたといふのか。

千次。どうもその様子が仔細ありさうでござりました。

左近。むゝ。（考へるうちに不圖思ひ付いて、思はず叫ぶ。）あつ。

千次。（おどろいて。）え。

（左近はぢつと向うをみる。千次は左近の顔色をうかゞふ。おいよも内を窺ふ。薄く時雨の音。）

――幕――

第二幕

（一）

若松左近の家の裏庭。大釜を鑄るについて新に作りたる粗末の小屋のごとき建物にて、内には注連を張りまはし、火防愛宕神社のお符を貼りて、榊や神酒をそなへてあり。小屋の内は土間と知るべし。外には櫻の大樹、花は白く咲きみだれて、おぼろ月のひかりが内へも流れ込んでゐる。小屋のまん中には新しく出來あがりたる大釜を据ゑつけて、それに菰簀を被せ、左右には薪や枯枝の束ねたるを澤山に積みあげ、ほかに鑄物の道具なども色々あり、腰かけも二三脚あり。

五右衛門の釜

（第一幕の翌年、三月なかばの朧ろ月夜。源七は一本の蠟燭を立て、床几に腰をかけて居眠りをしてゐる。おいよはその傍に立つてゐる。蛙の聲きこゆ。）

おいよ。源さん。これ、源七さん。

源七。（眼をあく。）誰だ、誰だ。（すかし見る。）おゝ、おいよさん……。いつの間に來たのだ。

おいよ。お前は宵から居眠りをしてゐるのでござんすかえ。

源七。一度は鑄損じて毀れてしまひ、二度目に鑄直してやう〳〵出來あがつた此の釜だ。このあひだから三日ばかりは碌々に眠らなかつたので、夜も晝もうと〳〵と睡氣がさしてならぬ。

おいよ。（表を覗く。）おゝ、月が出たな。

源七。表は靜なおぼろ月夜で、蛙がしきりに鳴いてゐます。

おいよ。あの蛙の聲を聞いてゐると、猶さら薄ら眠くなつてならぬのだ。

源七。（釜をみかへる。）それでも立派に出來あがつて、先づ安心でござんすな。

おいよ。こんな大きい釜を作るのは、親方も初めてだと云ひ、おれ達は勿論初めての仕事だから、隨分人知れない苦勞をしたよ。まして太閤樣の御用といふのだからな。

（源七は床几を起つて釜のそばへ行く。おいよも附いてゆく。）

おいよ。こゝの親方も最初は斷つたと云ふではござんせぬか。

源七。併し斷つたらどんなお祟りがあらうも知れぬと、おかみさんも大變に心配して、親方には沙汰無しで、おれと一緒に伏見のお城へかけ付けて、先刻お斷り申上げたは親方の粗相で、御用は屹とうけたまはりますと、おかみさんから改めてお詫びを申上げたのだ。

おいよ。若しさうでなかつたら今頃は……。

源七。今頃どころか疾うの昔に、おれ達はどんなことになつてゐたか判るものか。

おいよ。ほんに思へば思ふほど、危ないことでござんしたな。して、この釜で煮られる人は……。

源七。おれも初めは知らなかつたが、此頃聞けば其人は石川五右衞門だださうだ。

おいよ。石川五右衞門……。

源七。おまへも知つてゐるであらう。石川五右衞門といふのは世間にかくれのない大泥坊だ。

（この時、小屋の外にて物音する。）

おいよ。あれ、誰か來たやうな。

源七。親方ではないか。見られては惡い。早く……早く……。（おいよを押遣る。）

（おいよは押遣られて、薪のかげに隱れる。下のかたより河内の源五郎、五十餘歳、覆面して長い

刀をさし、無言にてぬつと入り來る。源七は表を覗かうとして、出逢ひがしらに源五郎にゆき逢ふ。）

源　七。おまへは誰だ。案内も無しに這入つて來たのは……。

源五郎。（しづかに。）騒ぐな、騒ぐな。おれだ、おれだ。（覆面を取る。）

源　七。おゝ、おやぢ樣か。どうして今頃……。

源五郎。おれは化物とおなじことで、今頃でなければ出られない身の上だ。（左右をみまはして。）ほかに誰もゐないな。

源　七。（曖昧に。）はい。

源五郎。（釜の前にゆきて立つ。）この釜はもう出來たのか。

源　七。やう〳〵出來あがりました。

源五郎。これで石川五右衛門を釜煎りにすると云ふのは本當か。

源　七。さういふ話を聞きました。（云ひながら源五郎をちろ〳〵見る。）親父樣は此頃どこにおいでなさるのでござります。

源五郎。そんな事はどうでもいゝ。これ、源七。おまへは道具を持つてゐるだらう。この釜を打ち毀してくれ。

源　七。え。

源五郎。こんなものでおれのお頭を釜煎りにされて堪るものか。お頭ばかりではない、小さい子供まで一緒に抛り込まれるのだらう。太閤といふ奴は途方もないことを考へ出す奴だ。さあ、おれが賴むから早く打ち毀してくれ。

源　七。飛んでもない。どうしてそんなことが……。

源五郎。出來ないといふのか。

源　七。今聞いてゐれば、おれのお頭……。では、おやぢ樣、おまへはあの石川五右衛門の手下になつてゐたのか。

源五郎。身狀が惡さに生まれ在所にも居たゝまれず、おまへを連れて夜逃げ同樣に立退いてしまつたが、河內國はおれの故郷だ。その故郷から同じやうに出て來ても、石川五右衛門といへば近國に隱れのない大泥坊で、おれよりはよつほど偉い奴だから、その手下になつて今日が日まで、浮世を面白く暮してゐたのだ。

源　七。おまへは一體どうして暮してゐるのかと、蔭ながら案じてゐましたが、それでは同じ故郷の緣につながつて、あの大どろばうの五右衛門の手下に……。（今更のやうに驚く。）その五

源五郎。　右衛門は去年の冬、おフイ捕りになつたと云ふではござりませぬか。

源　七。　むゝ。よせばいゝのに自分ひとりで太閤の寝間へ忍び込んだのを、夜づめの奴等に生捕られてしまつた。お頭ほどの男でも運の悪いときは仕方がない。（嘆息する。）いや、そんなことを云つてゐるうちに、誰かが来ると事の破れだ。さあ、この釜を早く毀してしまへ。

源五郎。　（一生懸命に。）そんなことはなりませぬ。

源　七。　強情な奴だな。現在の親がわざ〳〵頼みに来たのだ。

源五郎。　いくらお前の頼みでも、なりませぬ、なりませぬ。（釜のまへに立塞がる。）

源　七。　よし。それではおれが仕事をする。貴様は退いてゐろ。

源五郎。　（源五郎はなにか手頃の物はないかと見まはし、大きい鐵槌を把つて釜の前に寄らうとするを、源七は支へる。釜のかげよりおいよは窺ひゐる。源五郎は老年なれども力強く、源七を突き倒して釜の前に進みよれば、おいよは堪りかねて走り出で、源五郎を縋り留めんとすれば、源五郎は焦れて鐵槌にてその額を打つ。おいよは悲鳴をあげて倒れる。）

源　七。　あ、おいよが……。（駈け寄つておいよを介抱する。）

源五郎。　（流石におどろいて鐵槌を捨てる。）不意に飛び出して来て邪魔をするから、よくも見定めずに撲りつけたが、貴様のほかにそんな奴が忍んでゐたのか。まだ若い女のやうだな。

源　七。　（聲をふるはせる。）おいよは死んだ……。もう死んでしまつた。

源五郎。　おれの力で急所をなぐられては、大抵の奴は一撃ちで死んでしまふだらう。まして女は脆いからな。

源　七。　（狂氣のやうに父の腕をつかむ。）おやぢ様、この女を生かして返してくだされ。

源五郎。　馬鹿をいへ。おれにそんなことが出来るものか。（把られし腕をふり拂ふ。）

源　七。　もう此上は……。（俄に呶鳴る。）みんな早く来てくれ。石川五右衛門の手下がこゝにゐるぞ。

源五郎。　（おどろく。）これ、めつたなことをいふな。

源　七。　（つゞけて呶鳴る。）どろばうだ、泥坊だ。石川五右衛門の手下だ。

源五郎。　この氣ちがひめ。静にしろと云ふのに……。

（源五郎はうろたへて押へんとすれば、源七は逃げまはりながら『泥坊だ、泥坊だ』とつゞけて呶鳴る。）

源五郎。　（持餘して舌打ちする。）畜生、おぼえてゐろ。

（源五郎は引返して表へ立去る。源七は又駈け寄つておいよを介抱する。）

源七。おいよ……おいよ……。しつかりしろ。

（おいよは正體もなきに、源七はうろ〳〵して、そこにある桶の水を飲ませなどする。下のかたより若松左近は茂平を連れて出づ。）

左近。源七。どうした。（透しみる。）そこに倒れてゐるのはおいよではないか。

茂平。おゝ、おいよさんが何うかしたのか。

源七。おいよが死にました。

（茂平は蠟燭をさし付け、左近は立寄つておいよを覗く。）

左近。女の額からはおびたゞしく血が流れてゐる。お前がなにか喧嘩でもしたのか。

源七。石川五右衛門の手下が忍んで來て、この釜を毀さうと致しましたので、それを遮るはずみに殺されました。

左近。五右衛門の手下がこの釜を毀しに來るとは、まことに油斷のならぬことだ。おいよはもう助からぬか。

源七。はい。（涙をふく。）

左近。なにしろ斯うしては置かれない。（茂平に。）女房や千次を呼んだ來い。

茂平。あい、あい。

（茂平は下のかたへ引返して去る。左近は再び立寄つておいよのからだを檢め、もう息の無いのを見屆けて嘆息する。）

左近。源七、可哀さうなことをしたな。

（源七は無言で眼をふいてゐる。）

左近。して、その盜人めはどうした。

源七。わたくしが無暗に呶鳴り立てたので、どこへか逃げてしまひました。

左近。おまへ達がゐなければ、あぶなく大切の釜をぶち毀されるところであつた。（釜をみる。）別に瑕も傷みも出來はしまいな。

源七。決して別條はござりませぬ。それはお受合ひ申します。

左近。五右衛門とその悴の一郎は捕はれたが、手下の者どもは逃げ散つて、所々方々にかくれ忍んでゐると云へば、大方そいつ等の仕業であらう。盜賊の仲間にも義理はあるな。

源七。（曖昧に。）さうかも知れませぬ。

左近。この釜一つを毀したところで、五右衛門が無事に救はれやうとも思ふまいが、兎もかくも

一日のばしに其命を助けたく、又二つには釜煎りの苦痛を助けたさに、わが身の危いのをも恐れずに、飛んで火に入るやうな眞似をするとは、さすがに親分子分の義理人情、憎いやうでも可愛い奴だな。

源七。（恨めしげに。）なんで可愛いことがございませう。その泥坊は、罪もない女を殺して行きました。

左近。その恨みはもつともだ。おいよはいかにも不憫でならぬ。勿論おたがひに意趣遺恨はなく、つい手が廻つた粗相であらうが、なんにしても女ひとりの命を……。（云ひかけて源七の顔をみる。）おまへの心は察してゐるが、これも不運とあきらめろよ。

源七。はい。

左近。その盜人も五右衛門の手下とあれば、遅かれ早かれ召捕られて、重い仕置に行はれるは必定だ。

源七。（情ないやうに。）さうでございませうな。

左近。おれからも今夜の始末を役人衆へ訴へて、その盜人は屹と捕へてやる。お前はそいつの人相や風俗をよく覺えてゐるであらうな。

源七。さあ。（躊躇して。）大抵はおぼえてゐる積りでございますが……。

左近。なんにしてもお前のかたきは屹と取つてやるから、それを樂みに待つてゐろ。

源七。（やはり曖昧に。）はい。

（下のかたより茂平と千次出づ。千次は松明を持つ。）

千次。おいよさんが殺されたさうでございますな。

左近。それ、そこに倒れてゐる。茂平も手傳つて運んでゆけ。

二人。あい。

左近。源七、おまへは何も彼もよく知つてゐる筈だ。一緒に送つて行つて、親達にそのわけを話してやれ。

源七。（力なげに。）はい。

（千次は松明を左近にわたして、茂平と共におよいよの死骸をかきあげ、源七も手傳ひて下のかたへ運んでゆく。蛙の聲。左近はそのあとを見送り、更に松明をかざして釜の周圍をあらためる。下のかたより おむら出づ。）

おむら。もし、おいよさんが飛んだことになりましたな。

五右衛門の釜

（左近はおむらの手を取つて、引摺るやうに釜の前へ連れてゆく。）

左近。（松明をかざして。）これ、見ろ。この釜のために、罪もないおいよは死んだのだ。

おむら。五右衛門の手下ださうでござりますな。

左近。手を下したのは五右衛門の手下だが、實はおまへが殺したも同然ではないか。

（左近はおむらを突き放して、松明を釜の下に投げ込む。）

左近。くはしく云はずともお前の胸に覺えのある筈。おれにこの釜を作らせたのは誰だ。それが祟つておいよは死ぬことになつたのだぞ。（床几に腰をかける。）

おむら。（摺りよる。）成程わたしがおいよを殺したのかも知れませぬ。その代りにわたしは夫の命を助けました。差引きにしたら罪は消えさうなものでござります。

左近。女さかしうして牛賣り損ふと、下世話にいふはお前のことだ。若松左近は葦屋釜の職人、お茶の湯のお道具ならば何なりとも御用をうけたまはりまするが、人間を煮殺す刑罰のお道具などは眞平御免くだされと、立派に御辭退申して來たものを、要らぬ女の小才覺から源七めをそゝのかし、その夜のうちにお城へ駈けつけて、先刻の御返事はこゝろ得違ひ、釜煮りのお道具は左近がたしかに承はりますと、改めてお請をして歸つて來たので、今更あとへも先へも行かれぬやうな破目となつて、よんどころなしの無理往生、心にもない仕事を引受けることになつてしまつたのだ。

おむら。女の小才覺と叱られても、わたしに取つては夫の命が大切でござります。自分の命も大切でござります。弟子たちも見殺しにはなりませぬ。あの時わたしが其儘に捨てゝ置いたらお前のからだは今頃どうなつてゐるであらう。わたし達も所詮生きてはゐられますまい。

左近。おまへや源七は頻りにそれを云ふが、太閤はそれほどに理窟のわからぬ人であらうか。自分の云ひ出したことは邪が非でも押通す横紙やぶりの無道人であらうか。それでは日本國中を切りしたがへて、今の身分にはなれまいではないか。世間に釜を作る職人は澤山ある。おれが斷つたら他の者に申付ければいゝわけだ。それを斷つたおれ達にむごい仕置をするなどといふ、そんな間違つた無法なことがあるものか。

おむら。おまへは自分の家にばかり引き籠つて、自分の職のことばかりを考へてゐて、世間のことをなんにも知らぬので、そんなに落ちつき拂つてゐられるが、今の世の中で太閤樣の仰せに背いたら、命は無いにきまつてゐます。源七の話では、柳の馬場の遊女とやらは、歌舞妓踊を斷つたといふので、すぐに磔にかけられたさうでござります。

左近。それがどうも本當とは思はれない。全くそんな事があつたのであらうか。

おむら。ほんたうでござります。今の太閤樣ならば、そのくらゐのことは仕兼ねませぬ。わたし達もうかゝしてゐたら、おそらく其の遊女とおなじやうに……。

左近。考へても怖ろしいことでござります。それを無事に助かつて、夫婦がかうして今夜の月をながめてゐられるのは、神樣や佛さまのお救ひではござりませぬか。

おむら。（あざ笑ふ。）さうすると、おれを出し抜いてお城へかけ付けたお前達は、神や佛のお使といふわけかな。（又起つて釜の前へゆく。）併しどう考へても面白くないことだ。おれはこの仕事に取りかゝつてから、なんだか胸が曇り勝で、一日も心持のいゝ日はなかつた。いつそ中途でぶち毀してしまはうかと思つたことも無いではなかつたが、あの源七めが傍を離れずに油斷なく見張つてゐる。おまへも邪魔をする。それやこれやで何うにか斯うにか、先づ作り上げてはしまつたものゝ、この釜に熱油をぐら〳〵と沸らせて、生きた人間を魚のやうに煮殺すのかと思ふと、おれは實になんとも云へぬやうな心持になる。世間に職業も澤山あるのに、おれは擇りに擇つて、なぜこんな職人になつたのかな。人を殺す道具はほかにも澤山ある。おまへのやうなことを云つてゐたら、槍を作る人、刀を作る人、鐵砲を作る人、さういふ職人たちは此世に絶えてしまふではござりませぬか。

左近。そんな職人は絶えてしまつても差支へはないのだ。

おむら。（氣をかへて慰めるやうに。）これ左近どの。もうなんにも思はぬが好うござります。とゞこほりなく出來のお届けも濟んで、あしたはお城から受取りのお使がみえる筈。さうなればわたし達も安心、おまへの胸も自然に輕くなりませう。

左近。むゝ、さうしたら少しは胸が輕くなるかも知れぬ。なにしろ「こんな物が自分の眼のまへにある間は、どうもおれの心が安まらないから、一日も早くこの惡魔のやうな物を送り出してしまひたいものだ。

おむら。（笑ふ。）それも今夜一と晩の辛抱で、あしたは送り出してしまふのでござります。そのお祝ひには内輪同士が小酒盛りでもして、あの茂平を醉はせて踊らせて、久し振りで笑ひませう。おまへも當分は骨休めをして、世間は丁度花盛り、弟子たちを連れてどこへかお花見にでも浮かれ出したが好うござりませう。

左近。おれは兎も角も、弟子たちは當分遊ばせてやれ。このあひだから隨分働かせたからな。

おむら。　ほんにみんなは氣の毒のやうに働いてくれました。

左近。　とりわけて源七はよく働いてくれた。おれも好い弟子を持つて仕合せだ。それにつけても

おいよを殺したのは……。

おむら。　もうそれは云はぬことにして……。おゝ、今の小酒盛で思ひ出した。弟子たちが戻つて來たら、こゝの番はあれ等に任せて、氣晴らしに一と口飲んだらどうでござります。

左近。　どうして酒などを飲んでゐられるものか。（釜をみる。）今度こそは大丈夫と思ふものゝ、思ひも寄らないところに仕損じがないとも限らない。これから釜を沸らせて、確に間違ひのないのを見届けなければならないのだ、みんなが戻つて來たら、火を焚きつける支度をさせろ。

おむら。　それにしても、まだ間がありませう。湯の沸るのを待つあひだに、まあ一と口お飲みなされ。お肴も用意してござります。

左近。　なぜそんなに飲ませたがるのだ。（少しかんがへる。）いや、今夜はすこし飲んだ方がいゝかも知れないな。

おむら。　お飲みなさるか。

左近。　むゝ、飲まうよ。

（下のかたより茂平と千次出づ。）

茂平。　行つてまゐりました。

左近。　親たちも嘸ぞ驚いたであらう。

千次。　親父もおふくろも唯ぼんやりしてゐるばかりで、碌々に口も利けませなんだ。

おむら。　それも無理のないことぢや。定めて源七から詳しい話をして聞かせたであらうな。

茂平。　勿論、源七が詳しいわけを話して聞かせましたが、それがよく判つたのやら、判らないのやら、親達はたゞ夢のやうに聽いてゐるばかりで、まことに張合のないことでござりました。

左近。　あまりの驚きに涙も出ないのであらうよ。かへすゞゝも氣の毒なことだ。

おむら。　云ふまいとしても、やつぱり愚痴は出る。（溜息をつく。）死んだものは不憫、あとに殘つた親たちや源七は氣の毒、なんとも云ひやうのない禍でござりましたな。

千次。　あの様子では親達も、あまりの驚きに取りのぼせて、氣ちがひにでもならなければいゝが……。

左近。　五右衛門の釜

茂平。ひとり娘があんな死に方をしたのだから、氣ちがひにまではならずとも、先づ當分は仕事も手に付くまいよ。

左近。むゝ。（嘆息しながらおむらを見かへる。）さあ、酒を飲まう。（茂平等に。）おまへ達はこの釜に水を一杯に汲み込んで、火を焚きつけろ。

二人。あい、あい。

左近。釜が割れさうになるほどに強く焚くのだぞ。

（左近はおむらと共に下のかたへ行く。茂平と千次は釜の前へゆきて、薪や枯枝を積む。これにて幕をおろし、舞臺の支度の出來次第に再び幕をあける。）

（二）

舞臺はもとの道具。葭簀を取拂ひたる釜の下には火が炎々と燃えて、沸騰したる湯烟が白く噴きあがる。月はかくれて暗し。

（茂平と千次は釜の下を焚いてゐる。下のかたより源七は力なげに出づ。）

茂平。おゝ、戻つて來たか。

千次。あれからどうした。

源七。なにを云ふにも親達は、魂の抜けたやうにぼんやりしてゐて、どうすることも出來ないから、近所の人たちに譯をはなして、あとの始末をよく頼んで來たのだ。

茂平。まつたくお前は困つてゐるだらうと、今も噂をしてゐたのだ。

源七。（釜をみる。）湯はもう沸いたか。

千次。さつきから頻りに炙べてゐるのだから、もう隨分沸いた筈だ。

源七。なにを云ふにも親達は、魂の抜けたやうにぼんやりしてゐて、どうすることも出來ないから、近所の人たちに譯をはなして、あとの始末をよく頼んで來たのだ。

茂平。まつたくお前は困つてゐるだらうと、今も噂をしてゐたのだ。

千次。さつきから頻りに炙べてゐるのだから、もう隨分沸いた筈だ。

源七。（釜をみる。）湯はもう沸いたか。

千次。（千次に。）もうそろ〳〵と親方を呼んで來たらどうだ。

源七。親方はどうした。

茂平。奥でめづらしく酒を飲んでゐるらしい。

千次。むゝ、呼んで來ようか。このくらゐ沸かしてあれば沢山だらう。

（千次は下のかたへ出てゆく。源七は床几に腰をおろして、無言で釜の火を見つめてゐる。湯の沸く音。）

茂平。あしたはお城から受取りに來るといふが、この釜が出來次第に五右衛門のお仕置をするのだらうか。

五右衛門の釜

源七。（顔をあげる。）さうだ。屹とさうだらう。あんな奴は一日も早く殺してしまふやうに、おれも祈つてゐるのだ。

茂平。あのときに親方が仕事を斷つてしまつたら、今頃はおれ達の方が殺されてゐるのだらうな。

源七。（嘆息する。）いつそ殺された方がよかつたかも知れないな。

茂平。おれはもう捨鉢の度胸を据ゑてゐたが、まあまあ運が好いかして、かうして無事に生きてゐられるのだ。

源七。死んで運が悪いのか、生きてゐて運が好いのか、おれには判らなくなつて來た。

茂平。おいよが死んだからと云つて、そんなに力を落すなよ。

左近。（源七はだまつて考へてゐる。下のかたより左近と千次出づ。少しあとよりおむらも出づ。）どうだ。もう沸いたか。

茂平。このくらゐ沸いたら好からうと思ひますが……。

左近。（左近は釜のまはりを見廻りて首肯く。）むゝ、今度はいよ〳〵大丈夫らしいな。

おむら。（のぞく。）では、もう安心でございますか。

左近。安心だ、安心だ。なんどき誰が受取りに來ても、これならば安心して渡せるぞ。

千次。もつと焚きませうか。

左近。まあ、このくらゐでよからう。よく沸いたやうだ。

（左近は床几に腰をかける。火はます〳〵燃え盛りて、湯の沸く音物すごく、湯烟濛々と噴きあがれば、人々は一糎の緊張したる心持で釜をながめてゐる。そのうちに、左近ばだん〳〵に殘酷の興味が湧いて來て、笑ましげに左右をみかへる。）

左近。どうだ。あの火を見ろ。湯の音を聞け。火は炎々と燃え盛る、湯はぐら〳〵と沸きあがる。見るも聞くも凄まじいありさまで、地獄の釜とはまことに是れであらうな。

源七。（これも心地よげに。）熱湯ですらも此の通り、ましてこれが熱油でござりましたら、どんな人間でも堪りますまい。

茂平。熊坂長範でも、石川五右衛門でも、但しは酒顚童子でも、この釜に投げ込まれたが最後、骨も肉も煮え爛れて、見る〳〵うちに狂ひ死だ。

千次。釜煎りといふことは豫て話には聞いてゐたが、かう煮えあがつたところを見ると、まつたく身の毛が慄立つやうだな。

左　近。　いや、おれは不思議に面白くなつて來た。このぐら〳〵と沸いてゐるなかへ人間を投げ込んだら……。むゝ、この湯をもつと沸かしてみたい。（起ちあがる。）それ、火を焚け。釜の下へ薪をいれろ。

（茂平と千次は薪や枯枝を取りて、釜の下へ入れようとする。先刻より息をつめて見つめてゐたるおむらは俄に叫ぶ。）

おむら。　あ、待つて……。この上に火を燃やすのは止めたがよい。

左　近。　なぜ止めるのだ。

おむら。　なんだか怖ろしくなりました。

左　近。　（笑ふ。）なにが怖ろしい。

おむら。　今までは何とも思ひませんだが、さうしてぐら〳〵と沸きあがるのを見てゐると、眉間尺のむかし話も思ひ出されて、わたしは急におそろしくなりました。（叉叫ぶ。）あれ、あれ、あの眞白な湯氣のなかから……。人の顔が……。人の顔が……。

源　七。　え、人の顔が……。

おむら。　なんといふ人か知らぬが、大方それが石川五右衞門といふのであらう。あれ、あれ、鬼の

左　近。　やうな顔をして、歯を喰ひしばつて……。大きい眼を瞋らして、わたしを睨んで……。はゝ、見たこともない五右衞門の顔がなんでお前にみえるものか。それは心の迷ひといふものだ。おれは怖ろしいどころか、だん〳〵に面白くなつて來た。（茂平等に。）さあ、女などには構はずに、もつと焚け、焚け。

おむら。　いや、いや、この上に焚いてはならぬ。その火も早く消して、消して……。

（おむらは釜のそばへ駈け寄らうとするを、源七は支へる。）

源　七。　まあ、おまへこそお待ちなされませ。

おむら。　もうその湯の沸くのを見てはゐられぬ。（身を藻掻く。）さあ、消して、消して……。早く消して……。

源　七。　あれ、又あの湯氣のなかから女の顔が……。おゝ、おいよ……おいよさんが血だらけの顔をして……。

左　近。　おいよが……。それもお前の迷ひでござりませう。まあ、お鎭まりなされませ。

源　七。　（茂平と千次は釜の下へ薪を入れようとする。）おまへ達は早く焚け、焚け。

左　近。　えゝ、もう焚いてはならぬ。早く消せといふのに……。わたしの指圖を背くのか。

おむら。　五右衞門の釜

（兩方から責められて、茂平等は躊躇する。）

左近。 女などを相手にするなと云ふに……。もつと焚け。えゝ、焚かぬか。

（左近は茂平の手より薪の束を引つたくりて、釜の下へ投げ込む。火は更に燃えあがる。）

おむら。 わたしはもう氣ちがひになりさうな。えゝ、もう止してくだされと云ふに……。

（おむら物狂はしげに又駈け寄らうとするを、源七は無理に抱きすくめて土間に引据ゑる。）

おむら。 あれ、あれ……。五右衛門ばかりでない。小さい子供の顔が、顔が……。

（左近は千次の手からも枯枝を引つたくりて釜の下へ投込めば、釜の湯は沸騰して噴きこぼれ、茂平と千次はおどろいて飛び退く。）

左近。 はゝゝゝゝ。

（左近は愉快らしく笑ふ。おむらは跳ね起きようとするを、源七は又おさへる。茂平と千次はやゝ呆れたる氣色にて夫婦を眺めてゐる。火は燃えあがりて、湯の沸く音いよ〳〵凄まじく、湯の烟は濛々とあたりに漲る。）

幕

第三幕

舞臺は淺黄幕。水の音きこゆ。

（京の町の男四人、女二人、それに在所の男二人と女ひとりが打ちまじりて立つ。）

京男一。 なんと好い天氣ではないか。

京男二。 お仕置を見にゆくのに、天氣都合を云ふのもおかしいが、やはり天氣のよい方が仕合せといふものだ。

京女一。 釜煎りといふことは話にこそ聞いてゐましたが、京のまん中でそんなお仕置があるとは珍しいことでござります。

在男一。 わたし等もさう思つたので、わざ〳〵近在から見物に出て來ました。

在男二。 釜煎りといふのは、ほんたうに人間を生きたまゝで茹で殺すのでござらうか。

京男一。 大きい蟹や蝦をゆでるのすらも、餘りいゝ心持はしないものだに、人間をゆでるとは怖ろしいことだが、確に本當だといふ噂だから、わたし達もこれから見にゆくのだ。（空をみる。）

併しそんな事のある日にしては、些つと天氣が好過ぎるやうだ。

京男三。　お前はさつきから天氣ばかり氣にしてゐるが、まつたくお仕置よりもお花見に行きさうな日和だな。

京女二。　下界にこんな事があらうとは知らないやうに、大空は青々と晴れてゐます。

京男四。　悪い奴が殺されるのだから、天たう様も知らぬ顔をしてござるのかも知れないな。

在女一。　怖い物見たさに出て來たけれど、お仕置場が近くなつたら、なんだか氣味が悪くなりました。

京女一。　わたしも氣味が悪くなつて來た。いつそ見ずに戻りませうか。

京男二。　折角來たものだ。まあ、來なさい、來なさい。

京男一。　さあ、行かう、行かう。

（人々は打ち連れて上のかたへ去る。淺黄幕を切つて落す。）

三條河原。正面を隔てゝ東山みゆ。上のかたに仕置場の竹矢來あり。所々に柳の立木あり。晴れたる日の午前。

（石川五右衞門三十七八歳、繩にかゝりて裸馬に乘せられてゐる。そのせがれ一郎もおなじく縛められて、馬に乘せられてゐる。前田玄以法印は京の奉行にて上のかたの床几に腰をかけ、そのうしろには槍又は刺叉などを持つたる家來大勢が控へてゐる。下のかたには薄田隼人正、社祢のすがたにて家來數人をしたがへて立つ。水の音。小鳥の囀る聲きこゆ。）

玄以。　囚人をひきおろせ。

（獄卒は馬の口を取り、家來等も手つだひて、五右衞門と一郎を馬より引きおろし、すぐに馬を牽いて去る。二人は河原に坐る。）

玄以。　あらためて申さずとも一々に覺えのある筈。昨年霜月五日の夜に、伏見の御城内へ忍び入つて、太閤殿下の御寢所を騒がしたる曲者。その本人の五右衞門は申すに及ばず、せがれの一郎も諸共に、今日このところに於て釜煎りの刑に行ふぞ。いづれも左樣心得ろ。

五右衞。　（しづかに會釋して）お役目御苦勞に存じます。

隼人正。　（進みよる。）これ、五右衞門。盜賊ながらも大勢の手下をしたがへて、洛中洛外はいふに及ばず、近國諸國を横行した大膽者、この期に及んで磔も釜煎りも恐るゝことではないかも知れぬが、わが子を不憫とは思はぬか。なにも彼も尋常に白狀すれば、釜いりの仕置はお

五右衞門の釜

のれの身一つにとゞめ、幼少のせがれ一郎は罪一等を減じて、討首にいたすであらう。但し飽までも意地を張つて、わが子にも釜煎りの苦痛をさせたいか。盗賊には親子の人情がないか。今一度こゝで思案いたしてみろ。

五右衛。それはたび〳〵の御吟味でござつたが、伏見の御座所へ忍び込んだは五右衛門の一存で、誰からも頼まれた覚えは決してござらぬ。

玄以。それがどうも呑み込めぬぞ。唯一通りの盗みならば、用心のきびしい御座所へなぜ忍び込んだ。

隼人正。それも寶物藏か御金藏へ忍び込むならば兎も角も、殿下の御寢所へうかゞひ寄るとは、金銀に眼をかくるばかりでなく、ほかにも何か仔細がなくてはなるまい。それを正直に白状いたせといふのだ。

五右衛。（笑ひ出す。）素人衆には無理ならぬお疑ひでござるが、いかに盗人なればとて人の物を奪ひ取るばかりが能ではござらぬ。勿論、初めは物を取るが本意でござるが、だん〳〵に修業の功を積んで、世間の寶はみな我物、取らうと思へばいつでも自由に取ることが出來るやうになると、唯それだけではどうも面白くない。なんとか無理な魂膽をして、取れさうもないものを取つてみたいと思ふが人情、そこにぬす人の面白味もあるといふものでござる。そこで、この五右衛門も近ごろは町人百姓などには眼をかけず、用心のきびしさうな諸大名の屋敷をあらして歩きましたが、それも馴れては面白くなくなつたので、今度は太閤の御座所へ忍び入み、太刀であらうが、香爐であらうが、扇子であらうが、何かその枕もとにある物をぬすみ取つてみようと思ひ立つたのが運の盡きで……。（笑ひながら隼人正を見る。）お前さま達に取押へられてしまひました。それがしも唯一通りの盗みを働いてゐれば、思ふがまゝの榮耀をした上に、まだ〳〵十年や二十年の壽命はあつたものを、飛んだ道樂氣を出した爲に、あたら自分の命を縮めたのでござる。はゝゝゝゝゝ。

隼人正。（考へる。）成程おのれ等のやうな盗人には、そんなことが無いとも云へぬが……。（玄以の方をみる。）唯それだけでは悋の仕置を弛めるといふわけにはまゐるまいな。

玄以。何者に頼まれたか、屹と吟味せよとの上意であれば、それを白狀いたせば格別、左もなければ矢はり白狀いたさぬものとして、このまゝに仕置をいたすの外はござるまい。

隼人正。五右衛門は勿論でござるが、せめては幼少のせがれだけは……。如何でござらう、これより早馬にて伏見へかけ付け、彼が唯今の懺悔の次第を申上げて、更にせがれの處置につい

五右衛門の釜

て御慈悲の儀を願ひ出でては……。

玄以。 いや、いや、殿下の御性急はお手前も御承知でござらう。左様なことに時刻を移しては我が役目の越度と相成つて、いかなるお叱りを受けうも知れまい。不憫ながら親子もろ共に、おなじく釜煎りに行ふまでぢござる。（家來等をみかへる。）それ、引立てい。

家來。 はあ。

（家來等は立寄つて、五右衞門と一郎を引立てようとするところへ、下のかたより三上の勘六走り出づ。）

勘六。 お願ひでござります。お願ひでござります。

隼人正。 おのれは何者だ。退れ、さがれ。

勘六。 （五右衞門をみて。）おゝ、お頭。

五右衞。 （みかへる。）勘六か。

勘六。 お頭が召捕られたといふ噂を聞いて、仲間の者はちり〴〵ばら〴〵になりました。せめて坊樣だけは無事に落してあげたいと、わしが連れて逃げまはるうちに、大佛前で追手に取りまかれて……。なんとも申譯がござりません。

五右衞。 おれが斯うなれば、悴も助からぬのは當り前のことだ。なんにも云はずに、早く行け、行け。

勘六。 逃げ隱れをするほどなら、わざ〳〵こゝへは參りません。もし、お役人樣。お頭は致し方もござりませんが、こんな小さい者を釜煎りにすると云ふのはあんまり酷たらしうござります。どうぞ一郎さんの身代りに、この勘六を煮るとも茹るともして下さりませ。

隼人正。 折角の願ひだが、身代りなどは叶はぬことだ。さりとておのれも免しては歸されぬ。（家來に。）それ、繩を打て。

（家來等は立寄りて勘六を捕ふれば、勘六は爭はず、素直に繩を受ける。）

勘六。 お繩は覺悟の上で、決してお手向ひはいたしませんが、唯今のお願ひ、身代りの儀を

玄以。 えゝ、ならぬ、ならぬ。（家來等に。）そやつを早く連れてゆけ。

家來。 立て、立て。

（家來二人は無理に勘六を引立てゝ下のかたへ去る。）

一郎。 お父さま。

五右衞。 なんだ。

五右衞門の釜

一郎。　勘六は忠義者でございますな。

五右衛。　（笑ふ。）むゝ、忠義な奴だ。ぬす人の手下に、ひとりでも忠義の奴があるのが不思議だな。さあ、一郎。おれたちも最期の時が来たぞ。なまじひのおなさけで親子が分れ〳〵になるよりも、どうで亡い命ならば一緒に死ぬ方がましだ。

一郎。　わたしもお前と一緒に死にたうございます。

五右衛。　釜煎りとて恐れることはない。なに、熱いといふも些との間だ。怖い夢でも見たと思へ。

玄以。　それ。

（玄以は指圖すれば、家來は五右衛門と一郎を引立て、玄以は先に立ちて上のかたの矢來のうちに入る。隼人正もつゞいて入る。下のかたより以前の京の男、女、在所の男、女等出で、たがひに囁き合ひながら上のかたに去る。あとより若松左近は笠をかぶり、茂平と千次もつゞいて出づ。）

玄以。　仕置はもう始まつたか。

茂平。　（上のかたへ行きて矢來をのぞく。）まだ始まらないやうでございます。

（千次も進んで矢來のうちを覗く。左近は柳の下にある大石の上に登りて、これも矢來のうちを見る。）

左近。　むゝ。あれが五右衛門か。なるほど見るから逞しい面附だ。自分がこれから煮られるといふ釜のまへに坐つて、平氣な顔をしてゐるとは、憎々しいほどに大膽不敵の奴だな。あんな奴は怖ろしい刑罰をなんとも思はないで、腹のなかでは冷ら笑つてゐるかも知れない。畜生、今にみろ。いくら石川五右衛門でもあの釜のなかへ抛り込まれてたまるものか。どんな面をして苦むか、早く見てやりたいものだ。

千次。　（左近をみかへる。）釜の油はまだ煮えあがらぬやうでございますな。

左近。　あれではまだ〳〵焚木が少い。あんな事ではなか〳〵沸くものではないぞ。唯の風呂を焚くやうな料簡では埒があくまいに……。どうも焦つたいことだな。おゝ、流石に氣がついたと見えて、薪を澤山に投げ込んだ。それでなければいけない。おゝ、燃える、燃える。（惡魔的に笑ふ。）好い鹽梅に風も吹き出して來た。それにしても、あれが本當にぐら〳〵沸きあがるまで、斯うしてゐるのは待遠しいな。

源七。　（左近は一心にながめてゐる。茂平と千次ものぞいてゐる。下のかたよりおむらは少しく取亂した姿にて走り出づ。あとより源七が追つて出づ。）

源七。　もし、おかみさん。そこが仕置場でございます。無暗にかけ込んではなりませぬ。矢來の

五右衛門の釜

外からおのぞきなされませ。

おむら。 せめて矢來の外からでも五右衛門どのに詫びを云ひたい。それでなければわたしの心が安まらないのぢや。此頃のやうに毎晩おそろしい夢を見つゞけては、果は狂ひ死をするのほかはあるまい。かうと知つたら、わたし達の身はどうならうとも、あんな仕事を引受けるのではなかつたものを……。これ、科人はもう牽かれて來てゐるのか。

源七。 仕置は辰の刻と聞きましたから、もう着いてゐるに相違ござりませぬ。（矢來を覗きに行きかゝりて。）おゝ、お前達か。

（茂平と千次はふり向く。）

茂平。 おゝ、源七。おかみさんも一緒か。

千次。 やつぱりこゝへ出て來たのか。

（これにて左近もこゝろ付きて石を降りて來る。）

左近。 源七。けふは女房を出してはならぬ、おまへも共に留守番をしてゐろと云ひ聞かせて置いたに、なぜこんな所へ連れ出して來たのだ。

源七。 どうしても自分の罪ほろぼしに、五右衛門に一言の詫びを云はなければならないと、止めるのも肯かずに駈け出してしまつたのでござります。

左近。 なんの、詫びることがあるものか。あれ、見ろ。火はだん〳〵に燃えあがつて、煮え立つ油がこゝらまでも匂つて來るぞ。

おむら。 ほんに油の匂ひ……。（河原にひざまづいて手をあはせる。）五右衛門どの。こんな酷たらしい仕事をうけ合つたのは、わたしが惡うござりました。堪忍して下され。（矢來をのぞく。）おゝ、あれが五右衛門……。わたしが毎晩の夢にみる顏と些とも違はぬ。やつぱりあれぢや。あれぢや。お前ばかりか、いたいけな子供まで……。これ、恨んで下さるな。恨んでくださるな。その申譯には、わたしもこの川へ身を投げて……。

（おむらは柳のあひだをくゞりて、川へ飛び込まうとするを、左近は抱きとめる。）

おむら。 いゝえ、放して……放して……。

（おむらは振切つて行かうとするを、源七、茂平、千次もかけ寄つて引戻す。この捫着のあひだに見物の男女大勢出づ。そのなかに紛れて、河内の源五郎は旅僧の姿にいでたち、笠をかぶりて出で、隱し持つたる短刀をぬき放し、左近をめがけて突いてかゝる。左近は早くも身をかはせば、源五郎はあやまつておむらの胸を突く。おむらは源五郎の笠をつかんで倒れるはずみに笠は取れて落ちる。

その顔をみて源七はおどろく。源五郎は更に左近を目がけて突いてかゝれば、源七は身を楯にして遮り、これも脇腹を突かれて倒れる。見物人ばこの騒ぎにおどろきて、崩れ立つて下のかたへ逃げ去る。茂平と千次は源五郎に組みつきて短刀を奪ひ取らんとし、重なり合つて轉げまはる。矢来のうちより薄田隼人正は家来をつれて出で、すぐに見かへりて指圖すれば、家来等は走りかゝつて源五郎を捕へようとする。源五郎は短刀にて防きながら、倒れてゐる源七に聲をかける。)

源五郎。源七。粗相だ。堪忍してくれ。

(云ひ捨てゝ源五郎は下のかたへ逃げてゆく。家来等は追つてゆく。茂平はおむらを介抱し、千次は源七を介抱する。)

隼人正。(源七に。)出家すがたの曲者はおまへに聲をかけて行つたが、あれは何者だ。おまへはあれを識つてゐるのか。

源七。(苦しい息のなかで。)いえ……。何者か存じません。

(左近はおむらと源七を眺めながら、無言で立つてゐる。)

隼人正。左近。おまへもあれを識らぬか。

左近。(源七を見ながら思案して。)わたくしも存じませぬ。

隼人正。では、なんでお前に斬つてかゝつたのだ。

左近。それもわかりませぬ。大かた亂心者でございませう。

おむら。いえ、わたしには判つてゐる。これ、左近どの。(這ひよる。)わたしがこゝで殺されゝば、五右衛門の恨みも晴れる。

左近。(叱るやうに。)まだそれを云つてゐるのか。たとひおれが作らずとも、所詮は誰かが作らねばならぬ釜だ。それを恨まれて堪るものか。このあひだの晩はおいよを殺され、けふは女房と弟子がこの始末……。それもみんな五右衛門の爲だ。おれの作つた釜のなかへ、あいつが生きながら投げ込まれて、煮えて、爛れて、藻掻いて苦んで、焦熱地獄の底へ沈んでゆくのを、笑つて見物してやるのだ。(隼人正に。)遠方からではよく見られませぬ。格別を以てわたくしだけは矢來のうちへお通し下さるわけには相成りますまいか。

隼人正。それほどに見たいか。

左近。見たうございます。なるべく傍へ近寄つて、あいつの眼の色から髪の毛一本の動くのまでも、篤と見物いたしたうございます。

隼人正。ほかならぬお前の願ひだ。聞きとゞけても仔細はあるまい。

五右衛門の釜

左　近。ありがたうございます。（茂平と千次に。）おれが戻つて来るまで、しばらく二人を介抱してゐてくれ。

二　人。あい。あい。

（矢来のうちより前田の家来一人出づ。）

家来一。（隼人正に。）いよ〳〵仕置に取りかゝります。お立會ひ下さりませ。

隼人正。おゝ、左様か。しからば左近。

左　近。はあ。（起ちかゝる。）

おむら。（叫ぶ。）左近どの。そんなところへ近寄つて下さるな。五右衛門の最後の一念が怖ろしうござりますぞ。

左　近。なにを馬鹿な。（隼人正に。）いざ、御案内をねがひます。

源　七。親方……。（叫ぶ。）もうお別れでござります。

（おむらも源七も次第に弱つてゆくを、茂平と千次は介抱する。）

茂　平。おかみさん、しつかりなされ。

千　次。源七……源七……。

隼人正。兩人はもはや落命と相見ゆるぞ。打ち捨てゝ行つてもよいかな。

左　近。はあ。

（左近はすこしく躊躇する。矢来のうちより又もや前田の家来一人出づ。）

家来二。（隼人正に。）どうぞお早くお越しをねがひます。

隼人正。むゝ。

（隼人正は家来二人と共に矢来のうちに入る。左近もつゞいて行かうとする。）

茂　平。（呼ぶ。）親方、おかみさんが……。

千　次。源七ももう死にます。

（左近は行きかけて又立戻る。おむらと源七は茂平と千次に抱かれながら落ち入る。時の鐘。水の音。）

――幕――

正雪の二代目

昭和二年三月作。
昭和二年五月。本郷座上演。

初演當時の主なる役割――大泉伴左衞門（市川左團次）千島雄之助（市村龜藏）深堀平九郎（市川荒次郎）山杉甚作（市川猿之助）下總屋義平（市川壽美藏）備前屋長七（市川八百藏）津村彌平次（河原崎長十郎）本庄新吾（市川米左衞門）犬塚段八（市川段猿）三上郡藏（阪東羽太藏）大泉の妹お千代（市川松蔦）下總屋の母おかめ（澤村源十郎）同心野澤喜十郎（市川左升）番太郎權兵衞（市川左喜之助）など。

登場人物――大泉伴左衞門。千島雄之助。深堀平九郎。津村彌平次。本庄新吾。犬塚段八。三上郡藏。山杉甚作。備前屋長七。下總屋義平。義平の母おかめ。大泉の妹お千代。大泉の女中およし。同じくおみつ。下總屋の若い者時助。同じく勘八。下總屋の小僧仙吉。下總屋の女中おとよ。番太郎權兵衞。與力井口金太夫。同心野澤喜十郎。町の娘おもと。同じくおきん。ほかに同心。捕手。町の男、女、子供など。

第一幕

（一）

江戸の末期、文久二年十一月下旬の午後。
芝の田町、軍學劍術の指南大泉伴左衞門の道場。正面の上のかたに寄せて、一段高いところに疊を

敷き、手あぶりの火鉢を置き、うしろは大形の襖。平舞臺の正面は板羽目にて、面、籠手、木太刀、竹刀、薙刀などの稽古道具をかけ、下のかたには杉戸の出入り口がある。大きい角火鉢には大薬罐をかけ、そのそばには炭取りと茶碗などもある。

（深堀平九郎、廿七八歳。先生の代稽古をしてゐる體、稽古着に胴と籠手を着けただけにて袴をはき、うしろ鉢巻きをして竹刀を持ち、高いところに腰をかけて見物してゐる。大火鉢のまはりには門弟の津村彌平次、犬塚段八、三上郡藏の三人が稽古を待つ姿にて、烟草をのんでゐる。そのなかで彌平次だけは面と胴をつけてゐる。道場のまん中には本庄新吾と刀屋のせがれ長七とが道具をつけて稽古をしてゐる。暮あくと、二人は激しく撃ち合ひ、新吾はだん〳〵に危くなる。）

彌平次。　これはいけない。本庄の方があぶないぞ。

段八。　町人に撃ち込まれるとは意氣地のない奴だな。

郡藏。　まつたくあぶない。これ、本庄。しつかりしろ、しつかりしろ。

（そのうちに新吾は籠手を打たれて竹刀を落せば、長七は附入つて更に胴を撃つ。）

新吾。　まゐつた。

平九郎。　や、見事だ、見事だ。長七、貴公は此頃めつきりと上達したぞ。

長七。　ありがたうございます。

（新吾と長七は面を取る。）

新吾。　籠手を撃つたらもう好いではないか。つゞいて胴へ撃ち込むとは何のことだ。

平九郎。　は、、負け惜みをいふなよ。眞劍勝負と相成つたら、そんな理窟を云つてゐられるものか。なんにしても貴公の負けだ。

長七。　稽古にかゝると何うも夢中になつていけません。どうかまあ堪忍してください。

平九郎。　なに、本庄にあやまることがあるものか。剣術の極意は相手をずば〳〵と斬りさへすればいゝのだ。まして唯今の時世では、なん時どこで眞劍の勝負が始まらないとも限らないから、平生からその積りで稽古をして、道具はづれでも何でも構はぬ、手あたり次第に引つぱたくがいゝぞ。内の先生はその流儀だ。よく判りましてございます。

長七。　（新吾と長七は會釋して火鉢の前に來る。板戸をあけて、女中およし、おみつ出づ。およしは大薬罐を持つ。）

およし。　お湯はございますか。

正雪の二代目

段　八。（火鉢の薬罐を取つてみる。）いや、空だ。空だ。水をさしてくれ。

おみつ。炭がございますか。

郡　藏。（炭取りを取る。）これも空だ。吝々しないで炭を一杯に持つて來てくれ。いくら我々でも寒いからな。

およし。でも、今は寒稽古の筈ぢやありませんか。

（およしは笑ひながら藥罐に水をさし、おみつは炭取りを持ちて去る。）

平九郎。さあ、今度はだれの番たな。

彌平次。手前です。

平九郎。むゝ、津村か。貴公は面をつけながら烟草を呑んでゐるのか。ひどく都合がいゝな。

彌平次。（進み出る。）これは講武所から流行り出した鶺鴒張りといふ烟管です。

平九郎。（烟管を取つてみる。）なるほどこれが鶺鴒張りといふのか。講武所の奴等も巧いものを考へ出したな。これならば面を着けてゐても、烟草が自由に喫へるから調寶だ。おれも早速買ふことにしよう。そこらの袋物屋に賣つてゐるか。

彌平次。ゑゝ、此頃はどこにでも賣つてゐますよ。

平九郎。はゝあ、色々の物が流行るな。（感心したやうに烟管をながめてゐる。）

彌平次。すぐにお稽古が願へますか。

平九郎。まあ、この烟管でおれに一服喫はせてみろよ。

（平九郎は大火鉢の前にゆきて烟草をのむ。下のかたの板戸をあけて、女中おみつは炭取りに炭を入れて出づ。）

おみつ。このぐらゐあれば宜しいでせう。

段　八。よし、よし。これだけあれば凍え死ぬ氣づかひはあるまい。

おみつ。皆さんは隨分寒がりなんですね。

（おみつは笑ひながら去る。）

新　吾。こゝの家の女どもは兎角われ〳〵を馬鹿にする奴が多いな。

平九郎。貴公達がいつでも手ひどく引つぱたかれるのを見てゐるからだ。はゝゝゝゝ。

（下のかたより伴左衛門の妹お千代、十八九歳、襷と手拭を持ちて出づ。）

お千代。どなたもお精の出ることでございますね。

平九郎。御覽の通り、この寒いのに汗をながして、みんな一生懸命に稽古を勵んで居ります。

お千代。それはお羨ましいことでございます。わたくしもどなたにかお稽古を願はれますまいか。

段　八。お嬢さん。わたしがお相手をいたしませう。（起ち上る。）

郡　藏。いや、お手前はあと廻しだ。けふは拙者がお嬢さんのお相手をすることに、昨日から決まつてゐるのだ。（これも起ちあがる。）

彌平次。これ、これ、手前はさつきから支度をして、こゝに出てゐるではないか。貴公達が道具を着けてゐるあひだに、手前が先づ一本お願ひ申すのだ。

平九郎。これは道具を早く着けてゐる者の勝だ。さあ、津村。貴公がお稽古を願ひなさい。

彌平次。（よろこんで。）承知いたした。

お千代。では、おねがひ申します。

彌平次。手前もお願ひ申す。

（二人は會釋して立向ひ、お千代は薙刀、彌平次は竹刀にて撃ち合ふ。平九郎は烟草をのみながら見物してゐる。他の門弟等も一心にながめてゐる。このうちに、正面の襖をあけて、大泉伴左衞門三十五六歳、髪は合儕、羽織袴にて出で、下のかたの板戸をあけて、門弟の一人千島雄之助、廿二三歳、羽織をぬいだる袴姿にて出で、いづれも立つたまゝにて勝負を見てゐる。やがて彌平次はお千代に撃たれる。）

彌平次。まゐつた。

段　八。又負けたか。どうも弱い奴だな。

彌平次。お嬢さんは手前にはどうも苦手だとみえて、残念ながら今日も撃ち込まれた。

郡　藏。貴公はお嬢さんの顔ばかり見てゐるから、身體中が隙だらけで、たちまちに撃ち込まれてしまふのだ。

平九郎。いや、そればかりではない。（笑ふ。）貴公がお千代さんに勝たうといふには、まだ一年以上の修業が要るな。

彌平次。なに、もう二月か三月も勉強すれば、互角の勝負までには屹と漕ぎ付けてみせますよ。（面をはづして汗をふく。）

平九郎。はゝ、どうもみんな負け惜みの強い連中ばかりだ。併しまあ其積りで、せい〳〵勉強してくれ。

伴左衛。（同じく笑ふ。）いや、武道を磨くものには、その負けじ魂が大切だ。女に負けて恐れ入つてゐるやうではいけない。二月三月の後といはずに、明日にもお千代に撃ち勝つ工夫をしなければならんぞ。

彌平次。かしこまりました。

（伴左衛門は坐る。彌平次は火鉢の前に戻る。お千代も鉢巻や襷を取る。）

長七。（進み出づ。）先生、お寒いことでございます。

伴左衛。おゝ、長七か。忙がしい中でよく精が出るな。

長七。仰しやる通り、このごろは商賣の方が夜も晝も忙がしうございますので、思ふやうにお稽古にも出られません。

伴左衛。この時節ではおまへの商賣の忙がしいのは當りまへだ。わたしが頼んで置いた刀の磨ぎもなるたけ早く仕上げて貰ひたいな。

長七。職人に申付けまして、せい〳〵念を入れて磨がせて居りますから、どうぞ明日までお待ちをねがひます。

伴左衛。あの刀は先祖傳來の鄉義弘だ。あれでなければ、まさかの時に思ふやうに腕を揮ふことが出來ないからな。念を入れて磨がせてくれ。

長七。はい、はい。もう少しお稽古を拜見いたしてゐたいのでございますが、何分にも店が忙がしうございますので、これで御免を蒙りまする。

伴左衛。おまへは町人であるから、武藝も大事だが、商賣も大事だ。忙がしい時には遠慮なく歸るがいゝぞ。（左右を憚るやうに。）こゝでくはしい事は云はぬが、ゆうべは色々の心配をかけたな。

長七。その御挨拶では恐れ入ります。では、どなたも御免ください。

（長七は伴左衛門とお千代に會釋し、更に一同にも會釋して、下のかたへ行きかゝる。）

平九郎。これ、これ、おれも二三日うちに磨ぎに遣るから、宜しく頼むぞ。

長七。いつでもお持ち下さい。

（長七は板戸をあけて去る。）

雄之助。（長七のあとを見送る。）町人にしては毎日よく精が出る。實に感心な男だなく

伴左衛。まつたく町人にしては、頼もしい男だ。それでも長七は商賣が刀屋だから、武藝に緣の無いこともないが、あの義平などは薪屋の悴でありながら、劍道執心とは面白いな。

新　吾。　ふだんから薪を割り馴れてゐるので、あいつの腕つ節はなか〳〵強うございます。

伴左衛。　むかしから下手な剣術を薪割り剣術といふが、義平の腕前はなか〳〵薪割りではないやうだ。貴公たちも油斷してゐると、町人どもに叩きまくられるぞ。

お千代。　長七さんや義平さんのほかにも、この道場へ通つて來る町人衆はまだ六七人ございますが、どの人もみな精が出るには感心して居ります。

雄之助。　町人や職人までが自然に武藝を勵むといふのも、やはり時世ですな。

平九郎。　たしかに時世だよ。かういふ穩かならぬ時世になつては、武士は勿論、町人でも職人でも唯安閑としてはゐられない筈だ。

伴左衛。　（うなづく。）さうだ、さうだ。蹙か腰抜けならば知らず、五體滿足の人間がたゞ安閑としてはゐられない時節だ。ふだんから云つて聞かせる通り、夷狄の黒船がそれからそれへと押掛けて來て、港を開けの、交易をしろのと、得手勝手のことをいふ。それを唯一戰に擊ち攘つてしまへばよいものを、意氣地のない幕府の役人どもは、揃ひも揃つた腰ぬけばかりで、相手の云ひなり次第に、先づ神奈川の港を開く。つゞいて江戸に公使館や領事館を置いて、わが神國を夷狄に蹈みにじらせるとは何の事だ。苟くも大和魂のある者が、それを

默つて見てゐられると思ふか。

雄之助。　それがために櫻田門の一件も起つたのでございますが、それでも幕府はまだ眼が醒めないのでございませうか。

伴左衛。　（鐵扇を握つて罵るやうに。）　往來なかで天下の大老の首を取られても、まだ眼のさめないやうな奴等を相手にして、議論は無益だ。もう斯うなつたら、腰ぬけの、骨無しの、弱蟲の、意氣地無しの、德川幕府などを賴まずに、めい〳〵の腕の力で攘夷を實行するより外はない。（自分の腕をたゝく。）この腕を働かせなければ駄目だ。この腕に物を云はせなければ何の役にも立たないのだ。その鬱勃たる慷慨悲憤の精神が諸人の腹の底からうづ巻きあがつて、武士は勿論、町人職人までが自然に武藝を勵むやうになつたのは、日月いまだ地に墜ちず、神州男兒の意氣衰へざる證據だと思へば、實に賴もしい、實に愉快だ。はゝゝゝゝゝ。（鐵扇をひらいて胸を煽ぐ。）

お千代。　さういふお話をうかゞひますと、女のわたくし共でも何だか此の胸が躍るやうでございます。

雄之助。　いつもながら先生の悲壯激越の御議論をうけたまはつて居りますと、わたくしも總身の血

が沸きあがるやうに思はれます。

平九郎。　貴公達でさへ其通りだ。まして拙者のやうに多年先生の御指南をうけてゐる者は、血が沸くの、胸が躍るのといふのを通り越して、腹のなかには絶えず大あらしが起つてゐて、腸が引つくり返りさうだ。（いよ〳〵激昂した様子で。）先生、是非とも攘夷を實行してくださ

い。

伴左衛。　それは云ふまでもないことだ。身不肖ながら大泉伴左衛門、橘の正連、楠家相傳の軍學を教へ、あはせて劍術を指南して、世間からは由井正雪の二代目であるなどとも噂されてゐるが、拙者は決して正雪のやうな謀叛を企てゐるのではない。わが日本國の危急存亡を救ふがために、まごころを盡して攘夷の議論を唱へ、更にそれを實行しようと考へてゐるのだ。おまへ達もかならず思ひ違ひをしてはならんぞ。いゝか。

一同。　（靡をそろへて。）わかりました。

伴左衛。　判つてゐるなら諄くは云ふまいが、みんなもよく覺えて置け。（更に聲を勵まして。）うかうかしてゐると、わが日本國はほろびるぞ。それを救ふには攘夷のほかは無いのだ。

一同。　はあ。

（下のかたの板戸をあけて、下總屋義平、廿二三歳、薪屋のせがれの拵へ、風呂敷づつみを抱へて出づ。）

義平。　皆さん、今日は……。（一同に會釋して進み出る。）先生、お寒うございます。

伴左衛。　義平、まゐつたか。町人のおまへ達はよく寒い寒いといふが、この道場では寒いの暑いのと云ふのを禁じてある筈だ。かりにも武藝を學ぶもの、殊にこの天下多事の際にあたつて、寒いの暑いのと窮いことを云つてゐられるか。なん時でも火水のなかへ飛び込むほどの覺悟がなければならない。たとひ町人でもこの道場に足蹈みをする以上、武士のたましひを持たなければならんぞ。

義平。　恐れ入りましてございます。つい口癖になつて居りますので、詰まらないことを申上げて御機嫌を損じました。なに、わたくしは些とも寒いことはございません。今まで空つ風の吹く店先へ出て、襦袢一枚で松薪を二十把ほども打ち割つてまゐつたのでございます。薪割り劍術だなどと皆さんにひやかされますが、どうして、どうして、わたくしの腕つ節はなか〳〵しつかりしたものでございますよ。

平九郎。　今も噂をしてゐたところで、おまへの腕の強いことは、おれ達もよく知つてゐる。お前や

刀屋の長七は町人ながらも頼もしい奴だと、先生も褒めてゐられるくらゐで、それだけに又餘計の小言もおつしやるのだ。有難いと思はなければならないぞ。

義平。　さう仰しやられるといよ〳〵痛み入ります。町人ながらも何かのお役に立ちますやうにと、せい〳〵勉強いたす積りでございますから、何分よろしく願ひます。

伴左衛。　そこで、けふは誰と立合はせるかな。

平九郎。　（雄之助に。）千島、貴公は今朝から誰とも立合はないやうだな。

雄之助。　午まへは他出して居りましたので、唯今はじめて道場へ這入つたのでございます。

平九郎。　では、丁度いゝ。貴公、この義平と立合はつしやい。

雄之助。　承知しました。では、支度をしてまゐります。（下のかたに去る。）

（義平は風呂敷づつみより稽古着や袴を出して着かへる。）

伴左衛。　おれはこれから急ぎの手紙を二三通書かなければならないから、しばらく奥へ行つてゐるぞ。

お千代。　お手紙をお書きになりますか。

伴左衛。　む、。神奈川の同志の者から密書が來た。京都からも來てゐる。すぐにその返事をかいて、江戸表の形勢をくはしく知らせて遣らなければならないのだ。

お千代。　（不審さうに。）そんなお手紙がいつ參りました。

伴左衛。　（すこし口籠つて。）え、午まへに來たのだ。

お千代。　わたくしは一向存じませんでしたが……。

平九郎。　いや、それは早飛脚が持つてまゐつたので、拙者がうけ取つて、すぐに先生におとゞけ申した。

お千代。　（まだ不審らしく。）あの、神奈川と京都から早飛脚が……。

伴左衛。　（叱るやうに。）なにも珍しがることはない。そんな密書はたびたび來るのだ。（起ちながら平九郎をみかへる。）平九郎、あとで鳥渡來てくれ。

平九郎。　はあ。

（伴左衛門は奥に入る。）

お千代。　わたくしはこの通りの生まれ付きで、よくくうつかりしてゐると見えまして、そんな密書がたびたび參ることを今まで些とも知らずにゐました。

平九郎。　勿論密書の儀でござれば、それを存じてゐるのは拙者一人、先生が口外せらるゝのも今日

がおそらく初めてゞござらう。（門弟等に。）貴公たちも決して他言してはならんぞ。

彌平次。（小聲で。）やはり攘夷の一件ですか。

平九郎。（意味ありげに。）時節が來れば自然にわかることだ。まあ、まあ、默つて先生にお任せ申して置け。先生には深いお考へがあるに相違ないのだ。

（義平をはじめ、門弟等は顏をみあはせて、なんとなく緊張した氣分になる。下のかたより雄之助は稽古着をつけて出づ。）

雄之助。（義平に。）お待たせ申した。

（雄之助は面籠手の道具をつける。義平も面を着ける。奥にて手をたゝく音がきこえる。）

平九郎。先生が手を鳴らしてゐられる。拙者を呼ばれたのかな。

お千代。兎も角もわたくしが行つてみませう。

平九郎。いや、拙者に相違ない。すぐにまゐりませう。

（平九郎は急いで正面の奥に入る。雄之助は道具をつけ、竹刀を持つてまん中に出る。義平も竹刀を持つて出る。）

雄之助。貴公はこのごろ大分上達したさうだから、遠慮なしに思ひ切つて撃ち込むぞ。

義平。お手柔かにねがひます。

（二人は竹刀にて撃ち合ふ。お千代と門弟等は見物してゐる。）

（二）

大泉家の奥の間。上のかたに床の間、これに「天地有正氣」と大きく書いたる掛地をかけ、時節の花を生け、軍書のやうなものも積んである。それにつゞいて菊水の紋を付けたる出入の襖。庭には松などの立木がある。左右は建仁寺垣。

（大泉伴左衞門は軍書の卷物をのせたる机を横にし、大きい手あぶり火鉢を前にして、敷皮の上に坐つてゐる。下のかたの緣づたひに深堀平九郎出づ。）

平九郎。御用でございますか。

伴左衞。むゝ。（頤で招く。）薪屋のせがれは稽古をしてゐるか。

平九郎。千島と立合つて居ります。

伴左衞。（苦々しげに。）おれは默つて聽いてゐたが、なぜ千島などと立合はせるのだ。千島のやうな正直者は遠慮會釋なしに撃ち込むではないか。

平九郎。　はあ。（頭をかく。）ついうつかりして飛んだことを致しました。刀屋のせがれには本庄を立合はせましたが……。

伴左衛。　本庄が負けたか。

平九郎。　はあ。

伴左衛。　それでなければいけない。いつも云ふ通り、相手は町人の素人だ。なんでも弱さうな奴を出して、向うに勝たせて置けばいゝのだ。（舌打ちして。）千島の奴め。本氣になつて無暗に相手をなぐるだらうな。

平九郎。　あの男のことですから遠慮なしに打んなぐるかも知れません。まつたく氣のつかない事をして恐れ入りました。（少しく聲をひくめる。）そこで、あの刀屋のせがれは例の軍用金を持つてまゐりましたか。

伴左衛。　ゆうべ窃と持つて來た。

平九郎。　（笑ひながら。）幾ら持つてまゐりました。

伴左衛。　五十兩持つて來た。刀屋はなか〳〵大身代だが、長七はまだ部屋住みだから、百兩二百兩などとまとまつた金は自分の自由にはならないらしい。

平九郎。　それでも五十兩ならば上出來の方でございませう。今度は薪屋の番でございますな。

伴左衛。　一と口に薪屋といつても、下總屋はこゝらでも古い店で、商賣も手廣くしてゐる。地所や家作も澤山に持つてゐる。殊におやぢは先頃死んでしまつて、今ではあの義平が跡取りだから、刀屋のせがれとは違つて錢金が自由になる。どうしても彼奴からは二三百兩ぐらゐは引き出さなければならない。その矢さきに千島のやうな奴を立合はせて、色氣も無しにほん〳〵打んなぐらせては、どうも工合が悪いではないか。

平九郎。　（いよ〳〵恐縮して。）はあ。ではこれからすぐに參つて、ふたりの立合ひを止めさせませう。

（起ちかゝる。）

伴左衛。　むゝ。本庄を又出すわけにも行くまいから、三上を出せ。あいつは口ばかりで、腕は弱いからな。

平九郎。　はい、はい。

（平九郎はあわてゝ引返さうとするを、伴左衛門は呼びとめる。）

伴左衛。　待て、待て。その勝負が片附いたら、義平をこゝへよこしてくれ。

平九郎。　軍用金のことはまだお話しにならないのですか。

伴左衛。　このあひだも烏渡ほのめかして置いたが、まだ本當の掛合ひには及んでゐないので、これから改めて富婁那の辯舌を揮はなければならないのだ。

平九郎。　正雪の二代目といふ先生の舌三寸で、百兩が二百兩になるか。

伴左衛。　おれが得意の楠流で說得して、二百兩がまた三百兩になるか。

平九郎、　三百兩がまた五百兩になるか。

伴左衛。　えゝ、貴樣も隨分慾張つた奴だな。

平九郎、　そこが楠流のお仕込みでございます。

伴左衛。　無駄を云はずに早く行け。行け。

（平九郎は早々に下のかたへ去る。）

伴左衛。　（あとを見送る。）あいつ小悧口のやうで、ときゞに仕損じを遣るので困る。おれの道場にゐる奴等にはどうして馬鹿が多いかな。

（奥の襖をあけてお千代出づ。）

お千代。　あの、深堀さんは……。

伴左衛、　平九郎は今そつちへ行つたが……。千島と義平はもう濟んだか。

お千代。　はい。

伴左衛。　義平が負けたらうな。

お千代。　（笑ふ。）それは知れたことでございます。初めから段が違ふのですから、まるで勝負にはなりません。眞向からお面をしたゝかに擊たれて、義平さんは泣きさうな顏をしてゐました。

伴左衛。　（舌打ちして。）大方そんなことだらうと思つた。千島の奴め、馬鹿正直だからな。

お千代。　なにが馬鹿正直でございます。たがひに立合つた以上は眞劍勝負も同樣で、擊つか擊たるかの二つより外はないではございませんか。

伴左衛。　理窟を云へばそんなものだが、そこには又、楠流の駈引もあるものだ。

お千代。　では、わざと勝を讓つてやれとでも仰しやるのでございますか。楠流はそんな卑怯なものでございますか。

伴左衛。　いや、さう云ふわけでもないが……。

お千代。　では、どうして千島さんが馬鹿なのでございます。そのわけを屹と伺ひませう。

伴左衛。　おれもあいつを馬鹿とは云はない、たゞ馬鹿正直な奴だと云つたのだ。

お千代。　馬鹿も馬鹿正直も同じことではございませんか。

伴左衛。　うるさいな。お前はなぜそんなに千島の肩を持つて、おれに食つてかゝるのだ。

お千代。　さういふあなたは、なぜ千島さんを馬鹿だと仰つしやるのでございます。わたくしには其譯が判りません。

伴左衛。　（じれる。）判らなければ默つてゐろ。あんな奴は馬鹿にきまつてゐる。馬鹿だ、馬鹿だ。この道場で一番の大馬鹿野郎だ。

お千代。　もし、お兄いさま。

伴左衛。　（お千代は屹となつて詰めよれば、伴左衛門はその顏をみて、急に氣がついて笑ひ出す。）はゝゝゝゝ。まあ、さう勃氣になるなよ。今のは冗談だ、冗談だ。はゝゝゝゝ。そこで、今こゝへ薪屋のせがれが來る。

お千代。　義平さんが參るのでございますか。では、わたくしは御遠慮申しませう。（つんとして起ちかゝる。）

伴左衛。　いや、おまへはこゝにゐて呉れた方がいゝのだ。おれは薪屋のせがれに賴むことがあるから、お前もそばから口を添へて一緒に賴んでくれ。おまへが賴めば、あいつは屹と承知するよ。

お千代。　わたくしが賴めば、どうしてあの人が承知するのでございます。

伴左衛。　（意味ありげに笑ふ。）まあ、いゝから俺の云ふ通りになつてくれ。

お千代。　さうして、なにを賴まうとなさるのでございます。

伴左衛。　（小聲で。）實は軍用金の一件だ。

お千代。　軍用金……。

伴左衛。　黑船燒擊、異人館燒擊、それらの軍用金が要るではないか。

お千代。　（うなづく。）あゝ、そのことでございますか。

伴左衛。　何事も御國のためだ。そのつもりでお前も加勢してくれ。

お千代。　（凛然として又うなづく。）はい、判りましてございます。

（お千代は俄に緊張した氣色で形をあらためる。下のかたの緣づたひに下總屋義平出づ。）

義　平。　先生。お呼びになりましたか。

伴左衛。　おゝ、義平。もつと近く來てくれ。けふは折入つてお前に內談がある。

義　平。　はい。

お千代。　どうぞ御遠慮なくお進みください。

義平。　はい、はい。

（義平はお千代の顔を横目に見て、伴左衛門の前にねざり寄る。）

伴左衛。　（形をあらためて。）扨、ほかでもないが、彼の黒船の一件だ。それはわたしからも毎々云ひ聞かせてあるから、おまへ方も萬々承知の筈だが、このごろの世のありさまを見るに、どうしてももう此儘では濟まされない。一度は大風雨を起さなければ駄目だ。近いうちに時機をみて、攘夷の手はじめに先づ異人館の燒撃を行る。

義平。　（これも緊張して。）異人館の燒撃……。

伴左衛。　今だから云ふが、去年の六月、高輪の東禪寺へ斬込んだのも、みんなわたしが同志の者だ。併しあんなことではいけない。今度はもつと大がかりに遣る。

義平。　もつと大がかりに……。

伴左衛。　叱つ、大きな聲をしてはならない。そこで先つ江戸にある異人館を一度に燒き拂つて、それから水陸二手に分かれ、陸をゆく者は神奈川横濱へ押寄せて地雷火を仕掛ける。海をゆく者は横濱の沖へ乘り出して、そこにかゝつてゐる黒船に十八筒小筒を撃ちかける。水陸挟み撃の手筈は已に整つてゐるのだ。して、それはいつの事でございます。

伴左衛。　なにを云ふにも大事の企てであるから、その時機をみるのが大切だ。はやまつて仕損じては、折角の苦心も水の泡となるからな。

義平。　御もつともでございます。

伴左衛。　したがつて、その時機はいつとも決まつてゐないが、遠からず實行する筈になつてゐる。勿論わたし達ばかりではない、ほかにも同志の攘夷家が大勢あつて、先頃から内々でその打合せをしてゐるのだ。

義平。　先刻、密書といふのもそれでございますか。

伴左衛。　さうだ。就ては何をいふにも先立つものは金で、その軍用金に困つてゐる。（ため息をつく。）勿論それ〳〵に手をまはして調達してはゐるものゝ、何分にも大仕事で莫大の金が要るからな。（相手の顔をぢつと視る。）なか〳〵思ふ半分も出來ないのだ。

義平。　（同情するやうに。）さうでございませうなあ。その御苦心は幾重にもお察し申します。

伴左衛。　察してくれるか。そこで、どうだらう。甚だ申しにくい儀ではあるが、何事も御國の爲だ

と思つて、おまへから三百兩ばかり都合してはくれまいか。

義平。　三百兩……。（少しかんがへてゐる。）

（伴左衞門はお千代に眼くばせして、何か云へと指圖する。）

お千代。　もし、下總屋さん。

義平。　はい、はい。

お千代。　今もお聞きの通りの次第で、兄も一生懸命の場合でございます。わが日の本は神の御末、その神國が夷狄に汚されるのを、唯おめ〳〵と眺めては居られません。女でこそあれ、わたくしも兄とこゝろを一つにして、御國のために何かの御奉公をいたしたいと考へて居ります。それにつけても先に立つのは軍用金のことで、わたくし共も明け暮れに心を痛めて居るのでございますから、そこをよくお察し下さいまして……。

伴左衞。　われ〳〵の企ては、彼の由井正雪の謀叛や大鹽平八郎の一揆などと同じやうに考へられては困る。くどくも云ふやうだが、わが日本國のために夷狄を擊ち攘ふのであるから……。

義平。　判つて居ります。先生のお企てが由井正雪や大鹽平八郎と違つてゐることは、わたくしにもよく判つて居ります。そこで、唯今わたくしが考へて居りましたのは、先生の仰しやつた三百兩、その金では何程のお役にも立つまいかと存じられますので……。

お千代。　でも、三百兩といへば大金ではございませんか。

義平。　勿論大金には相違ございませんが、非常の場合に三百兩ぐらゐでは……。せめて五百兩ぐらゐは差出しませんでは……。

伴左衞。　え、五百兩……。（お千代と顏をみあはせる。）おまへが五百兩の金を都合してくれるか。

義平。　微力ではございますが、そのくらゐのお役を勤めませんでは、わたくしの氣が濟まないやうに存じられます。先生が三百兩と仰しやるものを、こちらから五百兩に糶り上げまして、甚だ失禮のやうでもございますが、どうぞわたくしの心のうちも御推察下さいまして、折けて五百兩の金子をお納め下さるやうに……。もし、お孃さま。あなたからも先生にお取りなしを願ひます。

伴左衞。　（膝を打つて。）いや、あつぱれ見あげたこゝろざしで、伴左衞門も感服いたした。三百兩と申し出しても、あるひは百兩か二百兩に値切らるゝことかと窃かに危んで居つたところ、却つてそちらから五百兩に糶りあげるとは……。あゝ、これぞまことの大和魂、日本人は

皆かうなくてはならぬことだ。拙者もおほえず感涙に咽び申した。同志の人々も定めて滿足であらう。一同に代つて拙者からお禮申すぞ。（一禮してお千代をみかへる。）どうだ、お千代。町人のなかにも下總屋のやうな天晴れの男もある。わたしも好い弟子を持つて、同志の人々にも肩身が廣いぞ。

お千代。　ほんたうに嬉しいことでございます。わたくしからもこの通り、お禮を申上げます。（手をつく。）

義平。　いえ、いえ。さう仰しやられては痛み入ります。（誇るがごとく。）一寸の蟲にも五分の魂とやらで、わたくしのやうな者でも大和魂の半分ぐらゐは持ち合せて居りますよ。はゝゝゝ。

伴左衞。　して、その金はいつ屆けてくれるな。

義平。　どうぞ明日のゆふ刻までお待ちを願ひたうございます。

伴左衞。　おまへを疑ふわけではないが、餘りに呑み込みが早いので……。（念を押すやうに。）これ、義平。よもや間違ひはあるまいな。

義平。　（笑ふ。）忠臣藏の口眞似ではございませんが、下總屋義平も男でございます。

伴左衞。　いや、それで拙者も安心いたした。

お千代。　かへすゝ〳〵も有難うございます。

義平。　（お千代の顏をみる。）先生をはじめ、お孃さまにまで、そんなに御叮嚀の御挨拶をうけたまはりますと、五百兩はおろか、身上をみんな振つても差出したくなります。

伴左衞。　それは又おひ〳〵に賴むかも知れないが、差當りは約束だけの金をな。

義平。　はい、はい。その御念には及びません。

（下のかたより緣づたひに平九郎が一枚の名札を持ちて出づ。）

平九郎。　先生。こんな人物がまゐりました。

伴左衞。　（名札をうけ取る。）山杉甚作……。はて、聞いたやうな名前だな。

平九郎。　なにか內密の用件で暫時御意得たいと申すことでございます。

伴左衞。　內密の用件……。（かんがへる。）まさかに留守も使へまい。兎もかくも通してみろ。

平九郎。　はい、はい。（引返して去る。）

義平。　お客來とございましては、わたくしはもうこれでお暇申します。

伴左衞。　もう歸るか。用がなければ道場で遊んで行つたがよからう。（お千代に。）おまへは茶の支度

をしろ。

（お千代は起つて奥に入る。義平はそのうしろ姿を見送つてゐる。伴左衛門と顔をみあはせ、極りが悪さうに會釋して早々に立去る。）

伴左衛門　はやはり笑つてゐる。やがて縁づたひに、平九郎は山杉甚作を案内して出づ。甚作は廿四五歳、ぶつ裂き羽織に小倉の袴をはき、朱鞘の大刀を持ち、少しく酒に醉つてゐる。）

平九郎。　御案内申しました。

甚作。　先日品川でお目にかゝつた中國の藩士、山杉甚作源の頼經でござる。（云ひながら坐に着く）

伴左衛門。　おゝ、先日御意得申した山杉甚作どのでござつたか。好うこそお尋ねくだされた。その節は場所柄とて殊々と御挨拶も致さなんだが、拙者は大泉伴左衛門橘の正連、あらためてお見識りくだされ。平九郎、おまへも此のお方を存じてゐる筈だな。

平九郎。　實はよく存じて居ります。（甚作に）その節は飛んだ失禮をいたしました。

甚作。　（笑ふ。）いや、拙者こそ散々の亂暴、重々の失禮、なんとも申譯がござらぬ。しかし場所が場所でござれば、おたがひに無禮咎めも相成るまい。はゝゝゝゝ。

平九郎。　（笑ふ。）今日も大分御機嫌がよいやうでございますな。やはり南の方でございますか。

甚作。　南といはず、北と云はず、いはゆる南船北馬といふわけで、ゆく先々を飲みあるく。これでなければ豪傑の英氣を養ふことは出來ませんぞ。いや、拙者ばかりでない。御貴殿たちが先日品川で豪遊をきはめて居られたのも、おなじく英氣を養ふ爲でござらう。違ひますかな。

（伴左衛門と平九郎は顔をみあはせて苦笑ひする。）

伴左衛門。　その節は武士にもあるまじき放埒墮弱の體を御覽に入れて、面目次第もござらぬ。

甚作。　いや、いや、今日のやうな世の中には、放埒も結構、亂暴も苦しうござらぬ。つまりは大石内藏助の廓通ひも同じことで、いざといふ時に天下の眼をおどろかすやうな大仕事をいたせば、それで立派に武士の務を果たしたといふものでござる。

平九郎。　まつたく左樣かも知れませぬな。

（奥よりお千代は茶を運びて出づ。）

お千代。　（甚作に會釋して）疎茶でございます。

甚作。　いや、おかまひ下さるな。（お千代をみて。）これはなか〳〵の美人。御主人の御愛妾でござるか。

伴左衛。　いや、それは拙者の妹で千代と申す不束者、お見識り置きをねがひます。

甚　作。　おゝ、妹御でござつたか。これは失禮。拙者は山杉甚作と申す田舍侍、今後はよろしくお頼み申す。

（甚作とお千代は挨拶する。）

甚　作。　就ては早速ながら御無心がござる。拙者は醉ざめで喉が渇いてなりませぬ。何か大きいものに冷い水を一杯頂戴いたしたうござるが……。

お千代。　はい、はい。かしこまりました。

（お千代は奥に入る。平九郎は伴左衛門の顏をみて、自分もあちらへ行かうかといふ。伴左衛門うなづく。）

平九郎。　では、わたくしも暫時あちらへ參つて居りますから、御用があらばお呼びください。

（平九郎は二人に會釋して、下のかたへ去る。）

甚　作。　道場はなか〳〵御盛んのやうでござるな。世間の噂を聞きますれば、御貴殿は劍道のほかに軍學をも指南せられ、由井正雪の二代目と謳はれてゐると申すこと。拙者も今後は何かにつけて御敎授にあづかりたいと存じてをります。

伴左衛。　（得意らしく。）正雪の二代目などとは及びも付かぬこと。由ない噂を立てられて、拙者も却つて迷惑して居ります。御覽の通りの町道場で、あまりに盛んと申すほどでもござらんが、天下の形勢不穩になるに連れて、このごろは武術の稽古に通ふ者が俄に殖えてまゐりました。

甚　作。　失禮ながらどのくらゐの御門人を御指南でござるな。

伴左衛。　（儼然として。）以前は二三百人でござつたが、唯今では五百人を少々越えて居ります。

甚　作。　なに、五百人以上……。（すこし驚く。）それは本當でござるか。

伴左衛。　武士にいつはりはござらぬ。夜も晝も拙者の道場に竹刀の音の絶え間はなく、なにぶんにも手狹でござるに因つて、近いうちに町内の角屋敷を買ひ取り、道場を唯今の三倍ぐらゐに取擴げようと存じて居ります。

甚　作。　ふむう。（いよ〳〵驚いた體。）それはまつたく御盛んのことでござるな。して、その五百人あまりの門弟衆のうちで、素破と云ふとき先生と生死を俱にすると云ふやうな者が、およそ幾人ぐらゐござるかな。

伴左衛。　いづれも義氣金鐵のごとき者共ばかりでござれば、拙者が一たび采をふれば、誰も彼も皆

よろこび勇んで、火水のなかへも飛び込みます。

甚作。　では、五百餘人の門弟がいづれも先生と生死を倶にして、喜び勇んで火水のなかへも……ふむう。（又もや感嘆する。）さりとはお羨ましい。御貴殿が日頃のお仕付け方も思ひやられて山杉甚作源の頼経、まことに感服仕つた。いや、恐れ入つてござる。（手をつく。）

伴左。　はゝ、左様に御賞美くだされては、拙者こそ却つて恐れ入る。どうぞお手をお上げくだされ。

（奥よりお千代は大きい湯呑みを盆に乗せて出づ。）

お千代。　お冷を汲んでまゐりました。

（甚作はだまつて手をついてゐる。お千代は不審さうに兄の顔をみる。）

お千代。　（小聲で。）泣いてゐらつしやるやうでございますね。

（伴左衛門は微笑みながら、そのまゝ置いてゆけと眼で知らせる。お千代はうなづいて窃と奥に入る。）

伴左衛門。　山杉氏、水がまゐつた。お飲みなされぬか。

甚作。　はあ。ありがたうござる。有難うござる。

（甚作は感激の涙をぬぐひながら額をあげて、湯呑みの水を飲む。）

伴左衛。　もう一杯さし上げませうか。

甚作。　いや、十分でござる。唯今のお話で醉も一時に醒めました。（形をあらためる。）さて先生。先日品川の妓樓で初めてお目にかゝつた時には、拙者も大醉、御貴殿もよほど御酩酊のやうに見受けましたが、その砌り御貴殿には盛んに攘夷の説を唱へられ、夷狄にわが國土を蹂躙せらるゝは、神州男兒の恥辱であると仰せられたことは、醉中ながらも拙者はよく記憶してをります。

伴左衛。　なるほど其節は、隣座敷のお手前と測らずもお心安く相成つて、醉に乘じていさゝか平生のこゝろざしを述べましたる次第、かならずお笑ひくださるな。

甚作。　いや、笑ふどころではござらぬ。徳川の膝元といふこの江戸にも、御貴殿のごとき忠勇義烈の御仁が隱れてござるかと思へば、拙者は涙がこぼれるほどに嬉しうござつた。まつたく嬉しうござつた。（又もや感涙をぬぐふ。）就てはよそながら其の御様子を拝見いたしたさに、今日突然に推参いたした處、床には文天祥の正氣の歌がかけてある。五百人の門弟は先生と生死を倶にするといふ。これにて疑ふところもなく、御貴殿の人物も確に見とゞけ

ましたれば、あらためて拙者が胸中の秘密を打ちあけ申す。（左右をみまはす。）そこらに猟く人はござるまいな。

伴左衛門　（伴左衛門は無言にてうなづけば、甚作は一膝すゝみ寄る。）

甚作。　拙者は中國の藩中なれど、唯今は浪人の身の上、攘夷の手はじめとして品川御殿山にある異人館を焼撃いたす覚悟でござる。

伴左衛門。　え。お手前が……。

甚作。　同志の者はわづかに五人、今宵の四つを合圖に討ち入つて、異人どもを片端より斬り倒し、その宿所をも焼き拂ふことに評議一決いたした。

伴左衛門。　（いよ〳〵驚く。）あの、御殿山の異人館へ夜討を企てらるゝと……。（わざと落付いて。）それはお勇ましいことでござるな。

甚作。　もとより命を捨てゝかゝるからは、味方の多きを望むではござらぬが、五ケ國の異人館へ五人が向ふのでは、一ケ國一人の割合で、人數が少々不足でござる。就ては御貴殿の人物を見込んで……。

（云ひかけて相手の顔色をうかゞへば、伴左衛門はおどろいて黙つてゐる。）

甚作。　先生と生死を倶にするといふ五百人の門弟衆のうちから、武藝もすぐれ、心も逞しい者廿人ばかりを引連れて、なにとぞ我々に御加勢下さるまいか。

伴左衛門　（伴左衛門は返事に困つてゐる。）

甚作。　（たゝみ掛けて。）御貴殿が日ごろ唱へてゐらるゝ攘夷の御議論を、われ〳〵がこれから實行しようといふのでござる。よもや御異存はござるまいな。

伴左衛門。　勿論それに異存はござらんが……。

甚作。　では、お聞きとゞけ下さるか。

伴左衛門。　先づお待ちなされ。唯今も申す通り、拙者に於ても勿論異存はござらんが、異人館焼撃の企ては……。少しく時節が早いかと思はれます。

甚作。　時節が早いと申さるゝか。

伴左衛門。　（あわてゝ。）早い、早い。たしかに早うござる。時機到來すれば拙者も遣ります。併し今は早うござる。まして今夜などとは餘りに燥まつて居ります。

甚作。　しかし形勢は次第に切迫して……。

伴左衛門。　いや、早い、早い。

甚　作。　もはや一日も猶豫は相成りません。

伴左衛。　（いよ〳〵慌てゝ。）いや、いや、何と云はれても、早い、早い。早うござる。お手前たちは年が若いので、たゞ一圖に燥り立たるゝが、天下の大事は左様に輕卒に取扱ふべきものではござらん。大局を見るの明あるものは、今しばらく隱忍して、おもむろに形勢の變化を窺はなければなるまい。なにしろ、まだ早い、早い。お手前たちも無謀の企てはお止めなされ。

甚　作。　無謀の企て……。（むつとする。）では、貴殿はどうでも不承知か。われ〳〵の味方になつては下さらぬか。日ごろの攘夷論は皆いつはりか。

伴左衛。　いつはりではござらんが、時節がまだ早いといふのに……。お手前はどうも理窟の判らぬ御仁だな。

甚　作。　二日目には早い早いと、それにかこつけて逃れようとするは……。さては貴殿、口と心とは違つてゐるな。

伴左衛。　（ぎよっとして。）なんでも宜しい。お手前達のやうな亂暴者と論は無益だ。お歸りください。歸らつしやい。

甚　作。　いや、歸るまい。これほどの機密を打ちあけて、世間に洩れたら萬事の破滅だ。どうでも不同意とあるならば、拙者にも覺悟があるぞ。（朱鞘の大刀をひき寄せる。）

伴左衛。　（おどろいて身がまへする。）これはいよ〳〵馬鹿をいへ。われ〳〵攘夷の血祭に、先づ貴樣の素つ首をぶつ放すのだ。さあ、おのれ、覺悟しろ。（詰めよる。）

甚　作。　いや、どうも呆れた奴だ。

伴左衛。　（伴左衛門も床の間の刀を取らうとする。この時、うしろの襖をあけて、お千代はうかゞひ出で、慳劍をぬいて甚作に斬つてかゝる。甚作も不意におどろいて身をかはしながら、鐵扇を把つてあしらひ、遂に懷劍を打ち落してお千代を引き据ゑる。そのあひだに、伴左衛門は刀を取つて起ちあがり、大きい聲で呼ぶ。）

伴左衛。　狼藉者だ、狼藉者だ。早くまゐれ。

甚　作。　（甚作は舌打ちしてお千代を突き放し、緣より庭に飛び降りる。）おのれ、卑怯者め、おぼえてゐろ。

（甚作は下のかたへ逃げかゝると、恰も庭口より千島雄之助が駈け來り、出逢ひがしらに甚作に突

雄之助。　おのれ、曲者……。

（雄之助は組みつくを、荘作は振り放して逃げ去る。雄之助はつゞいて追つてゆく。お千代も落ちたる懐剣を拾ひて、これも庭へ駈け降りるを、伴左衛門は呼びとめる。）

伴左衛。　これ、これ、どこへゆくのだ。

お千代。　日ごろの修業も仇となつて、おめ〳〵とおくれを取つたのが残念でございます。あとを追つかけて二度の勝負を致さなければなりません。

伴左衛。　いや、怪我でもすると詰まらない。あんな奴は千島にまかせて置けばいゝのだ。

お千代。　その千島さんに怪我でもあつては猶大變でございます。

（お千代は下のかたへ駈けてゆく。）

伴左衛。　これ、待て、待て。どうも氣違ひじみた奴が多いな。

（下のかたの縁づたひに平九郎が先に立ち、津村彌平次、本庄新吾、犬塚段八、三上郡藏出づ。彌平次等四人はいづれも竹刀又は木太刀を持ち、段八と郡藏は胴と籠手を附けてゐる。）

平九郎。　先生。何事が出來いたしたのでございます。

伴左衛。　今の浪士の奴めが不意におれに斬付けようとしたのだ。

彌平次。　なにか口論でもなさいましたか。

伴左衛。　別に喧嘩口論をしたと云ふわけでもない。あれは亂心してゐるのだ。

四　人。　氣ちがひでございますか。

伴左衛。　むゝ。氣ちがひだ。氣ちがひだ。

平九郎。　して、あいつはどこへ參りました。

伴左衛。　おれが鐵扇で眉間を一つ擊つて遣つたら、緣から轉げ落ちて這々の體で逃げて行つた。

新　吾。　眉間を擊たれて……。緣から轉げ落ちましたか。

伴左衛。　それが卽ち東軍流の極意で、微塵の一手といふのだ。おまへ達に見せなかつたのは殘念であつたな。

段　八。　まつたく殘念でございました。

郡　藏。　して、相手はよほどの手利きでございましたか。

伴左衛。　この道場のうちでは恐く彼の相手に立つ者はあるまい。あれほどの腕前を持ちながら亂心するとは氣の毒なことだ。それに付けても千島とお千代はどうしたか、行つて見て來い。

ふたりは彼を追つて行つたのだ。

平九郎。左様でございますか。それ。

（平九郎はみかへりて指圖すれば、彌平次等四人はあわたゞしく引返して去る。それを見送つて、平九郎は摺寄る。）

平九郎。先生。實のところは一體どうしたのでございます。

伴左衛。あいつ等は徒黨を組んで、攘夷の手始めに御殿山の異人館を燒撃するから、おれにも加勢しろといふのだ。

平九郎。ふむう。（顔をしかめる。）して、御承知なさいましたか。

伴左衛。途方もない、誰がそんな氣ちがひの仲間入りをするものか。それを忌だと斷つたら、今度は貴様を血祭にするといふので、おれも少し驚いたよ。

平九郎。併しお怪我が無くつて結構でした。（笑ひながら。）先生。これからは些と川岸をかへて、よし原の方へ乘り出さうではございませんか。品川へは兎角にさういふ亂暴ものが入り込んで、とんだ係り合ひになりますからな。

それればかりでなく、品川は眼と鼻のあひだで、どうも近所の噂になり易いからな。

伴左衛。さうでございますよ。軍用金の使ひ途が萬一露顯した日には大しくじりですから……。

平九郎。（下のかたを見て。）叱つ、叱つ。

（平九郎はあわてゝ口を噤む。庭口よりお千代と雄之助が引返して出づ。）

雄之助。おゝ、亂暴者はどうした。

伴左衛。殘念ながら取逃がしました。

お千代。取逃がしたか。わたくしは殘念でなりません。（泣く。）あんな男に不覺を取りまして……。お兄い樣に合はす顔がございません。

伴左衛。（打消すやうに。）まあ、いゝ、いゝ。あんな者を相手にするな。あんな奴は逃がして遣る方がいゝのだ。あれは氣ちがひだ、亂心者だ。

雄之助。お千代さんのお話では、攘夷の血祭に先生の首を取るとか申したさうで……。

伴左衛。それが氣ちがひの證據だ。攘夷家が攘夷家の首を取る……。そんな馬鹿なことがあるものか。

お千代。でも、ほんたうの氣ちがひのやうにも見えませんでしたが……。

伴左衛。　いや、氣ちがひだ、氣ちがひに相違ない。おれにはちやんと判つてゐるのだ。

（庭口より下總屋義平、鉢巻き片肌ぬぎにて木太刀を持ちて出づ。）

義　平。　先生、亂暴者が押込んださうでございますな。

伴左衛。　はゝ、騒ぐことはない。相手はもう逃けてしまつた。

義　平。　浪士が斬込んだと聞きまして、わたくしはびつくり致しました。

伴左衛。　そんなことに一々びつくりしてゐて、今の世の中が渡れるものか。浪士などが十人や二十人斬込んで來ても。東軍流の一手で……。（鐵扇で撃つ眞似をする。）みんな此の通りだ。はゝゝゝゝ。

（伴左衛門は反り返つて笑ふ。義平は鉢巻をはづして肌を入れる。）

雄之助。　併しあんな奴は又出直して來ないとも限りませんから、めつたに油斷はなりますまい。

平九郎。　今の先生は千金のおん身だ。用心しなければなるまい。いろは歌留多にも油斷大敵と教へてあるからな。

お千代。　（窓をみる。）冬の日はみじかいので、もう暮れかゝりました。今夜は庭にかゞりを焚いて。夜陣を張らなければなりますまい。

義　平。　では、わたくしの内から松薪を運ばせませう。お立關先から庭先まで一面にかゞりを焚いて、味方の威勢をみせて遣るがよろしうございます。

伴左衛。　いや、世間の手前もあるから、むやみに騒ぎ立てゝはならない。今夜は宵から門をしめて、おとなしく謹愼してゐろ。たとひ何處で何事が起つても、決して駈け出してはならないぞ。

一　同。　（わからぬながらに。）はあ。

伴左衛。　ほかの門弟にも申聞かせて、今夜は一人も表へ出るなと云へ。出ると飛んだ連坐を受けるぞ。

一　同。　はあ。

伴左衛。　義平も早く家へ歸れ。

義　平。　（よんどころなく。）はい。

伴左衛。　表の門を早くしめろ。

平九郎。　今からすぐに閉めますか。

伴左衛。　えゝ、知れたことだ。閉めろ、閉めろ。

（伴左衛門は無暗に急き立てる。一同は烟にまかれてゐる。）

第二幕

（一）

芝の田町、薪屋の店さき。正面は店にて、軒には下總屋と漆で書いたる看板の額をかけ、上のかたの壁には帳面が澤山にかけてある。よき所に帳場格子、店火鉢などもある。店の上のかたは出格子の窓、その下には用水桶がある。下のかたには大きい物置小屋、それに薪や炭俵が積み込んである。（十二月初旬の午に近い頃。下總屋の若い者時助、勘八の二人は小屋の前に出て、時助は薪を割ってゐる。勘八は炭を切ってゐる。小僧仙吉は炭團を干してゐる。近所の娘おもと、おきんの二人は遊藝の稽古の歸りのこゝろにて、燕口や撥などを持つて立つてゐる。煤掃きのやうな音きこゆ。）

時助。どこだ、どこだ。さつきからトンパタ遣つてゐるのは……。さう〳〵しい奴だな。

仙吉。横町の伊勢屋だよ。

勘八。横町の伊勢屋か。あいつも變り者だな。今から煤掃きをする奴もねえものだ。

時助。ちげえねえ。江戸の煤はきは權現樣以來、十三日にきまつてゐますと云つて敎へてやれ。

おもと。煤はきぢやあない、引越しよ。

勘八。引越しならあんなに叩き立てることはねえ。おらあ煤はきかと思つた。

時助。それにしても伊勢屋はどこへ引越すのだ。

おきん。こゝらは品川の海に近いから、山の手の遠いところへ引越すと云つてゐてよ。

勘八。そんなに黒船を怖がることもあるめえ。そのためのお臺場が出來てゐるぢやあねえか。

おもと。それでも安心は出來ないと云つて、隣町の三河屋さんでも、女や子供たちを川越の親類にあづけたと云ふわ。

おきん。あたし達もどこかへ逃げて行きたいわねえ。

時助。なにしろ世間がさう〳〵しくなるのは困つたものだ。黒船は押寄せて來ねえにしても、御殿山のやうな一件があるからな。

仙吉。あの時はまつたく怖かつたな。

おもと。異人館が燃えあがつた時には、あたしは顫へてしまつてよ。

勘八。異人館へ斬込むのは、今度で三度目ださうだが、どうも悪いことが流行るものだ。

（店の奥より亭主義平出づ。それを見て、若い者等はあわてゝ仕事にかゝる。義平は表へ出て下のかたを見る。）

義平。伊勢屋ではいよ〳〵引越しか。

時助。もう御存じですか。

義平。きのふそんな話をちよいと聞いたが……。（笑ふ。）品川の近所は怖いさうだ。こゝらは海に近いので、ふだんから黒船を恐れてゐるところへ、御殿山の燒撃騒ぎが始まつたので、いよ〳〵怯氣が付いて、急に引越すことになつたらしい。

勘八。今聞けば、三河屋でもおかみさんや子供を立退かせたさうですよ。

義平。氣の弱い者はずん〳〵立退くことだ。今に何事がはじまるか判らないからな。

（若い者も娘も義平の前にあつまる。）

時助。旦那、まだ何事か始まりますか。

義平。始まらないとは限らない。いや、屹と始まるに相違ない。このあひだの御殿山の燒撃どころぢやあない。（得意らしく笑ふ。）もつと度偉い騒ぎが出來するかも知れないぞ。

一同。（顏をみあはせる。）さうでせうか。

義平。浪士の五人や十人が異人館へ斬込んだところで何うなるものか。

勘八。それでも異人は驚くでせうな。

義平。おどろくかも知れないが、そのくらゐのことでは日本人のほんたうの腕前をみせるわけには行かない。江戸の異人館なんぞを燒いたところで、多寡が知れてゐる。横濱にゐる異人館を片つ端からみんな燒き拂つてしまつて、それから沖にかゝつてゐる黒船を一撃ちするのだ。それでなければ、本當の攘夷が出來るものか。

時助。さうなると軍ですね。

義平。（だん〳〵元氣して來る。）今もいふ通り、五人や十人が斬込むのとは譯が違つて、何百人が水陸二手にわかれて押寄せるのだからな。地雷火を仕掛ける、鐵砲をうち掛ける、火をつける。その火のなかを潜つて、槍や刀で攻め込んで行く。その勇ましいこと、考へても身體がぞく〳〵するやうだ。

勘八。萬一そんなことが出來したら大變ですね。

義平。なにが大變だ。さうなるのが本當だとは思はないか。下總屋義平が男をみせる時節が來る。

のだ。（笑ふ。）それを思ふと、赤穂義士の討入りなどは仕事が小さい、まるで子供だましのやうなものだな。はゝゝゝゝゝ。

（時助と勘八は顔をみあはせてゐる。仙吉進み出づ。）

仙吉。旦那。向ふ横町の烟草屋で炭團を持つて來てくれと云つてゐました。

時助。さうだ。わたしも忘れてゐた。横町の鐵物屋でも堅炭を五俵持つて來いと云ふことでした。

義平。よし、よし。堅炭でも佐倉でも、炭團でも消炭でも、なんでも勝手に呑負つてけ、持つてけ。かういふ時節になつたら、商賣の損徳なんぞを考へてゐる暇はないのだ。（娘等にお

まへ達も幾ら町家の娘つ子だからと云つて、この時節に燕口なんぞをかゝへて、遊藝のお稽古に通つてゐると云ふことがあるものか。わたしの先生の道場へ行つて、ちつと薙刀の稽古でもしたらどうだね。

おもと。あら、いやだ。ねえ、おきんちやん。

おきん。あたし達に劍術のお稽古なんぞ出來やあしないわ。

義平。なに、出來ないことがあるものか。先生の妹さんなんぞは年は若し、容貌は好し、それで薙刀でも、竹刀でも免許皆傳で、大抵の男はかなはないのだからな。

おもと。そりやあ劍術の先生の妹ですもの、強いのは當り前だわ。

おきん。あの人は内弟子の若い人とよく一緒にあるいてゐるわね。

義平。（聞きとがめる。）先生の妹さんが内弟子の若い男と一緒にあるいてゐる。その相手はなんといふ男だね。

おもと。なんといふ人だか知らないけれど、あたしも見たことがあるわ。色の白い、好い男の人よ。

おきん。ゆうべも横町の暗いところで、寒い風に吹かれながら二人で内所話をしてゐたわ。

義平。むゝ。（かんがへる。）その相手は千島だらう。どうも二人の樣子がちつと可怪いと思つてゐたら、やつぱりさうであつたのか。（舌打ちして。）いま〳〵しい畜生だ。

おもと。あら、そんなに怒ることはないぢやありませんか。

おきん。おまへさん、やきもちを燒いてゐるの。をかしいわねえ。

二人。はゝゝゝゝ。

義平。（氣がついて、苦笑ひする。）なに、やきもちを燒くといふわけぢやあないが、行儀のきびしい大泉先生の道場で、そんな不埒を働くとは怪しからぬことだ。

おきん。　不埒だか何だか判らないが、たゞ立話しをしてゐただけのことよ。

義平。　その立話しが不埒だといふのだ、男と女が暗いところで立話しをしてゐるなどといふのは確かに不埒だ、不埒千萬だ。

（義平の様子が悪いので、娘等は顔を見あはせる。）

おもと。　あんまりおしやべりをしてゐるといけないから、あたしもう歸るわ。左様なら。

おきん。　さよなら。

（娘ふたりは早々に下のかたへ立去る。）

仙吉。　先生のところの千島さんといふ人が、お嬢さんと一緒にあるいてゐるのを、わたしも見たことがありますよ。

義平。　おまへも見たか。相手はいよ〳〵千島だな。

仙吉。　たしかに千島さんでした。

時助。　いくら先生の妹でも、もう年ごろの娘だからな。

勘八。　それに、あの千島といふ人は、先生の道場では一番好い男だから、さうなるのが當りまへかも知れないよ。

義平。　（ひとり言のやうに。）當りまへかも知れない。併し先生はおそらく御存じあるまいな。（また思ひ直して。）えゝ、勝手にしろ。勝手にしろ。そんなことは大事のまへの小事だ。女のことなどに屈托して、天下の大事を忘れてはならない。下總屋義平は男をみがけば好いのだ。

（義平はひとり言のやうに云ひながら奥に入る。）

時助。　（笑ふ。）旦那の忠臣藏が又始まつたぜ。

仙吉。　（臺詞のやうに。）下總屋義平は男でござんす。

勘八。　大きな聲をすると、奥へきこえるぞ。馬鹿な奴だ。

時助。　しかし旦那の劍術氣ちがひにも困つたものだな。

勘八。　それが此頃はだん〳〵に嵩じて來て、異人館燒撃がどうだとか斯うだとか、途方もねえことを云ひ出すぢやあねえか。

時助。　冗談にもそんなことを云つて、世間へきこえたら飛んだ目に逢ふぜ。どう考へても困つたものだ。

（上の方より刀屋のせがれ長七、風呂敷につゝみたる二三本の刀を持つて出づ。）

長七。　お寒うございます。

時助。毎日空つ風が吹いて困ります。

長七。旦那は……。道場ですか。

勘八。いゝえ、内にゐます。まあ、おかけなさいん。

（女中おとよ、奥より出づ。）

勘八。刀屋の若旦那が入らしつたと、旦那にさう云つてくれ。

おとよ。はい、はい。（奥に入る。）

時助。ぢやあ、おれも鐵物屋へ堅炭をとゞけて來るかな。

勘八。おれも手傳つて遣らう。（仙吉に。）おまへも早く烟草屋へ炭團を持つて行け。

仙吉。あい、あい。

（仙吉は炭團を笊に入れて、下のかたへ去る。時助と勘八は小屋に入りて炭俵を持ち出す。奥より義平出づ。）

義平。今日は……。この頃はお忙がしいでせうね。

長七。むやみに忙がしくつて困ります。けふもこれからお出入り先を一二三軒廻らなければなりません。だん〳〵に寒くなつて、こちらの御商賣もお忙がしいでせう。

義平。なに、商賣なんぞは忙がしくつても閑でも構ひません。天下の大事が胸一杯につかへてゐるので、十露盤なんぞを彈いてゐる氣にはなれませんよ。

（時助と勘八は炭俵をかつぐ。）

二人。ぢやあ、ちよいと行つて來ます。

長七。御苦勞ですね。

（時助と勘八は炭俵をかついで、下のかたへ去る。奥よりおとよは茶を持つて出づ。）

おとよ。いらつしやい。

（おとよは茶をすゝめる。長七は默禮する。おとよはそのまゝ奥に入る。）

義平。これから道場へお出でなさるのかえ。

長七。實はその事で少し御相談に來たのですが……。（左右を見まはす。）おまへさんは先生のところへ軍用金をお納めになりましたか。

義平。納めました。おまへさんもお納めになつたさうですね。

長七。わたしは五十兩おとゞけ申しました。

義平。　五十兩……。（少いといふやうな顏をする。）わたしは五百兩納めましたよ。

長七。　五百兩……。（おどろく。）そんなにお納めになりましたか。

義平。　先生は三百兩といふお話でしたが、こつちから驛りあげて五百兩にしました。なにしろ大がかりの仕事ですからね。莫大の軍用金も要りませうよ。わたしも何とか都合して、そのうちにもう少し納めたいと思つてゐます。

長七。　（かんがへる。）併し先生は深堀さんやお弟子たちを連れて、品川や吉原で毎晩のやうに全盛遊びをしてゐると云ふぢやありませんか。

義平。　（うなづく。）それはわたしも知つてゐますが、世の中が引つくり返るやうな大仕事を目論んでゐるんだから、些とぐらゐの氣晴しは仕方がありますまい。お弟子達だつて、みんな命がけで懸つてゐるんですからね。

長七。　さう云へばさうですが……。（又かんがへる。）わたし達ばかりでなく、攘夷の軍用金と名をつけて、ほかのお弟子達からも取立てゝゐるさうですね。

義平。　（又うなづく。）ほかのお弟子達だつて、都合の出來る人はみんな出すがようござんすよ。それが本當ですよ。（云ひかけて少し考へる。）お前さんは何か先生を疑つてゐるんですかえ。

長七。　疑ふと云ふわけでもありませんが……。この頃は先生の遊び方が少し激しいので……。

義平。　（笑ふ。）まあ、まあ、長い眼で見ておいでなさい。大石内藏助を疑つた人達は、あとで恥をかきましたよ。はゝゝゝゝ。お前さんも用を片附けて早く道場へおいでなさい。わたしも午飯を食ふと。すぐに行きますから。（奥にむかつて呼ぶ。）おい、おい。

おとよ。　はい、はい。（奥より出づ。）

義平。　もう午飯の支度は出來たかね。

おとよ。　もう出來て居ります。

長七。　（起ちあがる。）ぢやあ、わたしも行きませう。

義平。　追ひ立てるやうでお氣の毒ですが、どうも此頃はおちついてゐられないので……。（おとよに。）さあ、早く膳を出してくれ。

おとよ。　はい、はい。（奥に入る。）

長七。　どうもお邪魔をしました。

義平。　御めんなさい。

（義平は早々に挨拶して奥に入る。長七はかんがへながら下のかたへ行きかゝり、ふと向ふを見て

思案し、引返して小屋のなかに隠れる。向ふより大泉伴左衛門が先に立ち、深堀平九郎、津村彌平次、本庄新吾、いづれも酔ひて出づ。）

平九郎。　天氣は好いが、風がなか〳〵寒うございますな。

伴左衛。　取分けこの冬は空つ風が吹くやうだな。こゝまで來るうちに酒の酔も大抵醒めてしまつた。

彌平次。　（笑ふ。）それで丁度いゝかも知れません。道場の近所へ來て、あんまり赤い顔をしてゐるのは、些と極まりが悪いやうですからな。

新　吾。　近所ばかりでなく、留守番の奴等にも猜まれますよ。はゝゝゝゝ。

（四人ば店さきを通りかゝる。）

伴左衛。　亭主は店にゐないやうだな。

平九郎。　朝から道場へ詰めかけてゐるのかも知れません。

伴左衛。　さういふ氣ちがひも無くては困る。あいつが軍用金を奉納してくれたので、先づ當分は遊べるといふものだ。

平九郎。　（店の方をみかへりながら。）先生……。

伴左衛。　（伴左衛門の袂をひく。）

（頓着せず。）併しゆうべは何うも面白くなかつたな。

新　吾。　やつぱり遊び馴れたせゐか、吉原よりは品川の方が居心がいゝやうでございます。

彌平次。　そんなことを云ふとお里が知れるぞ。はゝゝゝゝ。

伴左衛。　本庄のいふ通り、やつぱり品川の方が居心がいゝやうだ。吉原で寒さうな冬がれの田圃をながめてゐるよりも、品川の廣い海を見晴らした方が、どうも清々して氣分がはつきりするではないか。深堀はどうだな。

平九郎。　遊びと名が付けば、どつちでも悪くはありませんが、このあひだのやうな事もありますから、先づ當分は南の方角を避けた方が無事らしうございますよ。

（店の奥より義平の母おかめ、四十餘歳、出づ。）

おかめ。　おゝ、先生ではございませんか。おふくろか。せがれはどうしたな。

伴左衛。　義平は奥で御飯を頂いてをります。呼んでまゐりませうか。

おかめ。　いや、別に用もないのだ。（促すやうに。）先生、まゐりませう。

平九郎。　こゝで水を一杯貰つて行かうかな。

伴左衛。　お冷でございますか。

おかめ。

平九郎。いや、いや、道場はすぐそこだ。先生。家へ歸つてからゆつくりと召上るが好うございます。

伴左衛。ひどく氣ぜはしない男だな。

（平九郎は彌平次と新吾に眼くばせして、早く先生を連れてゆけといふ。ふたりも心得て進みよる。）

彌平次。さあ、まゐりませう。

新　吾。まゐりませう。

伴左衛。えゝ、うるさい奴等だ。

（三人にせき立てられて、伴左衛門は上のかたへ行きかゝる時、下のかたより山杉甚作出づ。）

甚　作。先生……。

伴左衛。大泉先生……。誰だ、誰だ。（みかへる。）おゝ、お手前は……。

甚　作。（伴左衛門はおどろく。平九郎も甚作をみて驚きながら身がまへする。）

（笑ひながら。）いや、先日は飛んだ失禮をいたして、何とも申譯がござらぬ。實はそのお詫ながら參上いたす途中、こゝでお目にかゝつたのは仕合せでござつた。

伴左衛。（油斷せず。）なに、詫に來る……。あれほどの狼藉をはたらいて、唯一通りの詫や挨拶で濟むと思はつしやるか。第一、お手前のやうな人物に屢々出入りをされては、拙者甚だ迷惑だ。足ぶみは屹とお斷り申すぞ。

甚　作。（やはり笑つてゐる。）御迷惑は萬々察して居りますが、先づ先日のおわびを篤と申述べた上で、更に少々御無心申上げたい儀がござるので……。

伴左衛。無心がある……。（相手を屹と睨む。）扨はお手前、又もや拙者の首を取りに來たのか。

（伴左衛門は刀の柄に手をかける。平九郎は彌平次等に眼くばせして、いづれも鯉口をくつろげる。）

甚　作。いや、いや、その御用心は御無用。今日拙者が御無心申すのは、大泉先生の首ではござらぬ。

伴左衛。では、なんの無心だ。

甚　作。往來中では些と申しにくい儀でござるが……。（左右をみまはして、少しく聲を低める。）實は軍用金の御分配にあづかりたいのでござる。

平九郎。なに、軍用金を分配しろ。

（笑ふ。）これだけ申せば、先生にはよくお判りの筈だ。この上にくどいことは申すに及ばぬ。

甚　作。先生も拙者も一つ穴の貉だと御承知くださればよいのでござる。あはゝゝゝゝ。

（伴左衛門は相手の顔をながめて考へてゐる。甚作は笑ひながら進みよる。）

甚　作。　まだ御疑念が晴れぬとあれば、もう少し詳しく申しませうか。

伴左衛。　いや、判つた、判つた。

甚　作。　おわかりになりましたか。

伴左衛。　むゝ。（笑ふ。）お手前の正體も大抵は判つたやうだ。

甚　作。　御安心なされたか。はゝゝゝゝゝ。

伴左衛。　はゝゝゝゝゝ。

平九郎。　（不安らしく。）先生……。

伴左衛。　まあ、いゝ。（甚作に。）さあ。兎も角もお越しなされ。

（伴左衛門は先に立つてゆく。彌平次と新吾はまだ不安らしく甚作を取圍んでゆく。）

平九郎。　（あとに殘りて考へる。）して見ると、あいつもやつぱり食はせ者かな。どうも油斷のならないことだ。

（平九郎は人々のあとを追つて上のかたへ去る。おかめは始終無言で見送つてゐる。小屋の内より長七も伸びあがりて見送る。下のかたより八町驅同心野澤喜十郎、手先ふたりを連れて出づ。手先の一人は長七に眼をつけて喜十郎にさゝやく。喜十郎うなづいて指圖すれば、手先は長七に靡をかける。）

手先甲。　もし、おまへさんは刀屋の備前屋さんだね。

長　七。　左樣でございます。

手先乙。　旦那が御用と仰しやるのだ。

長　七。　はい。

喜十郎。　おまへは備前屋のせがれ長七だな。丁度好いところで逢つた。すこし調べることがあるから番屋まで來てくれ。

長　七。　どんなお調べでございませうか。

喜十郎。　べらばうめ。御用の調べ事が往來で出來るものか。貴樣は蹩ぢやああるめえ。二本の足でずん〳〵歩いて來い。ぐづ〳〵してゐると縄を打つぞ。

手　先。　さあ、來い、來い。

（喜十郎は先に立ち、手先ふたりは長七を圍みて、下のかたへ引返して去る。おかめは驚いてあとを見送つてゐる。奥より義平出づ。）

おかめ。　お前、刀屋の長さんが自身番へ連れて行かれたよ。

義平。　長さんが番屋へ……。誰が連れて行きました。

おかめ。　八町堀のお役人のやうだつたよ。

義平。　なんだらうな。（考へる。）どんな様子か、ちよいと行つて覗いて來ませう。

（義平は出て行かうとするを、おかめは引きとめる。）

おかめ。　うつかり行つて係り合になるといけないよ。

義平。　なに、大丈夫です。

（義平は振切つて出てゆく。）

（二）

第一幕の道場。

（お千代は鉢巻、襷がけにて薙刀を持ち、千島雄之助は稽古着に道具をつけて竹刀を持ち、稽古をしてゐる。やがて二人はうなづき合ひて稽古をやめ。左右をみまはして進みよる。）

雄之助。　（小聲で。）誰もゐないやうです。稽古はこのくらゐにしませう。

（お千代はうなづいて鉢巻を取る。雄之助も面を取りて顏の汗をふく。）

お千代。　そんなに汗が出ましたか。

雄之助。　あなたと立合ふのですもの、どんな寒い日でも汗が出ますよ。油斷をしてゐたら、向ふ脛を手ひどく掻つ拂はれますからね。

お千代。　なんであなたにそんな事をするものですか。大丈夫ですよ。あなたこそわたしを憎がつて、隨分ひどくお撲ちなさる事がありますよ。

雄之助。　それは先生や深堀さんの見てゐる時だけのことですよ。ほかに誰もゐないときに何でそんな暴つぼいことをするものですか。

お千代。　どうだか當てになりませんわ。

（二人は仲よく寄添つて、上のかたの高いところに腰をかける。）

お千代。　この二三日は急に寒くなりましたね。

雄之助。　なにしろもう十二月の聲を聞いたのですから、このくらゐの寒さが本當でせうよ。この空模樣では近いうちに雪かも知れません。歳の暮に積られると、出這入りが不便で困ります。いくら世の中がさう〳〵しいからと云つて、道普請ぐらゐしたら好さゝうなものだが、ど

この町内でも此頃はちつとも構ひませんからね。

お千代。　まあ、そんなことは何うでもいゝぢやありませんか。それよりも千島さん。大變なことがありますの。

雄之助。　大變な事……。なんですか。（云ひかけて氣がつく。）あ、誰か來たやうです。

お千代。　あら、誰か來ましたか、

（二人はあわてゝ道場のまん中に出て、薙刀と竹刀を取り、掛け聲をしながら二三度撃ち合つて又やめる。）

お千代。　誰も來やしませんわ。

雄之助。　來ないやうですね。はゝ、なんのことだ。

（二人は左右をうかゞひて、笑ひながら再び腰をかける。）

雄之助。　そこで今のお話の大變とは、どんなことです。浪士でもまた斬込みましたか。

お千代。　いゝえ、そんなことぢやありません。千島さん。（揶揄する。）あなたとわたしとの秘密を、兄が薄々感付いたらしいのです。

雄之助。　先生が感付いた……。（案外おちついてゐる。）さうかも知れませんよ。先生だつて盲でも聾でもないのですからな。

お千代。　おまへが何かにつけて千島を庇ふのはどうも可怪い。正直に白狀しろと云つて、兄がわたしを責めるのです。

雄之助。　そこで、あなたは白狀しましたか。

お千代。　どうして白狀出來るものですか。わたしは飽までも知らないと云ひ切つてゐるのです。

雄之助。　（笑ふ。）いつそ思ひ切つて白狀したらどうです。先生も却つて安心なさるかも知れない。

お千代。　なんで安心するものですか。物堅い兄のことですから、どんなに立腹するか判りません。立腹なされば丁度幸ひです。

雄之助。　あなたは破門、わたしは勘當されるかも知れません。

お千代。　（いよ〳〵平氣で笑ふ。）あなたは勘當、わたしは破門、さうなればいよ〳〵結構で、願つた り叶つたりですよ。

雄之助。　（呆れたやうに男の顏をみる。）あなた、どうかしたのですか。

お千代。　なぜです。

雄之助。　（用心するやうに起ち上る。）あなた、なんだか變ですわ。氣でも違つたのぢやありません

か。

雄之助。　冗談云つてはいけません。かう見えても、あなたよりは氣は確です。あなた達の方が化かされてゐるのですよ。

お千代。　何に化かされてゐるのです。

雄之助。　（又笑ふ。）この道場に巢を作つてゐる古狸と古狐……。まあ、そんなものでせうな。

お千代。　古狸と古狐……。

雄之助。　あなたはどうも正直だからいけない。この道場は化物屋敷と心得てゐれば好いのですよ。

お千代。　はゝゝゝゝゝ。

雄之助。　（俄に下のかたを見る。）あら、又だれか來たやうですよ。（薙刀を把り直して出る。）

お千代。　まあ、よろしい。先生に感付かれた以上は、もうびく〳〵することはありません。そんな芝居は止しにして、まあこゝへお掛けなさい。少し御相談することがありますから。

雄之助。　（お千代はまだ不安らしく下のかたを窺ひながら、再び腰をかける。）御承知の通り、世の中がだん〳〵騒がしくなつて來たので、幕府では別手組といふものをこしらへて、旗本や御家人の次三男を新規お召抱へといふことになりました。

（お千代はうなづく。）

雄之助。　おかげで冷飯食ひの次三男が食ひ扶持にありつけると云ふわけで、わたしも近いうちに別手組お召抱へを願ひ出ようと思つてゐるところでした。さうなれば、先生に破門されても、こゝの道場を放逐されても、驚くことはありません。あなたも勘當されゝば丁度幸ひです。

お千代。　二人が手を引かれてこゝを出て行かうではありませんか。

雄之助。　（かんがへる。）そりやもう、一緒になりたいのは山々ですけれども……。御國のために苦勞してゐる兄を見捨てゝ、このまゝこゝを出て行くのは、どうも濟まないやうな氣もしますので……。

雄之助。　それだから化かされてゐると云ふのですよ。眉毛に唾でも附けて、まあ、お聽きなさい。

（雄之助はお千代にさゝやく。お千代は一々おどろいて聽いてゐる。このあひだに、奥の襖をあけて大泉伴左衞門出で、ふたりの樣子をうかゞつてゐたるが、やがてだしぬけに呶鳴りつける。）

伴左衞。　これ、なにをしてゐるのだ。

（ふたりはびつくりして飛び退く。）

雄之助。　おゝ、先生でございましたか。

伴左衛。　なにが先生だ。貴様のやうな奴に先生と呼ばれては迷惑千萬だ。けふかぎり破門するぞ。

雄之助。　（おどろきもせず）わたくしを破門すると仰しやいますか。

伴左衛。　勿論のことだ。仔細は一々云ふにも及ぶまい。貴様は早々にこの道場を出て行け。お千代は一間に押籠めて窮命するから、さう思へ。

雄之助。　わたくしの破門は致し方ございませんが、不義の御成敗ならばお千代さんも一緒に御勘當をねがひませう。わたくしだけ逐ひ出されるのは片手落ちでございます。

伴左衛。　えゝ、やかましい。貴様にそんな指圖をうける覺えはない。お千代はおれの妹だから、おれが勝手に仕置をするのだ。貴様はだまつて早く立去れ。

雄之助。　いや、片手落ちではわたくし飽までも不承知でございます。わたくしを逐ひ出すならば、お千代さんも御勘當をねがひます。（お千代に。）さあ、あなたも支度して一緒にお出でなさい。

伴左衛。　お千代。おまへは一足も動くことはならんぞ。兄が大勢の弟子を取立てゝ、まさかの時には御國のために竭さうとしてゐるのを、おまへは豫て知つてゐる筈ではないか。その兄の手助けをしようともしないで、内弟子の一人と不義密通をはたらくとは、なんたる心得違ひだ。

雄之助。　（笑ふ。）さう仰しやる先生が深堀さんを始めとして、大勢の弟子たちを代る〴〵に引き連れて、三日にあけずに品川や吉原へお乘り出しになるのは、どう云ふお心得でございます。わたくしは馬鹿正直と札附きにされて、みんなから仲間はづれにされてゐるので、一度もお供をしたことはありませんが、なんでも金錢を湯水のやうに撒き散らして、大盡遊びをなさると云ふことでございますが……。

伴左衛。　おれの遊蕩は別に仔細のあることだ。大石内藏助が祇園島原撞木町に遊興したのは、一方には世間の眼をくらまし、一方にはおのれが英氣を養ふためだ。燕雀焉んぞ大鵬のこゝろざしを知らんとはこの事で、貴様たちのやうな小人ばらに英雄豪傑のこゝろざしが判ると思ふか。馬鹿な奴め。

雄之助。　正雪の二代目といふ先生の道場にまるつて、あしかけ二年苦んだお蔭で、その英雄豪傑のこゝろざしと云ふものが、わたくしにもよく判つて來ました。英雄豪傑といふのは、心にもない議論を吐いて、世間を瞞着して、軍用金を澤山にかき集めて、自分の道樂に使ひ捨てることを云ふのです。

伴左衛。（すこし慌てゝ。）なんだ、なんだ。怪しからぬことを申す奴だ。もう一度云つてみろ。

雄之助。（又笑ふ。）幾度云つても同じことです。破門になつた以上、わたくしはもうお暇申します。

（起ちあがる。）先生。帰り際にたゞ一言申上げて置きます。軍用金ももう随分お取立てになりましたらうから、先生がお得意の攘夷論もこゝらで大抵打止めになすつた方が宜しからうかと存じます。どうも長々御厄介になりました。では、お千代さん。

（雄之助はお千代に眼で知らせて、下のかたへ立去る。お千代は薙刀を羽目にかける。）

伴左衛。（あとを見送つて罵る。）あいつ途方もないことを云ふ奴だ。これ、これ、お千代。おまへはよもやあんな奴と一緒に出て行きはしまいな。

お千代。お兄いさま。千島さんの云つたことは本当でございますか。

伴左衛。な、なんで本当なものか。一から十までみんな嘘だ。あいつめ、だしぬけに破門を申渡されたので、氣が顚倒して、眼が眩んで、口から出まかせの囈語をいふのだ。熱に浮かされた病人もおなじことで、相手にならない。あんな奴の云ふことを少しでも眞面目に聽いてはならないぞ。

お千代。英雄豪傑といふのは、心にもない議論を吐いて、世間の人を瞞着して、軍用金を澤山に取りあつめて、自分の道樂に使ひ捨てるのを云ふのださうでございます。

伴左衛。（呶鳴る。）うそだ。嘘だ。あいつの云ふことは皆んな嘘だ。それがおまへには判らないか。

お千代。あんな狐や狸のいふことを眞面目に聽いてはならないと云ふのに……。どつちが本當の狐か狸か。わたくしには正體が判らなくなりました。まあ、奥へまゐつてゆつくりと考へてみませう。

（お千代は兄に會釋して、下のかたへ立去る。）

伴左衛。（かんがへる。）腹立ちまぎれに破門を云ひ渡したが、かうなると千島の奴めを無暗に逐ひ出すのも考へものだぞ。むゝ、さうだ、さうだ。

（伴左衛門は俄に起つて下のかたへ行かうとすれば、出合ひがしらに深坳平九郎出づ。）

平九郎。おゝ、先生。千島を破門なすつたのでございますか。

伴左衛。お千代と不義を働いたので、一旦は破門を申渡したのだが……。まだ立去りはしまいな。

平九郎。内々で支度をしてあつたものと見えまして、手早く荷物を取りまとめて居ります。

伴左衛。では、いよ／＼油斷がならない。あいつに少し云つて聞かせることがあるから、もう一度こゝへ連れて來い。

正雪の二代目

平九郎。こゝへ連れてまゐりますか。當人はすぐに立去るやうに云つて居りますが……。

伴左衛。（せいて。）それだから早く連れて來いといふのだ。あいつ何うも見抜いたらしいからな。

平九郎。なにを見ぬきました。

伴左衛。英雄豪傑とは、こゝろにもない議論を吐いて、世間の人を瞞着して、軍用金をかき集めるのだなどと平氣で云ふのだ。

平九郎。（おどろく。）あいつがそんな事を云ひましたか。ふだんから馬鹿正直だと思つて油斷してゐたら……。それは怪しからん。實に案外でございました。

伴左衛。それだから迂濶にあいつを放逐するのも少し不安心になつて來た。無暗なことを世間へ吹聽されては困るからな。

平九郎。困ります、困ります。大困りでございます。では、破門の一件は無論にお取消しでございませうな。

伴左衛。むゝ、取消しだ、取消しだ。早く行け。

平九郎。はい、はい。（早々に引返して去る。）

伴左衛。どうもおれが些と拙かつたな。千島の奴め。おれの前でも平氣であんなことを云ふやうでは、お千代にも何を云つて聞かせたか判らないぞ。念のためによく詮議して置かなければならない。これ、お千代……お千代。

（伴左衛門は奥へ行かうとすれば、出合ひがしらに襖をあけて、山杉甚作出づ。）

甚作。先生。いつまで拙者を待たせて置くのでござる。

伴左衛。おゝ、山杉氏……。實は少々こちらに取込みがござつて、まことに失禮をいたした。さあ奥へお越しなされ。

甚作。いや、こゝで結構でござる。（坐る。）うけたまはれば何かお取込みがあるといふ、その最中に長居はお邪魔、早速用談に取りかゝりますが、彼の軍用金わけ前の一條、お聞き入れ下さるか。

伴左衛。では、貴公。異人館燔撃などと云つたのは嘘か。

甚作。お察しの通り。（笑ふ。）御貴殿は堂々たる門戸を張つて、軍學劍術指南の看板をかけてゐるので、おなじ嘘をついても人がすぐに信用する、軍用金も忽ちあつまる。それに引きかへて我々のやうな痩浪人は、なにを云つても取合ふ者もなく、旨い酒も容易には飲まれぬといふ始末。あまりお羨ましいので、つい

一と狂言かきました。

伴左衛。この間はあんなことを云つて、拙者を試しに来たのだな。

甚　作。失禮は幾重にも御免ください。併し迂濶に冗談も云へないもので、あれから四五日過ぎると、ほんたうに御殿山の異人館に火をつけた奴があつたには少し驚きました。

伴左衛。實は貴公等の仕業であらうと推量してゐたのだが……。さうすると、貴公はあの一件にかかり合ひ無しか。

甚　作。どうして、どうして、あんなことに係り合ふほどの度胸はありませんよ。はゝゝゝゝゝ。

伴左衛。そこで、貴公は幾ら吳れといふのだ。

甚　作。さあ、百兩ばかり……。如何でせう。

伴左衛。（首をふる。）いけないな。

甚　作。では、七八十兩……。

伴左衛。いけないな。

甚　作。では、ぎり〳〵のところで五十兩……。それでも御不承知か。

（伴左衛門はだまつてゐる。）

甚　作。それでも御不承知とあれば致し方がない。尾羽うち枯らしても山杉甚作源の賴經。御貴殿から二十兩や三十兩は貰ひたくない。

伴左衛。（見縊つたやうに。）貰ひたくなければ、この相談を止めたらどうだな。

甚　作。その代りに、大泉先生の攘夷論は口ばかりで、あれは僞者でござる、食はせ者でござると、大きい聲で世間を吹鳴つてあるきますぞ。（笑ふ。）まあ、喧嘩は止めにして、おとなしく五十兩お貰し下さい。

伴左衛。五十兩は高いな。

甚　作。では、幾らと云はれるな。

伴左衛。先づ、三十……五兩ぐらゐかな。

甚　作。三十五兩……。どうも勘定が悪いな。でしまします。

伴左衛。その往生際がよくないな。

（伴左衛門は焦らすやうにまだ澁つてゐる。下のかたより下總屋平出づ。）

義　平。先生。（云ひかけて、甚作を見て躊躇する。）

伴左衛。なんだ。

（義平はやはり躊躇してゐる。）

伴左衛。なにか急用か。

義　平。はい。

甚　作。それでは拙者は暫時御遠慮いたさうか。

伴左衛。氣の毒だが、もう一度奥でお待ちくださ

（甚作は澁々ながら奥に入る。）

義　平。（聲を低めて。）先生。一大事でございます。備前屋のせがれが番屋へ連れて行かれました。

伴左衛。長七が自身番へ連れて行かれた。それはどうしたのだ。

義　平。なんだか不安心でございますから、わたくしもあとを追つて行つて、番屋のかけで窃と様子を窺つてをりますと、町人の身分で何で大泉の道場へ出這入りをするのだといふ詮議でございます。

伴左衛。町人でも武藝を習ふものは此頃幾らもある。それをなんで詮議するのだ。

義　平。先づその詮議から始まつて、それからだん〳〵に先生の詮議に取りかゝると、長七も意氣地のない奴で、色々のことを饒舌つてしまひまして、攘夷の軍用金として下總屋義平は五百兩を納めたの、自分は五十兩を納めたの、誰々は幾ら出したのと、みんなべら〳〵と申立てたのでございます。

伴左衛。仕様のない奴だな。

義　平。このあひだの晩、御殿山の異人館へ火をつけたのは先生達の仕業と睨んでゐるとみえまして、役人は頻りにそれを詮議してゐました。

伴左衛。（罵るやうに。）そんな事をおれが知るものか。ばか〳〵しい。

義　平。それは御存じないとしても、一方の企てが露顯いたしましては一大事でございます。先生はどうなさいます。

伴左衛。一方の企て……。（義平の顏を見て、やゝ曖昧に。）むゝ、それは少し困るな。

義　平。（いよ〳〵亢奮して。）わたくしはもう覺悟してをります。しかし長七のやうな意氣地無しとは違ひますから、萬一召捕りになりまして、かうなつたらよもや無事では濟みますまい。（いよ〳〵亢奮して。）わたくしはもう覺悟してたとひ火水の拷問をうけましても、むやみに白狀するやうな卑怯な眞似はいたしません。

伴左衛。下總屋義平は男でございます。町人でこそあれ、わたくしも天下の志士の一人でございま

す。

（伴左衛門は默つて考へてゐる。）

義　平。　あなたはどうなさいます。正雪の二代目で尋常に切腹をなさいますか。それとも捕手をひき受けて、花々しく斬死をなさいますか。

伴左衛門。　さう〳〵しい。まあ、靜にしてくれ。

（下のかたより津村彌平次出づ。）

彌平次。　おい、下總屋。おふくろが呼びに來てゐるぞ。

義　平。　おふくろが來ましたか。

彌平次。　なんだか知らないが、顏の色を變へて、駈け込んで來て、すぐに怜を呼んでくれと云ふのだ。

義　平。　その用は大抵わかつてゐます。先生、もうお別れでございます。

（義平は覺悟して下のかたへ去る。）

彌平次。　をかしな奴だな。先生、義平はどうかしたのでございますか。

（伴左衛門はだまつてゐるので、彌平次は不思議さうに立去る。それと入れちがひに下のかたより

平九郎出づ。）

平九郎。　千島の奴はどうしても肯かないで、強情に立去つてしまひました。

伴左衛。　（みかへる。）千島はたうとう立去つたか。

平九郎。　それからお千代さんもこんな書置をのこして、出て行かれたさうでございます。

伴左衛。　お千代も出て行つたか。（怜がはしく書置をひらいて讀む。）

平九郎。　やはり千島にそゝのかされたのでございませうな。

伴左衛。　狐狸の化物屋敷を立去るに就て、お兄いさまの手箱のうちから金百兩を拜借してゆくと書いてある。

平九郎。　行きがけの駄賃に金百兩とは……。お千代さんにも似合はない大膽不敵なことでございますな。これはいよ〳〵驚きました。

伴左衛。　まだ驚くことがある。刀屋の長七が召捕られて、なにも彼も白狀したさうだ。

平九郎。　（驚く。）え、ほんたうでございますか。

伴左衛。　薪屋のせがれが今こゝへ知らせに來たのだ。

平九郎。　なんだか樣子が可怪いと思つたら、義平はそれを云ひに來たのですな。

伴左衛。　このあひだの晩、御殿山へ火をつけたのは、おれ達の仕業と睨まれてゐるらしいのだ。

平九郎。　（すこし安心して。）いや、それならば全く覺えのないことで、別に心配することもございますまい。何とでも申開きは立ちます。

伴左衛。　御殿山の一件は勿論おほえの無いことで、その申開きは立つ筈だが、困つたことには不斷からおれが心にもない攘夷論を唱へてゐる。おまけに異人館を攻めるの、黒船を燒撃するのと云つて、大勢から軍用金を取立てゝゐる。それらの機密が長七の口から洩れたらしいから、所詮無事には濟むまいではないか。今さら嘘でございますとも云へず、云つたところで、上役人が素直に承知する筈があるまい。

平九郎。　（ため息をつく。）さうでございませうな。そこで、先生はどうなさいます。

伴左衛。　それをおれも考へてゐるのだ。最初は一時の強がりに攘夷論を唱へたのが、だん〳〵調子に乗り過ぎて、たうとう本物にされてしまひさうだ。（同じく嘆息する。）おれも正雪の二代目かな。

平九郎。　さうして、長七はどうなりました。

伴左衛。　長七はどうなつたか知らないが、義平もつゞいて引擧げられるらしい。おふくろが呼びに來たといふのは大方それだらう。

平九郎。　（怪えたやうに。）さうすると、今度はこつちの番でございますな。

伴左衛。　さう思はなければなるまい。平九郎、おまへも覺悟しろ。

平九郎。　え、覺悟とは……。

伴左衛。　世のことわざにも嘘から出た誠といふことがある。今さら役人どもに召捕られて、我々は僞者でございます、食はせ者でございますと、本音を吹いて白狀するのも、あまりと云へば恥さらしだ。もう斯うなつたら、乘りかゝつた船で仕方がない。いつそ思ひ切つてほんたうの攘夷家で押通してしまはうではないか。人は一代、名は末代、どうも其の方が立派なやうだぞ。

平九郎。　（よんどころなく。）はあ。

伴左衛。　おれは書置をかいて切腹する。おまへ達も一緒に腹を切れ。

平九郎。　はあ。

伴左衛。　さうすれば世間でもあつぱれ攘夷家の最期だと褒めてくれるだらう。

平九郎。　（迷惑さうに。）承知いたしました。では、これから一同にその趣を觸れてまゐりませう。

伴左衛。　併しおれが書置をかく聞、邪魔をしないやうにしてくれ。

（伴左衛門は奥に入る。）

平九郎。　どうも大變なことになつたな。

（平九郎はぼんやりと考へてゐる。下のかたより津村彌平次、本庄新吾、犬塚段八、三上郡藏がわたゞしく出で來り、いづれも武裝する心にて、羽目にかけたる胴を落けようとする。）

平九郎。　これ、これ、みんなどうするのだ。

彌平次。　刀屋のせがれも、薪屋のせがれも召捕られましたぞ。

平九郎。　それはおれも知つてゐる。

新吾。　つゞいてこゝへも捕手が向ふといふ噂ですから、その防ぎをしなければなりません。

段八。　先生はどうしておいでです。

平九郎。　先生は奥にゐる。

郡藏。　表口と裏口をどう防ぐか。先生のお指圖をねがひます。

平九郎。　まあ、待つてくれ。少し靜かにしろよ。

（彌平次等は稍はすに武裝する。下のかたより女中およしとおみつが手をひき合つて出づ。）

およし。　もし、皆さん。何事が起つたのです。

彌平次。　えゝ、おまへ達に話しても判らないことだ。

おみつ。　でも、なんだか怖いぢやありませんか。どうしたんです。

段八。　なんでもいゝから、早く行け、行け。

郡藏。　うかゝしてゐると、飛んだ目に逢ふぞ。

およし。　まあ、どうしたらいゝだらうねえ。

（およしとおみつは怖々ながらに立去る。）

平九郎。　先生は書置きをかいてゐるのだから、邪魔をしてはいけない。（考へて。）おれも少し用がある。貴公達はこゝに待つてゐてくれ。早々に下のかたへ立去る。）

彌平次。　併しこゝに待つてゐても仕方があるまい。

新吾。　兎もかくも表口を見張つてゐようではないか。

一同。　さうだ、さうだ。

（彌平次等四人も下のかたへ去る。やがて奥の襖を蹴放して、山杉藤作が逃げて出るを、手先三人が追つて出づ。）

手先。神妙にしろ、神妙にしろ。

甚作。人ちがひ……人違ひでござる。拙者は來客で……この道場の者ではござらぬ。人ちがひ……人違ひ……。

（甚作は叫びながら逃げかゝるを、手先等は追ひまはして組み伏せる。）

甚作。これは怪しからぬ。人違ひだといふのに……。人違ひ……人ちがひ……。

（甚作は叫びつゞけながら繩にかゝる。）

（三）

もとの薪屋の店さき。

（下のかたよりおかめは番太郎の權兵衛に送られて出づ。）

權兵衛。どうも飛んだことになりました。

おかめ。（泣く。）せがれが眞先に召捕られ、つゞいて奉公人がみんなお呼び出しになつて、一體どうなることでせうかねえ。

權兵衛。ほんたうにお氣の毒なことでございますよ。併しまあお前さんだけ歸して下すつたのはお上のお慈悲でございますから、お調べの片附くまでは謹愼しておいでなさるより外はありますまい。番屋の方に何か變つたことがあれば、わたしがすぐに知らせに來ます。

おかめ。何分おねがひ申します。

（おかめは巾着より小錢を出し、紙につゝんで遣る。）

權兵衛。ありがたうございます。

（權兵衛は下のかたへ行きかけて、小屋に眼をつけ、少しく思案しながら立去る。）

おかめ。（ため息をつく。）まつたくこれから何うなるのかねえ。

（おかめは眼をふきながら四邊をみまはし、これも小屋に眼をつける。）

おかめ。何かごそ〳〵云ふやうだが、犬でも這入つたかしら。

（おかめは小屋を覗きにゆくと、炭俵のかげには深堀平九郎が着流し、頬包りにて忍んでゐる。）

おかめ。おゝ、深堀さん……。

平九郎。叱つ、叱つ。

おかめ。（小聲で。）あなた……。いつの間にこんなところへ……。

平九郎。兎もかくも日の暮れるまでこゝに隠して置いてくれ。誰が來てもこゝへ入れてはならない

ぞ。

おかめ。　はい。

（平九郎は再び隠れる。おかめは不安らしく左右をみまはしてゐると、奥より女中おとよ出づ。）

おとよ。　お歸りなさい。

おかめ。　留守に何事もなかつたかえ。

おとよ。　はい。

（下のかたより野澤喜十郎は手先五六人を連れて出づ。あとより權兵衛も出づ。）

喜九郎。　番太郎、これか。（十手にて小屋を指す。）

權兵衛。　左樣でございます。

喜十郎。　炭部屋に隠れてゐるとは、師直のやうな奴だな。それ、引出せ。

（喜十郎の指圖にしたがひて、手先は小屋へ踏み込まうとすれば、内より炭俵や薪を投げ出す。）

手先。　御用だ、御用だ。

（手先は飛び込んで、平九郎をひき出せば、平九郎は一生懸命にふり放して下のかたへ逃げてゆくを、喜十郎と手先は追つてゆく。）

おかめ。　權兵衛にゝ）おまへさんが訴へたのかえ。

權兵衛。　隠して置くと、こちらの御迷惑になりますよ。

おとよ。　（上のかたを見る。）あれ、あれ、道場の先生が……。

おかめ。　おゝ、先生が縄附きになつておいでなさる。

權兵衛。　先生もたうとうお召捕りになつたのか。

（下のかたより近所の男、女、子供、往來の人などがわや〳〵云ひながら出づ。上のかたより與力井口金太夫が先に立ち、同心一人と手先五六人が大泉伴左衛門に縄をかけて出づ。そのあとからも男女大勢が附いて出づ。）

金太夫。　さあ、往來の邪魔だ。邪魔だ。退け、退け。

手先。　（口をそろへて。）退け、退け。

（伴左衛門は舞臺のまん中に立ちどまつて左右をみかへる。）

伴左衛門。　大きい聲で。）大勢のうちには拙者の名を聞き知り、顔を見識つてゐる者もあらうが、大泉伴左衛門の正連れ攘夷のはかりごと顯れて、今や召捕りの身と相成つたのだ。大鹽平八郎や由井正雪の二代目と思ふな。拙者は楠や新田にも劣らぬ、日本國の忠臣義士だぞ。

死んだ後には神に祀れ。

金太夫。

さあ行け、ゆけ。

（金太夫等に追ひ立てられて、伴左衛門は悠々として向ふへ牽かれてゆく。人々は感激の眼を以て見送る。）

幕

牡丹燈記

昭和二年二月作。

昭和二年六月。本郷座初演。

初演當時の主なる役割 ——喬生（市川壽美藏）劉生（市川八百藏）麗卿（中村福助）金蓮（市村家橘）隣の翁（大谷友右衞門）酒家の亭主（澤村源十郎）湖心寺の僧（市川小太夫）など。

明の瞿宗吉の「剪燈新話」が淺井了意の「お伽ぼうこ」に飜案され、山東京傳の「浮牡丹全傳」に飜案され、更に三遊亭圓朝の「怪談牡丹燈籠」に飜案され、更に又それが劇化されて屢々上演されてゐるのは、周知の事實である。そのほかにも、それを題材として新しく書きおろされた戲曲が二三種ある。而もそれらは皆わが國の世界に飜案されたものばかりであるので、わたしは別に新しい趣向を立てず、新しい解釋を加へず「剪燈新話」中の「牡丹燈記」を唯そのまゝに劇化して、原作に描かれてゐる幽怪凄艶の情趣を日本の舞臺に移してみたいと試みたのである。その成功と不成功とは、讀者の批判に任せるのほかは無い。（作者）

登場人物——喬生。その友人劉生。美女麗卿。その小婢金蓮。隣の翁。酒屋の亭主。湖心寺の僧。簫を吹く商人。花を賣る娘。燈を觀る人々。蹈青の娘二人。湖畔に遊ぶ人々な

どゝ

第一幕

（一）

支那の元代の末、至正二十年庚子の上元（正月十五日）の夜。

場所は浙東、明州の城外。上のかたに喬生といふ書生の家。窓には戸をおろしてある。それにつゞいて出入口の扉がある。下のかたは補鍋匠（鍋釜などの鑄かけをする職人）の翁の家で、これも同じやうな構へ、二軒のあひだの境には低い疎らの竹籬を結つて、一本の枯柳が立つてゐる。家の前は往來である。夜は更けて、月は明るい。

（喬生、門前に立つて、さびしさうに往來をながめてゐる。元宵の燈を觀て歸る男ふたりと小兒ひとり、下のかたより連れ立つて出で、上のかたへ行き過ぎる。やがて又、若い男と女の二人連れが瞻ましさうに肩をならべて通る。喬生は羨ましさうに其のあとを見送つてゐる。隣の家より補鍋匠の翁が出る。）

（喬生に聲をかける。）おまへさんはまだお寢なさらないのかね。

（喬生は矢はり二人のゆくへを眺めてゐる。）

（進みよる。）これ、喬さん。お前さんはまだ寢ないのかよ。（少し考へて。）いや、それも無理はないかなあ。

（喬生は心づいて、初めて振向く。）

喬生。おゝ、隣のお爺さん。おまへもまだ寢ないのか。

翁。夜は早く寢つかれないで、朝は早く眼がさめる。それが年寄りの因果で、どうも困つたものですよ。おまけに今夜は上元の晩で、表がさうぐ〳〵しいのでね。

喬生。燈籠物に出かけた人達が大分あるやうだね。

翁。宵からぞろ〳〵人通りがある。城内はさぞ賑はつたことでせう。おまへさんは見物に出なさらなかつたのだね。

喬生。わたしも見物に行かうかと思つたが、なんだか此頃は出不精になつてしまつて……。

翁。（うなづく。）いや、それも無理はない。わたしもよく察してゐますよ。あれほど仲の好かつ

た奥さんを疫病神に攫つて行かれたのだからなあ。（同情するやうに。）年は若し、容貌は好し、第一に氣立がよかつた。連れ添ふおまへさんには勿論のこと、近所の者にも親切で、優しくつて……。あんな好い奥さんがどうして早死をしたか。もつとも去年の疫病では、こゝらでも隨分大勢の人間が死んだからなあ。」

喬生。　物憂げに。）あゝ、もうそんな話は止して貰ひたい。

翁。　（又うなづく。）むゝ、止さう。よしませう。今更云つても何うにもならないことだ。併しそれからもう小半年にもなるのに、お前さんがいつまでもぼんやりしてゐるので、わたしはなんだか心配でならない。幾度もいふやうだが、お前さんのこゝろは私もよく察してゐますよ。死んだ奥さんの戀しいのも無理はないが、忘れられないのも有理だ。と云つて、あんまりくよ〳〵してゐると、今度はお前さんが病氣になる。

喬生。　（ひとり言のやうに。）あゝ、病氣になつていつそ死にたい。

翁。　それだから私も云ふのだ。若い身空でさう考へつめてばかりゐてはいけない。若い人は若い人のやうにちつと心を浮々させて、今夜のやうな晩には燈籠見物にでも出かけることですよ。

（下のかたより若い男と女の二人連れが出て、睦まじさうに列んで通り過ぎる。喬生は又見送る。）

翁。　（笑ひながら。）はゝ。若い同士で大分むつまじさうだな。

喬生。　（ひとり言のやうに。）さつきもあんなのが通つた。

翁。　はゝ、今夜のやうな晩には、あんなのが幾組も通りますよ。上元の燈籠見物は若い人たちの書入れ時ですからね。

喬生。　さうかも知れない。（ため息をつく。）わたしも一度はそんなことがあつた。

翁。　年寄りじみた事を云つてはいけない。おまへさんもまだ若い人ではないか。死んだ女のことばかり考へてゐないで、ちつと氣をかへて新しいのを探したらどうです。

（喬生はだまつて顏をそむけてゐる。）

翁。　（また笑ふ。）はゝ、わたしがそれを云ふと、お前さんはいつでも機嫌を惡くするが、わたしとても決して惡氣で云ふのではないから、まあ腹を立てゝお呉んなさるなよ。（空をみる。）あゝ、好い月だ。かういふ月を見てゐると、わたしも若い時が思ひ出されるな。

喬生。　（おなじく空を見る。）月の廻り工合では、今夜ももう餘ほど更けたやうだ。

翁。　宵のうちは隨分さう〳〵しかつたが、夜が更けたので人通りも少くなつた。春と云つても

更けるとまだ寒い。わたしもそろ〳〵戸をしめて寢るとしませうか。

喬生。　もう寢なさるか。

翁。　おまへさんももう内へ這入つたらどうです。では、お休みなさい。

喬生。　（氣のないやうに。）おやすみなさい。

（翁は自分の家に入る。遠く笛の聲がきこえる。喬生はやはり門口に立つて、見るともなしに空を仰いでゐる。下のかたより美女麗卿、十七八歳、小婢金蓮を連れて出る。金蓮はまだ少女で、髪を兩髻に結び、雙頭の牡丹燈を持つて先に立つ。ふたりの女は物いはず、しづかに上のかたへ行き過ぎる。喬生は麗卿の艶色にひき附けられたやうに、思はず二足三足追ひかけて又躊躇し、遂に思ひ切つてそのあとを追つてゆく。）

（二）

夜の田舍路。

（上のかたより麗卿と金蓮が出る。月は少しく陰つて、牡丹燈の光が前よりも明かに見える。やがてあとより喬生が糸に引かれるやうに、ふら〳〵と出る。かれは牡丹燈のひかりで麗卿の顔をすかして見て、いよ〳〵その美に神魂を奪はれる。）

金蓮。　（氣味わるさうに見かへる。）もし、おまへさんは何でさつきからわたし達のあとに附いて來るのです。

喬生。　（すこし躊躇する。）いえ、實は其、わたくしもそつちの方角へ歸るものでございます。

金蓮。　なんだかわたし達のあとを附けて來るやうで、氣味が悪くてなりませんから、早くお先へ行つてください。

麗卿。　（しづかに。）はて、そんな失禮なことを云ふものではありません。

金蓮。　でも、上元の晩には若い男の人たちが、女をみると色々のいたづらを仕掛けると云ひますから、なほ〳〵氣味が悪うございます。

喬生。　（あわてゝ。）いえ、飛んでもない。わたくしは決してそんな惡戯者ではございません。上元の晩と申しても、この通り夜もだん〳〵に更けて來て、めつたに人通りもございませんから、若い御婦人ばかりでは不用心だと存じまして、よそながらお送り申してゐるのでございます。

麗卿。　それは御親切にありがたうございます。

（金蓮は牡丹燈をかざし、麗卿と喬生は顔をみあはせる。）

喬生。（いよ〳〵叮嚀に。）失禮ながらあなた方はこれからどちらまでお歸りでございます。

麗卿。（恥かしさうに。）あの、わたくし共は月湖のほとりに住んでゐるのでございます。

喬生。はゝあ、月湖のほとり……。

麗卿。あの湖水を御存じでございませう。

喬生。こゝらであの湖水を知らないものはありません。湖水のほとりには湖心寺といふお寺がある。その御近所でございますか。

麗卿。（金蓮と顔をみあはせる。）左樣でございます。

喬生。今晩はやはり燈籠を御見物でございましたか。

麗卿。はい。あなたも御出でになりましたか。

喬生。いえ、わたくしは無精者でございますので、たうとう參りませんでしたが、城内は定めて賑やかでございましたらうな。

麗卿。大層な賑はひでございました。あなたのやうなお若いお方がどうしてお出でにならなかつたのでせう。

喬生。どうも男ひとりで行くのも面白くないので……。（笑ふ。）

麗卿。（微笑む。）あなたとならば御一緒に行きたいといふ人も澤山ございましたらうに……。

喬生。御冗談を……。わたくしのやうな鰥暮しの者は、唯ぼんやりと門に立つて、世間の若い人たちが仲よく繋がつて通るのを眺めてゐるばかりでございます。

麗卿。（すゝみ寄る。）では、あなたはお獨りでゐらつしやいますか。

喬生。昨年妻をうしなひまして、それからは唯ひとり寂しく暮して居ります。

麗卿。（同情するやうに。）それはまつたくお寂しいことでございませう。そんなお話をうかゞひますと、わたくしも身につまされて悲しくなります。（辭を陰らせる。）

喬生。では、あなたもお連合ひにお別れなさいましたか。

麗卿。いえ、連合ひなどを持つたことはございませんが……。父にも母にも早くわかれまして、ほかには兄弟もなく、差したる身寄りもございませんので、この金蓮と二人きりで、唯今のところに佗住居をいたしてゐるのでございます。

喬生。（これも同情するやうに。）成程それではお寂しいことでございませうな。

麗卿。男の方でさへも寂しいと仰しやるのに、わたくし共は女ばかりで……。なにを樂みに、な

喬生。　にを頼りに生きてゐるのか判らないくらゐでございます。お察し下さいまし。

麗卿。　（熱心に。）それは幾重にもお察し申します。その寂しさを慰めるために、今夜も二人連れで出てまゐりましたが、思ひのほかに夜が更けまして……。殊にこのごろは途中が物騒と聞いて居りますので、なんだか怖いやうでございました。

喬生。　御もつともでございます。あひにくに月も暗くなつて來ました。（空を見てかんがへる。）如何でございませう。これから月湖の邊までお歸りになるには、よほどの道程がございます。いつそ引返してわたくしの宅へお出でになりましては……。

麗卿。　あなたのお宅へ……。（金蓮と顏をみあはせて躊躇してゐる。）

喬生。　唯今も申す通りの次第で、やもめ暮しの穢いところではございますが、春の夜寒を凌ぐだけの用意はあります。夜もおひ〳〵に更けてまゐりまして、今も仰つしやる通り、途中も物騒でございますから、御不自由でも今夜はわたくしの宅へお泊りなさいまして、あした の朝早くお歸りになつた方が宜しからうかと思ひますが……。

麗卿、　でも、初めてのあなたのお宅へ出まして、剰々しく御厄介になりますのは、あんまより厚かましいやうでございますから……。

喬生。　（遮つて。）いえ、構ひません、かまひません。あなたの方さへ御差支へがなければ、御遠慮なくお出でください。

麗卿、　（金蓮をみかへる。）これ、どうしたものであらう。

金蓮。　折角あのやうに仰しやるのでございますから……。

麗卿。　御厄介になるとしませうか。

金蓮、　これから先にはまだ寂しい道がありますので、わたくしも實は怖くてならないのでございます。

喬生、　それですから是非ともわたくしの宅へお戻りください。どう考へても心配で、このまゝあなた方をお歸し申すことは出來ません。さあ、どうぞお戻りください。

麗卿。　ほんたうにお邪魔ではございますまいか。（喬生の顏をみる。）あなたのやうなお方がお獨りでゐらつしやると云ふことは、どうしても嘘のやうに思はれてなりませんが……。

喬生。　嘘かほんたうかは來て御覽になれば判ります。妻のない後はまつたくの鰥暮しでございます。

麗卿。それがどうもまだ疑はれて……。（こゝろありげに再び喬生の顔をみる。）あなたはよもやお欺しなさるのではございますまいね。

喬生。なんであなたを欺すものですか。なぜそんなにわたくしをお疑ひなさるのです。

麗卿。あなたに限らず、若い男の方は女をだますのが上手だと聞いてゐますので、どうも油斷がなりません。

喬生。世間の男はどうだか知りませんが、わたくしが嘘をつくやうな男でないことは、今夜の月の前で誓ひます。

麗卿。屹とお誓ひなさいますか。

喬生。誓ひます、誓ひます。（ひざまづかうとする。）

麗卿。いえ。それには及びません。

喬生。では、すぐにおいでください。さあ、御案内申します。

（喬生は先に立つて引返してゆく。麗卿は金蓮をみかへり、そのあとより續いてゆく。）

もとの喬生の家の前。月は暗く、夜烏がしきりに啼く。

（となりの翁は扉をあけて出づ。）

翁。（空をみる。）おゝ、月はすつかり暗くなつた。どこかで頻りに夜烏が啼くぞ。なんだか忌な晩だな。今夜はどうも寢られさうもない。

（翁は扉をしめて内に入る。やがて金蓮は牡丹燈を持つて先に立ち、そのあとより喬生と麗卿は手をひき合つて出る。喬生はわが家を指さしてそこだと敎へれば、麗卿はうなづく。喬生は進んで扉をあけ、麗卿をまねき入れる。金蓮は燈をかざしてあたりを窺ひ、これも續いて内に入りて扉をしめる。夜はいよ〳〵暗くなる。隣の翁は蠟燭を持つて出て、外から喬生の家をうかゞふ。）

翁。はゝ、連れて來た、連れて來た。喬さんもやつぱり若い人だな。

（翁は笑ひながら内に入る。あたりは眞暗になる。）

第二幕

牡丹燈記

——幕——

（一）

喬生の家の内部。正面に出入口の扉がある。上のかたには寝室のあるこゝろで帷をおろしてある。まん中に卓を据ゑ、卓の上には花瓶を置いて梨の花を生けてある。下のかたは壁で、壁には美人を描いた一幅がかけてある。

（第一幕より半月あまりの後、二月のはじめの午過ぎる頃。喬生は前よりも蒼ざめて窶れた顔色、榻に腰をかけて、眼のまへに書物を置いたまゝで卓にうつ伏し、うと〳〵と眠つてゐる。やがて入口の扉をたゝく音がきこえる。喬生は一旦顔をあげたが、懶いやうに又うつ伏してゐる。叩く音は續けてきこえたが、喬生はやはり默つてゐるので、外では待ちかれたやうに扉を推して、隣の翁が覗き込む。）

翁。　やつぱり内にゐなすつたのか。此頃はめつたに外へ出る筈はないと思つてゐたら、案の通りだ。もし、喬さん、喬さん。なんぼ疲れてゐると云つて、ひる寝も好加減にするがいゝでせうぜ。喬さん、喬さん。はゝ、どうしたものだ。

（呼ばれて、喬生はやはり懶げに顔をあげる。）

喬生。　（力のない聲で。）まだ日は暮れないかね。

翁。　寝ぼけてはいけない。日が暮れるどころか、わたしは今やう〳〵午飯を食ひに歸つて來て、これから又かせぎに出ようとするところだ。まあ、表へ出て御覽なさい。明るい日が丁度わたし達のあたまの天邊にあるのだ。

喬生。　やれ、やれ。（嘆息して。）春の日は長いな。

翁。　おまへさんのやうに毎日ぶら〳〵してゐて、殊に此頃のやうに、碌々に本も讀まずに寝てばかり暮してゐたら、定めて日が長いことだらう。ちつと表へ出てみたら何うですね、今もいふ通り、明るい日が一面に光りかゞやいて、そこらはめつきりと春らしくなりましたぜ。（云ひながら花瓶に眼をつける。）とは云つても、梨の花はすこし早いな。どこから折つて來なすつた。

喬生。　（喬生はだまつて笑つてゐる。）

翁。　（かんがへる。）ちつとも表へ出ないお前さんがどうしてこんな花を……。これは貰つたのかな。え、さうですかえ。

喬生。　（笑ひながら。）まあ、どうでもいゝではないか。

翁。　いや、それがよくないのだ。この花は誰が持つて来たのですよ。

喬生。　（やはり笑ひながら。）どうもうるさいな。おまへの知つたことでは無いといふのに……。

翁。　（起つて歩きはじめる。）

（鸚鵡がへしに。）おまへの知つたことでは無い。……はゝ、ところが知つてゐますぜ。みんな知つてゐますぜ。（他の榻に腰をかける。）

喬生。　（やゝ真面目になる。）知つてゐるとは……。なにを知つてゐるのだ。

翁。　（しづかに。）この花を吳れた女が毎晩ふたり連れで来る事をちやんと知つてゐるのですよ。

喬生。　（翁生はだまつて翁の顔を見つめてゐる。）

翁。　おまへさんが隠してゐても、わたしの方ではちやんと知つてゐますよ。十七八の美しい女が牡丹の燈籠を小女に持たせて、毎晩こゝへ尋ねて来る。はゝ、どうです。それに間違ひがありますかな。

喬生。　（翁生は矢はり默つて立つてゐる。）

それに就て少しおまへさんに話したいことがある。まあ、こゝへお掛けなさい。

翁。　（冷かに。）なにを話して聞かせようといふのだ。

翁。　それだからまあこゝへお掛けなさいと云ふのに……。どうも強情な人だな。（起つて喬生の手を把り、無理に榻にかけさせる。）一體あの女たちは何者ですね。

喬生。　（うるさゝうに。）お前がそれを詮議してどうするのだ。

翁。　おまへさんの命を助けてあげたいからだ。

喬生。　なに、命を助ける……。

翁。　むゝ。うつちやつて置けば、おまへさんの命は遅かれ早かれ無い物だと思はなければならない。

喬生。　（笑ひ出す。）まあ、からかふのは止して貰はう。はゝゝゝゝゝ。

（喬生は笑ひながら又起ちあがるを、翁は再びひき戻して来る。）

翁。　先月の上元の晩からお前さんの家へ若い女がたづねて来る。これでまあ死んだ奥さんのことも忘れて、まことに好鹽梅だと、わたしも内々は喜んでゐたのだが、それ以来どうもお前さんの様子が可怪い。顔の色もだん〳〵に蒼ざめて、なんとなく影が薄くなつたやうにも思はれる。どうも少し變だと氣がついたので、實はゆうべ……。かう云つたらお前さんが又怒るかも知れないが、境の壁に穴をあけて……。

喬生。え。（壁のかたを見かへる。）

翁。（下のかたの壁を指さす。）それ、そこの壁が少し毀れてゐるので、それを隠すために掛物がかけてあるでせう。その毀れたところへ穴をあけて、掛物の下から窃と覗いてみたのです。

喬生。（翁の腕をつかんで小突く。）怪しからんことをする男だ。いくら隣同士でもそんなことをして好いと思ふのか。二度とそんなことをしたら、老人でも勘弁しないぞ。恥知らずめ。

翁。それは勿論悪いに決つてゐるが、まあ落付いてそのあとの話を聞いてください。

喬生。だれが聞くものか。（翁を突き放して上の方へゆく。）呆れた奴だ。

翁。聞かないと云つても、聞かせなければならない。わたしがその壁の穴から覗いてみると、いや、思ひ出してもぞつとする。（氣味悪さうにそこらを見まはして聲を低める。）おまへさんはこゝで骸骨と向ひ合つて、何か嬉しさうにひそ〳〵と話してゐる。

喬生。なに、骸骨……。（あざ笑ふ。）おまへは飛んだ夢をみたものだ。

翁。わたしも一旦は夢ではないかと疑つたが、夢でない、夢でない。（頭をふる。）たしかにそれを見とゞけたのですよ。

喬生。いや、夢だ、夢だ。わたしも子供のときには、骸骨が墓場で踊つてゐる夢なぞを見たことがあつたよ。子供や老人は色々の變つた夢をみるものだ。

翁。いや、まあ、聞いてください。それを一目見たときには、わたしも總身の血が一度に氷のやうになつてしまつたが、それでも若や夢ではないか、若や又なにかの見違ひではないかと、氣をおちつけてよく覗いてみると、やつぱり骸骨……。たしかに骸骨に相違ないのです。それが又おどろくではないか。お前さんと向ひ合つてゐるのは骸骨で、そのそばに附いてゐるのは小さい人形のやうなものだ。

喬生。（やはり笑つてゐる。）おまへは念の入つた夢をみたものだな。

翁。骸骨や人形に魂が這入つて、毎晩お前さんのところへ通つて來るなどといふのは、どう考へても唯事ではありませんぜ。

喬生。それが本當なら唯事ではあるまいよ。

翁。いや、本當だといふのに……。なぜお前さんはわたしの云ふことを眞面目に聞いてくれないのかな。

喬生。まじめに聞かないのが當りまへだ。（笑ふ。）ばか〳〵しいにも程がある。いくら春の日が長くつても、わたしが退屈してゐても、おまへの相手になつてゐるのは御免だ。もう歸つて

くれ。

翁。　おまへさんは何かの魔物の邪氣に觸れて、心をすつかり奪はれてしまつたのだ。どうも困つたものだな。長年のなじみだから、わたしが親切に教へてあげるのだ。どうぞ正氣に立復つてください。本心に戻つて下さい。毎晩お前さんのところへ來る女は、決して眞人間ではないのですよ。鬼や幽靈が美しい女に化けて來て、男を惑はしたといふ話は昔から澤山ある。おまへさんは學者だから、そんなことは私よりもよく知つてゐる筈だ。

喬生。　えゝ、判つた、わかつた。もう澤山だ。

翁。　ほんたうに判りましたか。

喬生。　（じれる。）なんでもいゝから歸つてくれ、歸つてくれ。

翁。　（喬生は翁を押出さうとする。）歸れといふなら歸りもするが、お前さんはほんたうに判りましたかな。

喬生。　うるさいな。判つた、判つた。

（喬生は無理に翁を引つ立てゝ突き出さうとする機に、卓の上の花瓶は床にころげ落ちて微塵に碎け、梨の花も散亂する。

翁。　おまへさんは不斷にも似合はず、急に氣が暴くなつたな。

喬生。　えゝ、やかましい。だまつて出て行け、出てゆけ。ぐづ〳〵してゐると、ひどい目に逢はせるぞ。

翁。　どうも亂暴だな。

喬生。　（翁は喬生に手あらく突き出されて、よろけながら表へ出てゆく。喬生は戸をぴつしやり閉める。）（罵る。）好い年をして馬鹿なことを……。途方もない耄碌ぢゞいだ。（壁の際へ行つて、掛物をかゝげて見る。）一體が少し毀れかゝつてゐるところへ、こんな惡いたづらをして……。（舌打ちする。）まつたく仕樣のない奴だな。一日の暮れないうちに何とか繕つて置かなければなるまい。（云ひながら卓の方へ戻つて來て、碎けた花瓶に眼をつけて又もや舌打ちする。）あいつのお蔭で、大事の花瓶をこの通りだ。花瓶は兎もかくも、あの女がゆうべ折角持つて來てくれたばかりの花を、すぐに滅茶滅茶にしてしまつては怨まれるだらう。なにか都合のいい申譯をかんがへて置かなければならない。どうも困つたことをしたな。

喬生。　（喬生は落ちたる梨の花を拾ひあげ、榻に腰をおろして眺めてゐる。）隣のぢゝいの云ふ通り、梨の花はちつと早いな。自分の家の庭に咲いたのだと云ふことだ

が……。あの女の住居は月湖のほとりだと聞いてはゐるが、まだ一度もたづねて行つてみたことがないので、どの邊だか判らない。これはおれも少し迂濶であつたかな。

翁。（喬生は花をながめながら少し考へてゐると、入口の扉をたゝく音が又きこえる。）

明けてください、明けて下さい。

翁。（喬生はだまつて考へてゐると、翁は戸を推して入り來る。）

どうも氣になるので又來たが……。これ、喬さん。後生だからもう一度よく考へてください。おまへさんは一體あの女がどこから來るのか。確にその居所を知つてゐなさるのかな。

喬生。（ふり向く。）お前がゆうべ見たといふのは屹と本當だね。

翁。ほんたうです、本當です。あの女は骸骨に相違ないのですよ。

喬生。むゝ。

（喬生は衝と起ちあがり、梨の花を持つたまゝで足早に表へ出てゆく。翁は呆やうに立つてゐる。これにて幕を一度おろして、すぐに再び幕をあける。）

（二）

第一幕の喬正の家の前。

（隣の家の前では、吹革その他の鑄かけ道具を持ち出して、翁は鍋の繕ひをしてゐる。下のかたより喬正は梨の枝を腰のうしろに挟み、急いで出る。）

翁。おゝ、喬さんか。息を切つて、顔色を變へて、どうした、どうした。

喬正。お爺さん、堪忍してください。わたしが悪かつた、悪かつた。

翁。まあ、待ちなさい。ひどく息を切らしてゐるやうだ。

（翁は内へ入りて茶碗に水を汲んで來る。そのあひだも喬生はおど〳〵して左右を見廻してゐる。）

さあ、さあ、水でも飲んで氣を落付けなさい。おまへさんは日の暮れるまでどこへ行つてゐたのだ。

喬生。（水を飲んで、ほつと息。）月湖のほとりまで行つて……。

翁。（喬生はひどく疲れてゐるらしいで、翁は自分の腰かけを讓つて掛けさせる。）

あの湖水の邊へ何しに行きなすつたのだ。

喬生。（腰なる花の枝を把つてみせる。）この花の咲いてゐる家があるか無いかを探しに行つたのだ。

翁。あゝ、さうか。（うなづく。）さうして、その家はありましたかえ。

喬生。　あの女は小女と二人きりで、湖水の岸に住んでゐるといふので、念のために探しに行つてみたが、そんな家は西にも東にも……。堤の上にも橋の際にも、どこにも見當らなかつた。

翁。　さうでしたか。（ため息をつきながら又うなづく。）いくら探してもそんな家のあらう筈がない。それは無いに極つてゐる。骸骨の住んでゐるところは、寺か墓場の外はありませんからね。

喬生。　今まではお前を疑つてゐたが、まつたくお前のいふ通り、あの女は二人ながら唯の人間ではないらしいので、わたしはだん〳〵不安心になつて來て、すぐに其足で玄妙觀へ駈け込んだのだ。

翁。　それは好いところへ氣がつきなすつた。玄妙觀の魏法師は王眞人のお弟子で、御祈禱やおまじなひをすることに於ては當時第一といふ噂だ。

喬生。　わたしもそれに氣がついたので、すぐに魏法師をおたづね申して、その膝の前にひざまづいてお救ひを求めると、法師はわたしの顏をひと目見て……。（辟をふるはせる。）おまへの顏には邪氣が滿ちてゐる。

翁。　（そつとしたやうに。）むゝ。おまへの顏には邪氣が滿ちてゐる……。魏法師樣がさう仰しやいましたか。

喬生。　うか〳〵してゐると、命が無い。

翁。　うか〳〵してゐると、命がない……。やつぱりわたしの云つた通りだ。それで、なにか有難い御祈禱でもして下さいましたか。

喬生。　（懷中から朱符二枚を出す。）その禍を攘ふために此の二枚のお符を下すつて、一枚は門口に貼付けて置け。一枚は寢床に貼付けておけ。さうすれば、怪しい女どもは決して近寄ることは出來ないと仰しやつた。

翁。　（朱符をうけ取つて押頂く。）やれ、やれ、それは有難いことだ。これを門口と寢床へ貼つておけば、あの骸骨も近寄ることは出來ないのか。（朱符を再び頂いて、喬生に戻す。）もうそのほかには何も仰しやつたことはありませんでしたか。

喬生。　この後決して月湖のほとりへは足踏みをするなと。

翁。　むゝ。

喬生。　あの湖水の岸には湖心寺といふ古い寺がある。そこへも決して立寄つてはならないと、堅く戒められた。

翁。　湖水の邊へは足踏みをするな……。湖心寺へは決して立寄るな……。それは別にむづかし

い事でもない。それで災を防げるなら、お前さんもその戒めをよく守るがよからう。

喬生。それは勿論のことだ。なにしろお前のお蔭で、わたしは危い命を救はれたのだ。さつきの失禮を詫びた上に、あらためてお禮を云ひます。

翁。いや、それもやつぱりお前さんの運が強いのだ。わたしもそれで安心した。まあ、まあ、めでたい、目出たい。

喬生。（まだ不安らしく。）併しこのお符を貼付けただけで、確にあの女どもは姿を見せないでせうか。

翁。魏法師様がさう云つて受合つて下すつた以上は大丈夫ですよ。

喬生。大丈夫でせうか。

翁。決して心配することはありませんよ。（あたりを見て。）おゝ、いつの間にかすつかり暗くなつた。

喬生。暗くなりました。（これも左右をみかへる。）あゝ、なんだか急に怖ろしくなつて、どうしていゝか判らなくなつた。お前さんも加勢して、どうぞわたしを助けてください。お願ひです、お願ひです。

翁。わたしにどうなる事でもない。この上はそのお符が何よりの頼みだ。ちつとも早く貼付けたらよからう。

喬生。さうです、さうです。

（喬生はあわてゝ我家の内に入る。翁も道具を片附けて我家に入る。やがて喬生は内より出で、一枚の朱符を門の扉に貼りつけてゐると、翁は蠟燭を持つて再び出る。）

翁。おゝ、おゝ、それでよからう。

喬生。いゝでせうか。

翁。それで安心だ。安心だ。

喬生。なか〳〵安心してはゐられません。いつそ今夜はおまへの家へ泊めて貰へますまいか。

翁。さうしたら、骸骨はわたしの家へ押掛けて來るだらう。

喬生。え。

翁。おまへさんはそのお符を貼つてある家のなかに、おとなしく閉ぢ籠つてゐなければならないのだ。左もなければ折角のお符がなんの役にも立つまいではないか。

喬生。成程それもさうですね。（ため息をつく。）あゝ、こんなことにならうとは夢にも思はなかつ

た。

翁。（勵ますやうに。）かういふ時に氣を弱くしてはいけない。さあ、さあ、早く家へ這入りなさい。もうやがて燈籠の灯のみえる時分だ。

喬生。（ぎよっとして。）もう灯が見えましたか。

翁。いや、まだ見えはしないが、もうそろ〳〵と見える時刻だらう。初めのうちは夜ふけであつたが、此頃は宵から來るやうだね。暗くなるとすぐに來ます。

喬生。どうもあの燈籠の灯が忌に陰氣で、なんだか鬼火か人魂のやうだと思つてゐたら、やつぱりさうであつたのだ。いや、いや、もうこんな話はしない方がよからう。わたしは内へ這入りますよ。

翁。もし……。（翁の袖に縋る。）おぢいさん。

喬生。はて、氣を弱くしてはいけないと云ふのに……。

（翁は振切つて内に入る。喬生はぼんやりと突つ立つてゐたが、やがて逃げるやうに我家へ駈け込んで、内からしつかりと扉をしめる音。夜はいよ〳〵暗くなつて、牡丹燈を持つたる金蓮と麗卿の姿があらはれる。ふたりは喬生の門に立ち寄つて進み得ず、金蓮は燈をかざして柱の朱符を照して見せると、麗卿は怨めしさうにぢつと眺めてゐたが、やがて思ひ切つて戸口に寄らうとするを、金蓮は袖をとらへて控へる。そのうちに、金蓮は隣の家のまへに落ちてゐる梨の花をみつけて指させば、麗卿は拾つて來いといふ。金蓮はこゝろ得て持つて來れば、麗卿はその花を懐しさうに眺め、再び喬生の家を怨めしさうにみかへりて、花を兩袖にしつかと抱きしめるかと思ふと、その姿は消える。金蓮も消える。唯、牡丹燈のみが後に殘つて、迷ふがごとくに闇の中を流れてゆく。）

——幕——

第三幕

（一）

おなじ年の三月、清明の節。晴れて暖かく、春色天地にあまねき時である。

正面は月湖、湖畔に綠の柳が栽ゑてある。岸には青い草が生へてゐて、一艘の書舫が繋いである。

上のかたには朱欄の橋がある。所々に紅い桃や白い李の花も咲いてゐる。下のかたには酒を賣る家の入口がみえて、青簾が春風になびいてゐる。

（遊樂の人々、男、女、子供が打ちまじつて、衣香扇影、いづれも長閑な氣分で三々伍々徘徊してゐる。橋の袂には踏青の娘たちも見える。玩具を賣る商人が簫を吹いてゐる。花を賣る娘も立つてゐる。ときく〳〵に小鳥の囀る聲もきこえる。）

商人。　さあ、さあ、お買ひください。お慰みには簫を吹きます。

（子供等は玩具屋の前にあつまる。）

娘。　さあ、さあ、花をお召しください。

男一。　（少し醉つてゐる。）花などは金を出して買はずとも、そこらの枝を折つてゆけば澤山だ。

娘。　そんな悪いことをなされずに、わたくしの花をお召しください。

男二。　（これも醉つてゐる。）あの玩具屋は簫を吹くといふが、おまへは何をして見せるのだ。

娘。　（笑ふ。）わたくしはなんにも出來ません。唯この花をお買ひ下さればよいのでございます。

男三。　賣れ殘りを唯買ふといふことがあるものか。おまへも何か歌つて聞かせてはどうだ。

娘。　わたくしには歌へません。

男一。　どうも愛嬌のない女だな。買つて遣るから何か遣つてみせろよ。

（鶯の聲がきこえる。）

娘。　あれ、あれ。わたくしの代りに鶯が歌つて居ります。

男二。　成程うぐひすが鳴いてゐる。

（鶯の聲つゞけてきこえる。）

男三。　では、あれをお前の名代にして、一枝買ふとしようか。その桃の枝をくれ。

娘。　ありがたうございます。

男一。　たうとう賣れ殘りを買はされたのか。はゝゝゝゝ。

（男三は錢を出して桃の枝をかひ、肩にかついでゆく。男一と男二も笑ひながら橋を渡つてゆく。そのあひだに、他の遊人も思ひ〳〵に往來する。）

商人。　姐さん。なか〳〵繁昌だね。

娘。　お天氣が好いので、おたがひに仕合せですね。

商人。　まつたく好い天氣だ。さあ、日の暮れないうちに場所を變へてもう少し稼がうかな。わたしもほかを廻つて來ませうか。

娘。